

平成 28 年度

日本女子大学大学院人間社会研究科

博士学位論文

〈女性美〉の歴史社会学

—1880 年から 1930 年までの「近代性」の位相—

木村絵里子

〈女性美〉の歴史社会学
—1880 年から 1930 年までの「近代性」の位相—

■目次

序章 近代における「女性美なるもの」の歴史に向けて…………… 4

- 0-1. はじめに
- 0-2. 本論文の目的
- 0-3. 〈女性美〉をめぐる研究の現在の状況
 - 0-3-1. 抑圧としての〈美〉
 - 0-3-2. 〈女性美〉とアイデンティティ、そして快樂
- 0-4. 国民国家論と消費社会論の課題として
 - 0-4-1. 国民国家論における女性の諸問題
 - 0-4-2. 1930 年代の「現代性」
 - 0-4-4. 〈女性美〉なるものの「近代性」をめぐって
- 0-5. 本論文の方法
- 0-6. 本論文の構成

第 1 章 「東京百美人」展という経験

——19 世紀末における「美人写真」と「芸妓」……………17

- 1-1. はじめに
 - 1-1-1. 芸妓と写真
 - 1-1-2. 名刺判写真の二つの様相
- 1-2. 流通する「芸妓」のイメージ
 - 1-2-1. 評判記における芸妓
 - 1-2-2. 芸妓の写真というスペクタクル
 - 1-2-3. 『文芸倶楽部』の「美人写真」
- 1-3. 「美人画」から「美人写真」へ
 - 1-3-1. 美人画における「美人像」
 - 1-3-2. 「美人写真」が写すもの
- 1-4. 論じられる「美人」と「顔」

第 2 章 衛生学における〈皮膚〉へのまなざし……………37

- 2-1. はじめに
- 2-2. 〈皮膚〉の知覚
 - 2-2-1. 「色の白さ」と徳容
 - 2-2-2. 「科学」的容儀
 - 2-2-3. 「皮膚衛生」による美身術
- 2-3. 「美容法」としての衛生
 - 2-3-1. 〈皮膚〉の色
 - 2-3-2. 『女学世界』の衛生問答
 - 2-3-3. 文化的価値としての「色の白さ」
- 2-4. 化粧と美容の近代性
 - 2-4-1. 美顔術という商品
 - 2-4-2. 〈皮膚〉から〈肌〉へ

第3章 化粧品広告からみる『女学世界』の変容	53
3-1. はじめに	
3-1-1. 『女学世界』概観と誌面構成	
3-2. 『女学世界』の広告の概要	
3-2-1. 『女学世界』広告の数的動向	
3-2-2. 化粧品広告と、類似する商品広告	
3-3. 記事にみる化粧品と美容薬	
3-3-1. 「衛生顧問」の美容薬批判	
3-3-2. 「美容問答」における化粧品の推奨	
3-4. 広告と記事の間の連続／非連続	
3-4-1. 化粧品の「記事風広告」	
3-4-2. 令嬢の日記	
3-4-3. 広告／記事における境界の消失	
3-4-4. 広告と記事にみられる矛盾	
3-5. おわりに	
第4章 資本としての〈女性美〉	76
4-1. はじめに	
4-2. 女性雑誌における「美人論」の展開（1）	
4-2-1. 『女学世界』の「美人論」	
4-2-2. 表情という内面性	
4-3. 女性雑誌における「美人論」の展開（2）	
4-3-1. 『婦人世界』の「美人論」	
4-3-2. 誌上の「見合い写真」	
4-3-3. カメラ・アイによる自己像	
4-3-4. 配偶者選択基準としての〈女性美〉	
4-4. おわりに	
第5章 衣服の流行の語られ方	99
5-1. はじめに	
5-2. 「女学生」の身分とスタイル：『女学世界』	
5-2-1. 束髪と袴による身分の提示	
5-2-2. 「女学生スタイル」のトリクルダウン	
5-3. 「芸妓発祥」の流行：『女学世界』	
5-3-1. 流行戦略としての「芸妓の装い」	
5-3-2. 装いにおけるコードの転倒	
5-4. 「個性」という共振：『婦人世界』	
5-4-1. 『婦人世界』における流行案内	
5-4-2. 『婦人世界』における流行批判	
5-4-2. 流行批判と流行案内の共振	
5-5. おわりに	
終章	121
■引用・参考文献	128

■凡例

- 一、一次資料・文献の引用文に関しては、ルビを除いてなるべく原文の字体・仮名遣いを尊重したが、表記ができない変体仮名や旧漢字に限っては現代のものに適宜改めてある。
- 一、一次資料・文献の引用文が読みづらくなると思われる場合には、引用元にあるルビや句読点を新たに加えた。ルビが右と左に二通りある場合は、右をそのまま上にルビをふり、左を後ろの（ ）内に示した。
- 一、一次資料・文献の引用文の「くりかえし」は「へ」、ルビの場合は、そのままくりかえして表記した。
- 一、一次資料・文献の引用文は、一部の場合は「 」内に、長文の場合は、本文中に一行空けて示した。
- 一、一次資料・文献からの引用文のうち、中略については「……」で示した。
- 一、一次資料・文献の引用元は、本文中に示した。
- 一、本文中で引用元の表記がない箇所は、それより前の引用元と同一である。煩雑になるため、省略した。
- 一、一次資料の引用元が雑誌である場合の引用元の表記は、(執筆者、記事タイトル、雑誌名、発行西暦[和暦]・発行巻数・号数)の順に示してある。雑誌の頁数表記は省略した。

序章 近代における「女性美なるもの」の歴史に向けて

0-1. はじめに

現在、女性身体とく美は、密接な結び付きをみせている。自分自身の身体はパーツ化された上でまなざれており、シミやシワのない艶のある肌、色鮮やかに彩られたネイル、コンタクトレンズやマスカラ、付けまつ毛によって巨大化をみせるアイメイクなど、ある種、過剰ともいえるほどのこだわりと装飾が散見される。そして現代では、それを可能にする商品や科学技術が異常なまでに発展し、その技巧のためのハウツーが多様な場で詳述されている。あるいは、「コスメフリーク」と呼ばれる人たちの化粧品などのモノに対するフェティシズム、発行部数が大幅に減少しているものの、あいかわらず属性やライフスタイルの志向性によって細分化されたファッション誌、それを持つ者の身分とは必ずしも結び付かないハイブランド・アイテム、もはや当人の顔をほんの少しだけ可愛く写すという目的からは大きく逸脱した「プリクラ」、カメラ・アプリを駆使した幻想的・遊戯的な「セルフィー（自撮写真）」、または顔を隠しつつも公開される、ナルシスティックにファッションモデルを気取ったSNS上の「今日のファッション・コーディネート」……。ここに挙げた事象は、どれも社会の全域はもちろん、特定の世代や階層という区切りを用いても、そのまとまりを確認できる類のものではなく、それぞれが社会のなかのある局域にみられる運動として分散している。あえて、共通している点を取りだすとするならば、おそらく多様なく美のあり方とそれに密着するパーツ化された身体へのまなざし、ということになるであろう。

これらは、すべて表層的な要素であるようにみえて、どこか自分自身と深く関わりのあるようにも思えるものでもある。またこれらのほとんどの行為が女性によってなされていることから、そこに明確なジェンダーの非対称性が認められる。ただし、それが女性にとって「強迫観念」であり、「強い社会的要請」であるとする駒尺喜美（1985）のような指摘は、現代の女性に対する記述としては、いささか極端にすぎるかもしれない。もちろん、少なからず男性の視線を内面化した結果としてみなすことのできる側面もあるのだが、これらすべてを男性優位社会における権力性の現れとして解釈することは、やや無理がある。

というのも、たとえば「アイデンティティとの再交渉」（Davis 1995）、「ボディプロジェクト」（Shilling 1993）、「エロティックキャピタル」（Hakim 2011=2012）、「私萌え」（米澤 2010）、「女子文化」（馬場・池田 2012）……という多様な解釈が可能のように、こうした行為はアイデンティティと深い関わりを持ちつつも、行為そのものに一種の快楽が宿っているような、そうしたカルチャーが膨らみつつあることもまた確かだからである。とりわけ米澤泉（2010）や馬場信彦・池田太臣ら（2012）が「女子の文化」として捉えた現象においては、どちらかという男性の視線は排除されており、その代わりに自分の、あるいは女性の視線が最も重視されている。この女性が女性に対して向ける身体へのまなざしというのも、やはり女性において特徴的であり、ジェンダーの非対称性がみられるものだ。以上のことから、現代のく女性美のあり方としては、パーツ化された身体と、それに対する男性不在のまなざしというものが、おそらく日本社会において（相対的に）かなり特徴的だといえるだろう。

ただ、こうした現代的なく女性美の起源を見出すことはそれほど容易ではない。現在のなく女性美のあり方において、いかなるところに「近代性」を確認することができるのだろうか。

0-2. 本論文の目的

本論文は、なく女性美をめぐって確認し得る現代の風景を対象化していくために、「日本近代」と位置づけられる時期、とりわけ1880年から1930年までの間から捉え返してみることにしたい¹。とはいえ、先に挙げた女性の女性による視線を重視する意識とは、きわめて現代的な現象であり、近代においてそれを見出すことは難しいのかもしれない。したがってここで問うてみたいのは、近代において、そもそもなく女性美という概念はいかにして生まれたのかということである。より詳しくいえば、まず「女性」というものを見出し、そこになく美が付随してくるという見方ではなく、「女性」となく美が結びついた形のなく女性美がいかにして立ち上がるのかということをついていきたいのである。

たとえば本論においては、近代における「女性美なるもの」と密接に関連する一つの重要な言葉として、「美人」というものが浮上してくる。近世では、「美人」という言葉は必ずしも「女性」だけを指し示すものではなかったのであり²、「美人」という言葉によって示される「女性」となく美の密接な結び付きというものは、おそらく近代を通じて形成されたものと考えられるのである。

ここで、このような強い関連性を「女性美」と定義しておきたいところではあるのだが、現段階では、ひとまず留保しておく。なぜなら、それは現代から「近代」を振り返り、局所的、かつ多様な言説のなかに立ち現れてくる「女性美なるもの」の記述を通して、明らかにすべきだと思うからである（本論では、こうした「女性美なるもの」を便宜上、なく女性美と表記する）。ゆえに本論は、「女性」となく美の結びつきを自明視する立場でも、または「女性」のなく美に抑圧性を見出し、批判する立場でもないことをまずはっきりと述べておかねばならない。

なく女性美を構成するものとしては、冒頭に挙げた事象にもみられたように化粧や衣服という要素がすぐに思いつくであろう。化粧や衣服については、「化粧文化史」あるいは「服飾史」として、これまで個別の対象としてその歴史が記述されてきた。とくに化粧文化史では、原始より現代までの間に、多様な化粧や技法のヴァリエーションが存在していたことが時系列的展開として示されている（久下 1970；村澤 1987；江馬 1988；高橋 1997；平松 2009 など）。村澤博人（1987）によれば、化粧文化史における明治・大正期とは、西欧文化の影響を大きく受けた時期として位置づけられ、「化粧の近代化」が、西

¹ 終章で詳述するが、それ以降については、本研究の次の課題として設定している。

² 井原西鶴の『世間胸算用』（1692）では、ある男子に対して「玉のやうなる美人」という表現を用いている。また三橋順子（2008）によれば、江戸中期における北尾重政の《東西南北美人》の「西方の美人 境町」では、性来の女性ではなく、女装の男性である陰間が描かれており、当時の感性と、「美人」といえば女性を思い浮かべる近代以降のそれとの違いについて指摘する（三橋 2008:102）。また歌舞伎の女形瀬川菊之丞を中心に描いた浮世絵《江戸三美人》（鈴木春信）などもある（本論第1章参照）。

欧より輸入され化粧法や化粧品が広まっていく過程のなかに確認される。そのような側面も多分にあるのだろう。ただ、このような見方は、あまりに現代的であるといわざるを得ない。そもそも、ここにおける女性と化粧の関係とは、女性は常に化粧などによって〈美しさ〉を体現することが要請され、かつ女性もそれを求めているという、ある意味で固定化されたものとなっている。そして、これらの関係を自明視した上で、社会・時代に応じて多様な価値基準や技法が取捨選択されながら変化してきたということを暗黙のうちに前提にしているように思われるのである。このようにして描かれた歴史は、現代の視点を密輸入した上で資料中心の実証主義を志向しているといえ、そこでは、たとえばそれぞれのアイテムに込められた意味合いなどが問題化されないままなのである。

しかし、かつて化粧に関するアイテムは、特定の身分や階層の者しかアクセスし得ず、当然、化粧によって〈美しさ〉を体現するということも、ごく一部に限られていた。つまり、〈美〉そのものとの距離、〈美〉を知覚する方法、そしてそれに対する態度というものを、現代と同じようにみなすわけにはいかないのである。過去において語られた〈美〉のあり方に接近しようとするとき、現在において自明なものとして捉えている位置づけや意味合いを相対化することを必要とする。というよりむしろ、その位置づけや意味合いそのものの成立過程こそが、考察されるべきところであると本論は考えている。

むしろ本論でも、化粧や衣服などは、〈女性美〉を構成していると考えられる多様な要素のうちにあるものとして位置づく（もちろんその要素はこれらに限られないが）。ただし、本論の目的は、各要素における美の基準や技法の歴史的変容を描くことではなく、これらを〈女性美〉との連関のなかで捉えていくことにある。つまり、「女性美なるもの」をみていくことができるとするならば、それは複数の要素の配置の作用や効果として、であるのだろう。それゆえに本論の各章で合焦される諸要素とは、〈女性美〉との密接な関連を示す、多くの異なった場における象徴的な局面として抽出されたものである。したがって本論は、各要素の変容を直線的、または進歩的に描き出すというものでも、「全体」を志向する歴史を示すものではない。化粧文化史や服飾史の蓄積が十分にあるにも関わらず、本論が改めて「女性美なるもの」の歴史を記述しようとする理由がここにある。

では、このような記述とは、いかにして可能になるのだろうか。そもそも本論が対象とする〈女性美〉とは、主観的な感覚に基づくもので、確かな実体があるわけではない。しかし、我々は、ふだん何らかの一定の様式に依拠しながら、〈美しさ〉について語っていることもまた事実であろう。そこで、ある一定の規則性を持って編制された「言説」を通して、〈女性美〉というものに込められた意味合いを捉えていくことが可能であると考えられる。本論の目的は、歴史社会学、とりわけ言説分析的手法を用いて、1880年から1930年までにおける〈女性美〉をめぐる多様な言説の布置を明らかにすることにある（方法については、本章3節で詳述する）。

0-3. 〈女性美〉をめぐる研究の現代的状況

本節では、社会学あるいはそれに近接する領域において、これまで〈女性美〉がいかにして観察され、分析されてきたのかを概観する。

0-3-1. 抑圧としてのく美く

女性のく美しさくというものが俎上に載せられたのは、女性史あるいはフェミニズム論においてである。とりわけ女性身体における抑圧性とジェンダー間の非対称性が批判的に検証されてきた。前述の駒尺（1985）によれば、確かに美の基準は時代・社会とともに変化するのだが、しかし、女性の装いには、変わらない側面もあるという。すなわち、女性が無力で頼りない存在であること示すために、人工的に行動を束縛し、かつ性的対象としての価値を高めるために作り出されているという共通性である。たとえば「和服（着物）」は、それを着る女性の動作を束縛するが、一方で、その束縛の範囲内での立ち振る舞いこそが、「女らしい美しさ」として讃えられてきた。このような「和服」の特性に現れているように、女性にとって「美しくあること」は義務であり、かつ強制の結果として立ち現れてくる。風俗や美意識と結び付いた「性差別」は、法律上のそれよりもはるかに根強く、女性と男性の間にある非対称性を示す「美のくさり」になるのである（駒尺 1985）。

実は、この駒尺の見方は、村上信彦による『服装の歴史（第2巻）』（[1956]1974）や『女の風俗』（1957）に基づいている。村上は、やはり女性の「キモノ」を「男の感覚をみたすためのもの」として位置づける。一例を挙げると「帯」が、実用性を無視して、広く、大きく、そして重く「畸形化」したのは、着る者ではなく「見る者＝男」のまなごしに依拠しているからだという（村上 [1956]1974）。当時の和服（着物）が、性的対象としての女性の動作を束縛するものであったのかについては、ここでは問わない。ただ、村上が、ある特定のまなごしによって、当時の女性の装いを捉えていることは確かである。村上の描く女性の「生活史」は、フェミニズム（ウーマン・リブ）の登場より前のものではあるが、和服（着物）において、近代の、あるいは女性の抑圧性を見出しており、この点が先の駒尺の議論へと引き継がれているといえる。もっとも、後の村上による『明治女性史』全四巻（1969-1972）は、唯物史観にもとづく井上清の『日本女性史』（1948）の「解放史」に対する批判が念頭に置かれており、女性を歴史の受動的な被害者としてではなく、抑圧のもとでも、ときにたくましさを見せるという、多義的な存在として捉えようするものである。それは上野千鶴子（1995）が指摘するように、女性の抑圧を「家」または「夫権」への従属として問題視するという点において、フェミニズムと共通した歴史観であった³。

一方、N. ウルフ（1991=1994）の議論は、欧米のフェミニズムにおいてく美くに関する女性の抑圧性を問題化したものである。ウルフによれば、女性は家父長制社会の論理のもとに外見の美醜によって序列化され、「美が女の本質である」というイデオロギーが「美の神話」として機能しているという。この「美の神話」は、ある種の身体の状態を「異常視」する科学技術やメディアと共鳴しながら維持されており、ここにおける女性は「美の神話」を内面化しそれに縛られた存在、つまりは「犠牲者」として位置づけられている（Wolf 1991=1994）。「美の神話」を問題視するR. フリードマンも同様の立場であると

³ 女性史からジェンダー史に至るまでの歴史観のパラダイム・チェンジについては、上野（1995）を参照。

いえよう（Freedman 1986=1994）。

しかしながら、K.デイヴィス（1995）は、同様にフェミニズムの立場でありながら、「美の神話」を内面化する女性を犠牲者としては捉えていない。デイヴィスは、「美容整形」を経験した女性たち（フェミニストも含む）にインタビュー調査を行った上で、「美容整形」を「アイデンティティとの再交渉」のための方法として位置づけた（Davis 1995：163）。女性にとって「美容整形」とは、自分自身の身体を性的客体として受け入れるためのものではなく、身体を操作することを通して「肉体をもつ主体」として自己を追及する手段となるのである。ただし、S.ボルドー（1997）が指摘するように、アイデンティティの再交渉という側面を持つ「美容整形」も、実は、アングロサクソン系の「白人美」や「若さ」を標準に定めている。こうした基準に従う限り、「美の神話」から自由にはなれない。

他方で、一部のフェミニストは、自分自身の顔立ちなど「ありのままの自分」を受け入れることの重要性を説くのだが、そうした「美の基準」を転換する試みが成功したとはいえない。「ありのままの美しさ」は、「自然」や「快適さ」としてファッションの一部に取り入れられただけで、化粧をまったくせず、スカートや下着を履かないという「政治的に正しい」道を行く女性たちは、フェミニストのなかでも限られていた。つまりフェミニスト自身でさえ、〈美しさ〉への執着から逃れることは容易ではない（荻野 2002：363）。

このようなジレンマに対して、吉澤夏子（1997）の議論は示唆的である。〈美しさ〉に関しては、主に男性が女性に対する評価権を持っており、その魅力の高低によって女性間に「序列化」が生じることは確かだが、逆に魅力のある女性にとってはそれが積極的な意味を持つ「女であることの効果」となる。それゆえに「美醜」における差別を告発しようとするならば、他の様々な「女であることの効果」、さらに「男であることの効果」さえも捨てなければならないが、すべての「女であること」や「男であること」が意味を持たない性差の消滅した社会など、論理的には成立し得ない。また当事者は、美醜をめぐる理不尽な評価を受けていると感じられたとしても、それは他の誰かの「心の中」で起こっていることであり、その不当性を客観的な証拠を提示して証明することは困難である。美醜をめぐる不平等感、社会的でありながらも論証され得ないからこそ、最終的には「個人的なものの領域」に行きつき、個人的に解決しなければならないものとして位置づけられる（吉澤 1997, 2012）。

先のフェミニズムの議論は、女性と〈美〉の結びつきを自明視せずに、それそのものを問題化しているという点において、先述した化粧文化史の立場とは大きく異なる。ただ、〈美〉の評価基準や「美しくあらねばならない」とする強制力が社会のなかにあることも確かなのだが、それを「抑圧性」という視点から捉える限り、〈女性美〉の多様なあり方を捉えることができなくなる。

0-3-2. 〈女性美〉とアイデンティティ、そして快樂

ただし、先述したようにデイヴィス（1995）が提示した「美容整形」を「アイデンティティとの再交渉」とであるとみなす視点は、消費社会の出現と同時にみられた身体に対する

関心の高まりという点において、重要な論点を含むものである。J. ボードリヤール (1970 = 2015) によれば、消費社会における衣服や化粧品などの一つひとつの商品は、その機能性や実用性だけでなく、差異の体系によって成り立つ記号として成立している。そこで消費は、コミュニケーションと交換のシステムとして、絶え間なく発せられる記号のコードとして、つまり「言語活動」（傍点引用元）として定義される（Baudrillard 1970 = 2015:142）。「商品広告」は、このような活動を最も鮮鋭的に示している。これらを通して独自の記号体系を構成する各商品は、それを消費する者が何者であるのかを示し、かつ消費する者も自己イメージを操作・演出するためにそれらを利用するのである。ここでは、先のウルフ（1991=1994）が指摘したような家父長制の論理に基づく「美の神話」が、同時に消費の論理を導く神話のなかに組み込まれているのだが、ただし、消費社会の文脈では、それは単に「個性神話」（上野1987）のヴァリエーションの一つでしかない。

他方で、ここで注目すべきことは、浅野智彦（2013）が指摘するように、そもそもアイデンティティが「選択・構成・加工の対象」であるという感覚が前提になっていることである（浅野 2013:60）。それは「レイト（ハイ）・モダニティ」（Giddens 1991=2005）や「リキッド・モダニティ」（Bauman 2000=2001）と表現され得る現代において、かつて問われるべきものとして位置づけられてはいなかったアイデンティティが、社会学的な課題として設定されていることとパラレルである。かつて「自然」で「所与」のものであったアイデンティティが、現代では、「職業」や「結婚・出産」といったその地盤が揺らぎ、その確からしさが消滅し、崩壊している（Bauman 2004=2007）。こうしたなかでアイデンティティや自分らしさは、「個性神話」と結びつく消費という形をとることによって、より多くの人々によって容易に追及され得るものへと昇格したのである（浅野 2013:60）。

A. ギデنز(1991=2005)もまた、近代の新しい段階（レイト・モダニティ）のなかで、かつて固定化されていた自己は、たえず自分自身で反省的に吟味し、作り直していく必要のある動的なものになったことを指摘している。この自己の再帰的プロジェクトにおいて、「身体」は、中心的な要素である（Giddens 1991=2005:111-112）。ここでいう身体とは、化粧品や服装といった外観や振る舞いなどを指す。レイト・モダニティにおける外観とは、ある部分でも職業やジェンダーのような社会的アイデンティティと結びついているが（たとえばそれが「ユニフォーム」という言葉で表現されるように）、それ以外の多くの場合、その選択は自由であり、個人的アイデンティティとして個人の差異を示すものとなる。C. シリング（1993）は、ギデنزの議論に依拠しつつ、この営みのなかに「健康管理」や「美容整形」、「ボディビル」を加えて、それを「ボディプロジェクト」と呼ぶ（Shilling 1993:4-6）。自らのアイデンティティの「選択・構成・加工」は、身体を作り変える技術と共振しながら、表層的な側面だけでなく、「生身の身体」に対しても働きかけられるのである。むろんそのぶん、いったいどの程度まで身体をコントロールすべきなのかという基準までもが失われつつあるのだが⁴。

身体とアイデンティティの関連という観点から、日本社会における身体文化の現代的諸相について論じているのが谷本奈穂（2008）である。谷本（2008）は、「美容整形」や化粧品

⁴ たとえば「美容整形」という身体加工は、医療技術であるものの、明確な「治癒」の基準は設定されておらず、曖昧である（木村 2006）。

という身体加工を通じて形成・維持される自己アイデンティティのあり方を考察している。このような自己・身体意識は、自己を取り巻く関係性が多元化・複雑化するなかで、内面に限らず外見のコントロールが重視されるようになったことを示しており、先のギデンズやシリングの議論に通ずるものである。一方、米澤泉(2008)は、とりわけ「美容専門雑誌」というメディアに着目し、そこで描かれる「化粧」を文化論的な観点から考察する。米澤(2008)によれば、1990年代後半以降増加した化粧(品)に耽溺する「コスメフリーク」たちは、インターネットのブログや口コミサイトを通じて、不特定多数とその化粧品を選んだ理由、入手方法、手に入れたときの喜び、使用感、他の商品との違いについて語り合うという、いわば「化粧語り」を始めたという。ここでは、化粧行為が身だしなみや美しくなるためだけの手段ではなく、化粧(品)について語り、それ自体を楽しむという「化粧の自己目的化」がみられるのである。それは化粧品という商品に対するある種のフェティシズムを示していよう。谷本や米澤の議論では、先のフェミニズム論とはまったく異なる見方によって女性の身体文化や化粧行為が捉えられている。両者の議論を、消費による記号の差異化ゲームが、「美容整形」の各施術や化粧品という商品を通してなされていると捉えることも可能であろう。その営みが消費領域と決して切り離し得ないという点は、現代的なく女性美>における一つの特徴である。

0-4. 国民国家論と消費社会論の課題として

上記の現代社会を対象とする考察は、多くの有益な論点が含まれているのだが、現在性の位相を自然視するという限界を指摘することもできるだろう。本論は、この種の普遍性への志向から逃れるために、<女性美>の構築をめぐる歴史社会学的視角を取りたい。だが、その際、単に当該の対象の構成過程を考察するというだけでは済まない。日本社会(日本近代)に対する、従来の漠然とした分析枠組みを再検討する必要がある。

0-4-1. 国民国家論における女性の諸問題

日本近代に関しては、とりわけ1980年代以降、「国民国家」という分析概念を中心に用いて議論がなされてきた。この国民国家の形成を問題化する視点は、ポストコロニアル研究の分野におけるB.アンダーソン(1983=1997)の議論をきっかけにして勢いを得た。アンダーソンは、国家を超歴史的なものとして自明視する立場に対する批判から出発しており、たとえば今日の世界地図のなかで一つの単位として描かれる国家とは、16世紀以降、西欧の資本主義経済が拡張されていく過程のなかで生みだされたものであるという。そして同じ国家に帰属する国民(ネーション)という意識は、共通の政治制度、経済制度、文化的環境における統合によって、「同質的な時間と同一の空間を共有しながらともに進む共同体」として、心に描かれ、想像されることを通じて形成され、ナショナリズムが育まれていく(Anderson 1983=1997)。

明治維新以降の近代国家のあり方も、この国民国家の形成という観点から論じ直されてきた。たとえば西川長夫(1995)は、アンダーソンの議論を援用しつつ、国家統合のため

の装置、あるいは国民統合のための強力なイデオロギーをモジュールとして捉えた（西川 1995:6）。と同時に、このような国民国家の相対化に伴い、問題化されたのが「国民」の創出過程である。「国民化」は、「文明／野蛮」の二項対立図式のなかで押し進められ（成田 1996）、軍隊、学校、工場を通して、文明国にふさわしい画一化された身体的規範が要請された（成沢 1997）。衛生面に関わる身体作法もここに位置づけることができ、たとえば政府による公衆衛生対策は、自国と他国、そして「われわれ」と「かれら」という二分法を形成しながら、下層社会や周辺諸国の人々に対する社会的な差別を生みだしていった（安保 1989；成田 1995）。これらの議論は、現代にみられる身体作法が国民国家形成期のプロジェクトのなかで成し遂げられたものとして、脱自然化する試みである。

また近代の女性教育や家族に関する諸問題も、「国民国家－国民化」という視角によって批判的に検証されている。小山静子（1991）は、「良妻賢母」という思想を「近代家族」の概念を用いて分析し、家族国家観にもとづく「特殊な戦前日本の女子教育規範」（深谷 [1966]1990）として捉えるのではなく、良妻賢母思想において期待される女性像が、イギリス・ヴィクトリア朝などの欧米の国家、あるいは戦後の日本社会とも連続し共通してみられるものであることを明らかにした（小山 1991）。また国家のまなざしは、家族・家庭にもそそがれており、小山（1999）は、従来、産業化の進展に伴い都市部に登場したと考えられてきた新中間層の家族が、実は生活改善運動などの、いわば国家の介入・干渉の強い影響下にあったことを指摘している（小山 1999）。小山の議論は、女性に関わる私的な営みとされることがらも、実に国家と無関係に存在するものではないことを示しており、女性を、国民化の対象として問題化し得る視座を提示する。このような枠組みによって、女性身体もまた、教育制度やメディアなどを通じて斉一的な近代的規範が要請された一つの間として位置づけていくことが可能になるであろう。

しかしながら、女性身体に関する諸問題の全てを、とりわけ本論が照準する〈女性美〉という問題を「国民国家－国民化」の枠組みだけでは捉えていくことはできない。国家による「富国強兵」策などの近代化プロジェクトは、やはり兵士や労働者となる男性を中心に課されていたのであり、たとえそれを補完する役割が女性に与えられていたにせよ、教育内容の違いや婦人参政権の否認に現れているように、男性と女性は国民化において決して「均一」ではなかったからだ（奥 1995）。つまり〈女性美〉に関わる諸問題が、たとえ国家的課題のなかに組み込まれたとしても⁵、男性に向けられた課題と比べると、はるかに統制はゆるく二次的なものであったのである⁶。

⁵ 本論第3章で論じるように、それは典型的には衛生思想の普及を試みる言説のなかに見出し得る。また第4章でも言及するが、井上章一（1991）や渡部周子（2007）によれば、〈美〉に関する諸問題は、「美人罪惡論」あるいは「美育」として（否定／肯定という違いがあるにせよ）、女子教育の文脈のなかにも確認される。ただし、これら女性に課された「規範」だけでなく、そのような「規範」が語られる必要性、つまり対抗する言説に着目する必要があるが、そのためには「国民化」という観点からだけで捉えていくことは不十分である。

⁶ また今田（2007）は、明治期から昭和初期にかけての少女雑誌の分析に基づき、近代の女性に求められた「妻」、あるいは「母」役割とは異なる「少女」というカテゴリーの誕生とその揺らぎについて論じている。「少女」という存在もまた国民国家論の視角のみに

0-4-2. 1930年代の「現代性」

他方で、2000年代以降、とりわけ消費の領域に着目しながら、現代性（モダニティ）の始まりを1930年代前後に見出すような議論も散見される⁷。日本において消費社会と呼び得る状況が本格的に始動するのは、1980年代以降であるが、その一方で消費社会の起源を1920～1930年代まで遡らせ、広告やデパートなどの文化装置を歴史社会的な文脈のなかで捉え返そうとする試みがある（難波 1998；北田 2000；吉見 2002；Young 2007；初田 2004など）。たとえば難波（1998）や北田（2000）の広告研究では、従来、戦時における「プロパガンダ」として捉えられてきた1930年代の広告メディアが、すでに消費行動と密接に関連する「広告」として確立していたことが示されている。

しかしその結果、あたかも消費社会がすでに到来していたかのような語り方が、社会学では（そして、おそらく一部の日本近現代史でも）現在、制度化しつつある。いうまでもなく女性美も、これと強く相関している。とくに大正末期以降に出現した「モダンガール」は、消費行動の中心に据えられ、化粧品などのジェンダー化された商品を消費する対象として（足立 2010）、あるいは性的要素が強調された「視覚的娯楽」の消費の対象として位置づけられる（マッキー 2010:109）。この「モダンガール」は、「消費文化」の隆盛における現代的な女性身体とく美の結びつきの起源としてみなされており、明治期の「良妻賢母」、あるいは「新しい女」という女性表象とは対照的である。

以上の1930年前後の消費社会に焦点化する議論が念頭に置いているのは、おそらく先の国民国家論に対する批判、あるいは違和感であるのだろう⁸。つまりこれらの議論では、戦前においてすでに「戦後」が始まっていたことを示す試みとして、いわば戦後の消費社会の前史として積極的な意味付けを与える⁹。

よって捉えきれるものではなく、たとえば雑誌の投稿欄における「少女ネットワーク」からは、少女文化とでもいうべきものが形成されていたのである。

⁷ 政治史を中心とした近代史研究が中心であった1965年という早い時期において、大正期の「文化」に着目したものとしては、南博ら（1965）の研究がある。南らは、1910～1920年代をファシズム前史という政治史的観点からでは捉えきれない「文化」の時代であり、明治期を「生産的文明」として、大正期を「消費的文化」の時代として位置づける。だが、本論では、この「文明」から「文化」、「生産」から「消費」への移行を段階的变化として捉えるのではなく、やはり資料を内在的に読み込んでいくなかで確認される「近代性」を記述していく必要があると考えている。また吉見（2002a）は、南らの文化研究に対して大正文化全体がブルジョア的な消費文化によって特徴づけられているという問題を指摘している（吉見 2002a：28）。

⁸ ただし、先に挙げた足立（2010）やマッキー（2010）の論考が所収された『モダンガールと植民地的近代』は、消費社会論と国民国家論が交差する「植民地的近代」という視角によって1920～1930年代を位置づけている（伊藤・坂元・バーロウ編 2010）。

⁹ また山之内靖（1995）などによる総力戦体制論も、1930年代に「現代性」を見出す試みだといえる。戦時動員体制が始まる1930年代を国民国家が再構築された転換期として位置づけ、階級社会からシステム社会への移行を普遍性の文脈のなかで把握する。1930年代は、近代日本の「失敗」を集約しているという認識が共有されてきたが（吉見 2002a：12）、総力戦体制論は、1940年代を1930年代からの断絶ではなく連続として捉え、さらに現代の資本主義諸国の国家体制を総力戦体制の延長上に据え、戦時期と戦後にも連続を見出している（山之内 1995；2015）。1940年体制時に形成された諸制度が現代に引き継がれている点を明らかにした意義は大きい。ただ戦後を「戦前」として捉える見方は、やはり無理

ただし、1930年前後の消費の領域に着目する一連の議論では、現代的な消費行動と明らかな落差があるにもかかわらず、「消費社会」の定義も実は曖昧なまま使用されている。また「消費社会」になぞらえた形での「現代性」が1930年代に急に浮上するかのように捉える向きもあり、どちらかというともそれ以前に対する関心も薄い。むしろ、これらの議論が「現代性」の始まりを問題としているとするならば、それも当然のことであるのかもしれない。というより「消費社会」の枠組みを用いるという時点で、必然と「現代」の起源をみていくことになるのであろう。

〈女性美〉の成り立ちについて問う本論においても、「モダンガール」という女性表象の出現は一つの到達点ではある。だが、消費社会論的な枠組みによって現代性の始まりを「モダンガール」のなかに確認するという視角は、やはり現代的な女性身体と〈美〉の結びつきを自明視することにつながる。このような視角では、ある種の女性たちを「モダンガール」という括り方によって捉えるまなざし自体が、いかにして形成されたのかということが問題化されないという点において、やはり不十分である。

0-4-3. 〈女性美〉なるものの「近代性」をめぐる

ただし、何らかの実体があるというわけではないため、「現代性」と「近代性」の違いに対する本論の立場を、ここで明確に提示することも難しい。本論を通して、〈女性美〉なるものに見出される、明らかな現代との違いのなかに「近代性」の多様な断片を記述していくことを目指したい。

そのためには、これまで述べてきた国民国家論モデル、あるいは先の消費社会モデルのいずれにおいても固有の意義と限界がある。本論が捉えようとする、近代における〈女性美〉は、いずれのモデルのなかにも回収できない側面を持っている。どちらかといえば消費社会論に寄っているとはいえ、先に述べたように「消費社会」の枠組みによって捉えていくと、どうしても所与の〈女性美〉が「大衆化」、「均一化」していく様相に着目することになる。確かに〈女性美〉の成り立ちにおいては、とりわけ生産と分離した「消費」というものが密接に関わってくるのだが、しかしその〈女性美〉と「消費」の密接な関連性そのものを問う必要があるのだろう。ゆえに本論では、これまで「近代」あるいは「現代」を捉えるために自明視されてきた枠組みを一度外した上で、〈女性美〉なるものに対して資料内在的に接近することにしたい。本論が1880年代から1930年までに照準を据えるのも、そのためである（もちろん、それは事後的に決定されたものであるのだが）。そして本論が焦点化する「近代性」について、さしあたり明示しておくとなれば、先述したように〈美〉そのものとの距離、〈美〉を知覚する方法、そして〈美〉への態度という、〈女性美〉をめぐる社会的に編制された感覚・知覚の様式のなかに記述されることになる。

があろう。とくに〈女性美〉の意味に関わる営みや文化を、動員の対象として位置づけることには明らかに説得力がない。むしろ女性には「二等国民」としてゆるやかに差別され、統合を免れてきたからこそ、〈女性美〉に関する現代的文化が遊戯性や快楽をもたらすものへと成りえたのである。

0 - 5 . 本論文の方法

次に、本論が用いる歴史社会学、とりわけ言説分析的手法における記述や分析の方法について示しておきたい。とはいえ、本論で言説分析を動機づけるものについては、すでにこれまでのなかでいくつか述べてきた。本論は、現代において女性に特徴的なく美のあり方を対象化するために、1880年から1930年までの間から捉え返していくことを目指すが、前述のようにまずそれを確定された概念として用いない。それを確定させてしまうと、戦後、あるいは現代の視点を密輸入させることになるからである。ただし、本論が対象とする時期において、現代的なく女性美と似た何かがあることもまた確かなのであり、それを記述することが本論のねらいとなる。

筒井清忠（1999）によれば、歴史社会学は、歴史的経緯を無視した社会学的説明に対する批判から出発しており、現在にみられる社会現象が起きた要因を探るために、それが起きるまでの経緯＝歴史を明らかにする方法である（筒井 1999：1）。歴史を無視した上での社会現象の記述に対する批判は、同意するところである。しかし、本論では、確定されない概念としてく女性美を扱うために、過去から現在へと至る直線的な時間軸のなかに現代のく女性美という結果を規定する要因を近代に求めることはできない。そしてこの「女性美なるもの」を、いくつもの多様な要素との連関のなかで捉えていくためには、先に述べたように、各要素、たとえば化粧や衣服に関わる「事実」の単線的な変容の記述を目指すのではなく、ある局域にみられる複数の要素とく女性美なるものとの配置の様態に照準することになる。したがって、それぞれの様態の記述を目的とするために本論全体の構成は、必ずしもクロノロジカルな流れに沿っていない。

加えてこのような方法は、本論で扱う資料の選択とも関わっている。先の筒井による歴史社会学の方法あるいは内容分析であれば、あらかじめ何らかのジャンルを定めた上で、参照する資料の範囲を設定することになるだろう。つまり、衣服であれ、化粧であれ、その変容を記述するならば、それにふさわしい同一の資料（たとえば一つの女性向けの雑誌など）が選択されるはずだ。しかし、やはりく女性美を確定されない概念として扱う限り、あるジャンルを設定し、同一の資料に限定するやり方は採用できなくなる。そこで、本論を書き上げるまでのおおよその経緯と資料選択のプロセスを示しておきたい。まず、本論の第3章で主として取り上げる『女学世界』（博文館）を通して読むことを試みた。最初に同誌を選択したのは、1901（明治34）年から1925（大正14）年まで発刊され、同時期に刊行された他の女性向けの雑誌と比べて、その射程が長きにわたるからである。そして、それに隣接する、または関連のあると思われた資料を読み進めるなかで、『女学世界』の記述との共通性や相違、ズレが発見され、さらにそれら一つひとつの「言表」が反復される領域を見出していった。もちろんなかには重複する箇所も多々あるのだが、本論ではあえてそのまま記述している。

この方法は、先に述べた因果を想定するような、あるいは資料から社会を安易に再構成していくようなやり方でもない。なぜなら、そういう資料と社会の関係を想定してしまうと、ある流れのなかの歴史を外側から俯瞰する特権的なまなざしが設定されることになるからである。このような視点から、時系列に沿った形で事実や出来事を配列し直す歴史のことを野家啓一（1996）は、歴史の「側面図」あるいは「俯瞰図」と呼んでいる（野家

1996:119)。だが、イデオロギーの終焉、あるいは歴史の終焉といわれるポスト冷戦期の時代において、歴史を外から俯瞰する視点を設定することは難しく、もはやそれによる記述も説得力が下がることも確かであろう。

佐藤健二（2001）が指摘するように、歴史社会学では、先の筒井とはまた別のものを志向する。社会学に「歴史性」が導入されたとき、そこで目指されたのは、戦後日本の社会科学的思考の中心であった「近代主義」¹⁰の解体、つまり、直線的な「ものさし」による歴史の解体であった（佐藤 2001:27）。それを解体する方法としては、野家（1996）が、先の「歴史の俯瞰図」と対比して、「歴史の正面図」と位置づけるものと近似する¹¹。

「歴史の正面図」とは、超越的視点を放棄した上で、歴史に「内属する」者の視点から捉えられた「私に立ち現れている歴史風景そのもの」である（野家 1996:124 - 126）。

この歴史へのまなざしというのは、社会へのそれでもある。社会の全体性または全域性を俯瞰する視点が設定され得ないとき、それでも社会学の命題である「社会」の観察を可能にするのは、やはり言説（資料）を内在的に、かつ多角的に記述していくという方法のほかないであろう。その方法の一つとして位置づけられるのが、M. フーコーの歴史記述（考古学、系譜学）と言説分析であり、本論が目指すところの記述方法となる。その方法とは、起源や因果関係を辿っていくのではなく、生起したことをそれに固有な分散状態のうちに保つというやり方である。それは、多くの場に配置された多様な出来事の分布図のようなものである。本論は、複数の場に残されている〈女性美〉を成立させる諸条件を明らかにしていくために、それらの資料を何らかの視点によって解釈し、まとめあげていくことをできる限り留保し、なるべく「引用」中心の記述を試みた。「女性美なるもの」について考えていくということは、その言説の空間自体を問題化することになるからである。

ただし、言説分析は、読解／記述が進むにつれて面の数が増えていく多面体として出現し、常に社会の全域の見渡せなさを暗示する（遠藤 2006）。だが、現在、歴史あるいは社会を記述していくにあたって、このような困難から逃れることは決してできないのであろう。それゆえに本論は、先に示したように（作業の過程において）『女学世界』の言説から同心円状に広がっていった〈女性美〉を記述する試みではあるのだが、それも現段階における一つの到達地点であることを明記しておかなければならない。

¹⁰ それは丸山真男の議論に代表される「近代的」対「伝統的」という時間軸、「西欧的」対「日本的」という空間軸を暗示する対語が分立しながら絡み合い、「超近代」と「前近代」とが結合した「歪んだ日本近代」という歴史認識である（佐藤 2001:27）。

¹¹ あるいは、それは W. ベンヤミン（1974=1995）の以下の「歴史の天使」、つまり「歴史の現在性」とも近似する。「新しい天使」と題されたクレーの絵がある。それにはひとりの天使が描かれていて、この天使はじっと見詰めている何かから、いままさに遠ざかろうとしているかに見える。その眼は大きく見開かれ、口はあき、そして翼は払げられている。歴史の天使はこのような姿をしているにちがいない。彼は顔を過去の方に向けている。私たちの眼には出来事の連鎖が立ち現われてくるところに、彼はただ一つ、破局だけを見るのだ。その破局はひっきりなしに瓦礫のうえに瓦礫を積み重ねて、それを彼の足元に投げつけている」（Benjamin 1974=1995）。

0 - 6 . 本論文の構成

本章の最後に、本論文の構成について簡潔に示しておく。

まず第1章『東京百美人』という経験——19世紀末における『美人写真』と『芸妓』では、19世紀末に出現した「芸妓」を写した写真(「美人写真」)に着目しながら、写真を見るという経験と、そこから浮上する「美人」という言葉に込められた意味合いについて考察する。この写真は、主に「芸妓」を写したものであるが、それは「芸妓」がもともと見られる存在で、かつ「美人」であったために、この写真の被写体となったわけではない。近世とは異なる「美人」に対する新しい見方は、写真という新しい技術とこの種の写真の流通と密接に関連しているのである。

第2章「衛生学における〈皮膚〉へのまなざし」では、近世より続いている日本社会における肌の「色の白さ」の価値について着目する。近世において「徳容」のなかに包摂されていた「色の白さ」は、西洋より流入した衛生学の知によって、〈皮膚〉の知覚を経由することで決定的な変換がもたらされた。それは、芸妓らが属するところとはまた別の領域において、新しい美の基準が生まれた契機でもあった。

第3章「化粧品広告からみる『女学世界』の変容」では、博文館より1901(明治34)年1月～1925(大正14)年6月まで発行された女性向けの雑誌『女学世界』の化粧品広告に目を向けながら、広告の影響を受けながら雑誌そのものが変容するさまを考察する。「良妻賢母」思想のジャーナリズムと揶揄された『女学世界』も、実は化粧品広告の形式の変化に大きく影響を受けながら、徐々に蒙を啓く語り口とそれとは異なる語り口の共存状態を呈することになる。

第4章「資本としての〈女性美〉」では、第1章で浮上した「美人」という言葉に再び立ち返ることとなる。芸妓の「美人写真」を契機とする「美しい顔の可視化」は、女性の外面と内面の循環とでもいうべき運動を作動させ、「美人論」の系譜が展開された。本章では、それを先の『女学世界』(1901[明治34]年創刊、博文館)と『婦人世界』(1906[明治39]年創刊、実業之日本社)における記述の違いを確認しながら、その変容を辿ることを試みた。

第5章「衣服の流行の語られ方」では、先の第4章と同様に『女学世界』と『婦人世界』における衣服の流行の語られ方の違いを比較した。これら二誌のなかで記述される衣服の流行現象からは、衣服のコードの流動性ととともに、「個性化」への志向が示されており、後の「モダンガール」の「洋装化」とは異なる、「衣服の近代化」の様相が示される。

そして終章では、本論から明らかになった点を改めて提示した上で、今後の課題を提示したい。

第1章 「東京百美人」という経験——19世紀末における「美人写真」と「芸妓」

1-1. はじめに

本章では、1891(明治24)年7月に行われた「東京百美人」という写真の展示会を通して、新しいメディアである写真を「見る」という経験に着目する。そうすることで、同時期における女性のく美のあり方を考察することにつながるのである。

多様な写真が日常を取り巻く現代にあつては、我々は写真を見る様式をいつの間にか身につけており、ふだんそれを特別に意識することがない。このような前提から明治期の写真経験を振り返ってみたとき、女性たちの写真が撮られ、雑誌などのメディアを通じて広まっていくさまは、ある種の起源として我々の前に立ち現れてくる。それゆえに、明治期における女性と写真の関わりについては、これまで主として写真を通して「見られる」という経験に注目がなされてきた(佐久間 1995 ; 佐伯 2012 ; 坂本 2014)。とりわけ20世紀初頭は、女性向けの雑誌が多く創刊されこともあり、写真を通して「見られる」という経験が台頭することとなったのである。佐久間(1995)は、この「見られる」経験が、女性たち自らに向ける視線において、他者(カメラの後ろ)の視線を重ね合わせる「自己の可視化」という経験をもたらしたことを指摘している。それが「自分で自分を見る」ための鏡という旧メディアと比較したときの写真の新しさであった。

しかし、このような写真を通して「見られる」という女性たちの経験については、後の第4章で論じることとし、本章では、まず女性を被写体とする写真を「見る」という経験に焦点を当てたい。そもそも日本における写真技術の普及期では¹、後に詳述するように自分自身の写真を「撮る」ことよりも先に、別の誰かが写る写真を「見る」もの、あるいは「購入する」ものとして経験されたのである。こうした写真を見るためには何らかの社会的な様式が成立していなければならない、それを通して、佐久間らが論じたようなメディア上の女性たちの写真を観察・解釈し、共有することが可能になる。

ヨーロッパほど肖像画の長い歴史を持たない日本においては、独自の経験でもって新しい視覚イメージである写真に対峙することとなった。歌川芳藤による《開化旧弊興廃くらべ》(1882[明治15]年)では、開化期の新旧の交代劇として、擬人化された「錦絵」(浮世絵)と「写真」が争う様子が描かれているように、日本社会の場合、肖像写真の前身に位置づくのは錦絵である。この《開化旧弊興廃くらべ》の錦絵と写真にはそれぞれ女性らしき人物が描写されているのだが、いうまでもなくこれらの間には明らかな抽象度の違いがある。にもかかわらずその移行期においては、写真にまつわる様々な迷信が生まれはしたものの、とりわけ激しい葛藤や抵抗がみられたというわけではなかった。むしろ写真は、『東京新繁昌記(初編)』(服部誠一著、1874、山城屋政吉)に書かれているように、「眞

¹ 写真の発明は、1839年にフランスでダゲレオタイプが公表され、日本には1848(嘉永元)年にはじめて輸入された。十年の後には、湿板写真が導入され、その写真技術は、蘭学者らによって比較的短期間のうちに全国的に波及したという。小沢([1986]1997)は、この幕末から後に乾板写真へと移行する前の明治初年までを日本写真史における一つの区分として捉えている。

を寫す」ものとして、深い関心と驚きとともに比較的あっさりと受け入れられていったのである。

では、浮世絵とは異なる姿で写しだされた写真の人物像は、いかにしてまなざされたのだろうか。こうした受容の様式は、当然のことながら自然でも人為的でも、また写真を前にして直ちに成立するものでもなく、ある社会に固有のやり方で作り上げられ、定型化されるのである。本章では、写真が新しいメディアであった時期における写真を「見る」ことの様式について、とくに女性のく美を捉える「視線」のあり方から考察することをねらいとする。

1-1-1. 芸妓と写真

本論が着目する「東京百美人」という写真の展示会（以下、百美人展と表記²）とは、1891(明治24)年7月に浅草の凌雲閣にて開催されたイベントである。芸妓百人の大写真が陳列され、登閣客による人気投票が行われた。井上章一(1992)は、この展示会を日本で最初の「ミスコンテスト」として位置づけている。この百美人展の対象が芸妓に限られていたのは、もともと容姿が売り物の一部であり、それを人前にさらして品定めされてよいと考えられていたのが「芸娼妓」などの「くろうと」女性であったからだという(井上1992:49)。また佐久間(1995)も、芸妓が「見られる」商売であったからこそ、明治の女性の先頭を切って写真というメディアに接するようになったと述べている(佐久間1995:204)。

両者の指摘にあるように、明治初年頃より芸妓・娼妓と写真の関わりは深く、たとえば芸妓らは宣伝材料として畳簾筋を中心に小型写真を名刺代わりに配っていたともいわれている(図1-1)。亀井武(1991)によると、1876(明治9)年に刊行された週刊誌『昌平余聞東京新誌』第9号)には、「娼婦」は写真を店頭に掲げるため、「^{おいらん}玄妓」は「^{げいしや}愛客」を増やすために写場(写真館)に訪れると書かれている(亀井1991:134)。一方、このような芸妓・娼妓の小型写真(名刺判写真)は、名所風景、御真影、政府高官、財界名士、歌舞伎役者らのものとともに、複写され、写真舗で販売されていた(小沢[1986]1997; 亀井1991)。この写真舗とは、写場とは異なり、既製の写真の販売のみを目的としたものである。さらに1882(明治15)年の不粋庵の戯詩によれば、百貨店の前身である勧工場でも芸者の写真が、帽子、こうもり傘、時計、蘭燈、煙草入れなどとともに商品の一部として陳列されていたことがうかがえる(鈴木2001:228-229)。写真という新興テクノロジーが普及し始めた時期においては、すでに自分の写真を撮影するための写場(写真館)が存在していたのだが、それ以上に、他の誰かが写った既製写真を販売する店が多数みられたのである。

つまり、同時期の店舗数や撮影料から判断すると³、多くの場合、写真は「撮る」もの

² 当時の新聞記事によれば、「百美人投票」(「百美人投票開函の延期」『朝日新聞』1891年8月15日・朝刊)、「百美人品評會」(「百美人品評會の高點者」『朝日新聞』1891年9月15日・朝刊)というように、この展示会の名称は統一されていないのだが、便宜上「東京百美人展」と呼び、本文中では百美人展と表記する。

³ 1876(明治9)年頃の東京では、写場が数十余、写真舗は数百を超えており、さらにその

ではなく、写真舗や勸工場の店頭に掲げられたそれを「見る」、あるいは「購入する」ものとして経験されたわけなのである。



図 1 - 1 . 芸妓の名刺判写真

(小沢監修 [2012 : 116 , 119]より転載)

1 - 1 - 2 . 名刺判写真の二つの様相

ただし、先の顔なじみの畳筋に手渡しされた写真と、写真舗や勸工場で売られた写真とでは、それを「見る」経験は大きく異なっている。前者と後者では、被写体の芸妓とその写真を見る者の間に直接的な関わりがあるかどうかという、ごくシンプルな違いがある。名刺代わりの写真は、芸者と客の間にある直接的な交流を通じて配られたものであるが、写真舗で販売された写真とは、芸妓のイメージが表象＝再現されたものであり、それを購入する者と芸妓の間には必ずしも直接的な交流があるわけではない。販売された写真は、遊客などの花柳界内部に位置する者だけでなく、その外部の匿名化された者も容易に手にすることが可能だ。先の亀井(1991)は、1876(明治9)年の『朝野新聞』(1月17日号)に寄稿された写真舗における興味深いエピソードを紹介している。ある官員と思しき男性が、数十枚の「別品」の娼妓らの写真を一枚一枚丁寧にみていきながら、自分の気に入るものを選んでいく。その際、気に入らない写真に対しては次のように一々文句を付けるのであ

多くが浅草公園の付近に密集していたという(亀井 1991)。写(撮影)料については、1874(明治7)年刊『東京新繁昌記 初編』(服部誠一著)によれば玻璃(ガラス板)で二十五銭、紙焼きで五十銭から七十五銭と記されているように相当高価なものであった。撮影料が下がり、写真館の利用層が広がりを見せるのは明治30年前後以降のことである。江戸後期から明治後期までの撮影料については、旗手(1971)を参照。

る。「此ノ妓、天然ノ媚態ニ乏シ。実語教ニ云フ。鼻ハ高キガ故ニ貴カラズ。媚態アルヲ以テ貴シトス。又曰ク、此ノ娼其目黒睛小ニシテ、白処多シ。論語ニ云フ。目ノ事ハ白キヲ後ニスト」（亀井 1991: 145-146）。その後、この男性はある写真を購入し去っていったという。新聞に掲載されたこの事例は、芸妓ではなく娼妓の肖像写真の売買の様子を示すものであるが、ここから明らかなのは、この男性が数十枚の写真を一瞥しながらも、そこに写る女性が自分自身の好みではない理由を「実語教」や「論語」の言葉を引用し表現することを知り得ているということだ。ただし、この写真に対してなされた表現は、江戸文学的な教養における「俗化する操作」を示しており（石川 2007）、後に取り上げる百美人展の写真の受容の様式とはまた異なるものである。

このように写真舗や勧工場で売られた写真と先の顔なじみの最良筋に手渡しされた写真との間にある被写体とその写真を見る者の間に直接的な関わりがあるかどうかというシンプルな違いは、その後も、娼妓や芸妓という職業は存続していたので、直接的な交流の有無と写真との関係を示すこの構図自体は、昭和期に至るまで引き延ばされている。それゆえ、百美人展に掲げられた百枚の写真とは、（最良筋に配られた芸妓の写真と対置される）写真舗などで販売された写真の延長上に位置づけることができる。ただし、それでも写真舗などの写真と、百美人展の写真の間には、視線の変容という観点から捉えてみるとある種の切断がみられることも確かなのである。以下では、この構図を別の角度から捉えつつ、その切断について考察していくことにしたい。

1-2. 流通する芸妓のイメージ

1-2-1. 評判記における芸妓

まず本節では、花柳界という文脈における芸妓とそれを取り巻く者たちの直接的な交流について確認しておく。

そもそも芸妓とは、江戸期の半ば（宝暦年間、18世紀半ば頃）において遊女に代わってお座敷や三味線や踊りをおこなう職業として生まれた。明治期になると、花街の料亭は、新政府の高官たちの一種の社交場ともなったという（佐伯 2012）。明治初年頃の東京案内記の類では、芸妓屋名とその所在地、芸妓の揚代などが詳述されている。それも花街に訪れる者の層の変化を受けてのものであるのだろう。

たとえば『東京開化繁昌誌 第二巻（巻之下）』（荻原乙彦、1874、万青堂）では、上野の東照宮や浅草橋などとともに、柳橋の芸妓屋名とその所在地が紹介されており、『東京一覽 上』（井上道甫編、1875、須原屋茂兵衛）でも、天皇や皇后の情報を筆頭に、東京の人口や職員数、華族の邸宅、学校の所在地などという雑多な情報と、遊廓や花街各地の揚代が記されている⁴。これらの書のように、東京に関する多様な情報が何の脈絡もなく列挙されるという方法は、明治初年のベストセラーである『東京新繁昌記』（1874、服

⁴ 他には以下のものがある。『懷中東京案内 二編』（福田栄造編、1878、同盟舎）、『改正東京案内』（大倉孫兵衛、1881、『東京遊覧記』（原田真一、1888、小林仙鶴堂）、『新選東京独案内図会』（著者不明、1890[明治 23] 斯文館）など。

この『東京粋書』は、芸妓評判記の類であるが、そもそも同書の目的とは何か。同書に詳述された個々の芸妓らの情報は、花柳界の外部に向けて開かれているようにみえて、実は内部で閉じている。ここで提示された芸妓に対する評価は、「冶郎」や「通客」などの花柳界内部のコードを知りつくした者のみが共有できるものであり、その外部に位置する者にとっては、それを解読することは容易ではない。というのも、とくに先の芸妓等級比較表は、対象人数も膨大で、かつ評価項目も多岐に渡るため、上位はともかく、下位になるほどそれを読み取ることは難しくなるからだ。たとえば「姿色」の十九等と二十等の差が何に基づいているのかということは、全くわからず曖昧である。ここに載る芸妓がすでに顔見知りでない場合において、等級表の各順位を把握することは、ほとんど意味をなさない。つまり、この等級表とは、全ての芸妓をランク付けして楽しむという内輪の遊びなのである。加えて、この書は、芸妓に対して文字で記述された評価、つまり言語と意味による評価がなされており、この点においてもそれを読む者はリテラシーを備え、かつ芸妓遊びが可能な層に限定されよう⁵。こうした芸妓評判記のような書物と、以下で取り上げる芸妓の写真は、そのメディア的特質が大きく異なっている。

1-2-2. 芸妓の写真というスペクタクル

1節で述べたように、芸妓の写真は、明治初年よりすでに写真舗や勧工場において商品化されており、それは花柳界の外部の者も容易に手にすることが可能なものであった。店頭でこうした写真が複数枚列挙され、あるいはそれを購入する者も手に入れる枚数が増えていくとするならば、写真に対する見方は少しずつ変わっていくと考えられる。

百美人展は、先の芸妓評判記『東京粋書』が書かれてからおおよそ十年が経過した1891(明治24)年7月に開催されている。東京の柳橋、浅草、葎町、赤坂、新橋の花街の芸妓百人の写真が凌雲閣内に展示され、訪れた者による人気投票が行われた(p.32、**図1-9**)。撮影者は、米国で乾板撮影・製造法を学び、東京の京橋で写真館「玉潤館」を営んでいた写真師の小川一眞である⁶。観光名所であった凌雲閣で行われたこともあり、おそらくこの人気投票に参加した者は、実際に座敷遊びをする者だけでなく、浅草へ観光として訪れる者など、多くの者が含まれていたはずである。もっともこの展示会は、エレベーターが操業停止した凌雲閣が、客を呼び込むための策として考案された。3階から7階まで写真が展示され、次の写真をみるために階段を上るしくみとなっていたのである(「凌雲閣の改良趣向」『時事新報』1891[明治24]年7月17日)。だが、ここで、そもそも芸妓の写真を掲げるというこの催しが、なぜ多くの客を呼び得るものとなったのかを考えてみなければならない⁷。

⁵ 岸井良衛(2011)によれば、1879(明治12)年に成島柳北による芸妓評判記『新柳情譜』が二百冊に限って出版されたというが、そこでも、先の「小園」が紹介されており、やはり「一笑が物を言う」と評されている(岸井2011:332)。『東京粋書』の記述内容と酷似していることから、花柳界内部に共有された知の存在の一端が示されているよう。

⁶ 小川一眞の経歴の詳細については、小沢(1994)や岡塚(2001, 2012)などを参照。

⁷ 普段の凌雲閣の客数は「平均三百」名だが(「凌雲閣の登覧者」『読売新聞』1891[明治24]年7月17日・朝刊)、百美人展初日には二千四百九十余名(「凌雲閣の登覧者」『読売新聞』1891[明治24]年7月17日・朝刊)に達し、大入り状況だと新聞は報じている。

百美人展では、それまで写真舗や勸工場などで分散された形で流通してきたものが、百枚の大きな写真によって一箇所に集められた⁸。それは端的に言って、芸妓の写真が「見世物」の文化のなかに組み込まれたことを意味する。2節でも触れたが吉原などの廓や遊里は「悪所」と呼ばれ、日常のすぐ近くにあるものの、慎重に隔離された非日常の空間であった（広末 1973）。芸妓や娼妓は、いわばウラの世界に属する特別な女性たちであったから、オモテに属する者の興味を引くのも当然のことである。実際、この凌雲閣の北側に位置する遊廓・吉原は、最上階からの眺望の魅力の一つで、望遠鏡で覗くと吉原の美妓が笑い、手招きをするのがみえるという冗談めかした艶話もあったという（細馬 2011）。先の写真舗や勸工場で陳列されていた写真も、こうしたウラの世界を小出しにし、「覗き見」の感覚を味あわせることで成立する商売であったともいえ、その意味では写真舗に掲げられた写真とこの百美人展の写真は確かに連続している。ただし、この百美人展は、都市のなかのある特定の場に存在していたそのウラの世界が、突如、壮大な規模（百枚もの写真）でもってオモテの世界へと滑りこんでいくような、かなり特異なものであった。佐藤健二によれば、凌雲閣の展示は「それまで見たことのないなにかを見つめさせる空間（傍点引用元）」を提供したのだが（佐藤 2016:29-30）、百美人展は、まさにそうした凌雲閣的な展示会の有り様を常態化させる契機となったのである⁹。

百美人展の写真に話を戻そう。展示された写真には、個々の芸妓に関する情報がどの程度添えられていたのかは定かではない。ただ、展示会では、花街の地名、芸名、年齢、三絃や踊りなどの芸の長所、本姓名が書かれた一枚刷り（『東京百花美人鏡 志らせ号外 一名十二階美人品評の志はり』伊藤升次郎編、1891、金鱗堂）が発行されており（佐藤 2016:40）、この一枚刷りが個々の写真を解釈するための一助になったことは間違いない。しかしながら、一枚刷りには、芸妓らの「藝の長所」に関する記載はあるものの、それぞれの技芸の巧拙の程度なども知る余地はない¹⁰。つまり、ここでは先の評判記のなかで書かれていたような技芸や姿色、品格、風致、老練という多様で包括的な視点による評価が消失しているのである。

必然と、写真の芸妓に対する評価は、そこに写されたものに限定されることになる。この展示会ではまさにそれが写真という形態であったために、先の文字で書かれた芸妓評

⁸ 展示された写真の額面は「縦横二尺余」である（「凌雲閣の改良趣向」『時事新報』1891[明治 24] 7月17日）。

⁹ 凌雲閣の展示会では、ほかに「肖像美人画投票」（1892[明治 25] 1月～）や、「日本絵百美人」（1894[明治 27] 年12月～）、「大楽器」の展示（1893[明治 26] 年4月～）の他にアルコール漬けの「両頭の蛇」（1893[明治 26] 年2月～）、「大鯨と大鰻」（1894[明治 27] 年4月～）がある（佐藤 2016:29）。

¹⁰ 百美人展では、先の評判記のような芸妓列伝が書かれた有料の小冊子『百美人鏡』（伊藤升次郎編、1891、金鱗堂）が発売されたのだが、芸妓らの抗議により発売から10日ほどで発売停止に追い込まれたという（佐藤 2016:40-41）。とはいえ、やはりリテラシーという点からすると、それを読むことができる層は限られていたであろう。また芸妓らの抗議がどういうのもであったのかは定かではないが、新聞記事には「中にハ甚だ気の毒な者あり又かわいそうな者あり兎に角穏やかならぬ所ありとて凌雲閣事務所より一本参つて發買を差止めたので百名の美人中ホツと息を吐いたのが六七十人あるとのこと」と書かれており（『朝日新聞』1891[明治 24] 年7月25日・朝刊）、先の『東京粹書』の列伝のように芸妓を賞賛する類の内容ではなかった可能性がある。

判記（『東京粹書』）からは大きく飛躍し、「目で見る」という実践のみによる評価へと移行を遂げているのである。先の一枚刷りによれば芸妓らの年齢層が16歳から23歳までに限られているのも、こうしたことと決して無関係ではないのだろう。

百美人展の写真と、先の芸妓評判記との関係は、1節で指摘したように、写真舗で掲げられ商品化された写真と畳肩筋に配られた名刺代わりの写真、つまり外部からのまなざしと内部からのそれとの対置と全く同じ構図となっている。さらに、この百美人展に写し出された芸妓の表象＝再現は、本来芸妓を取り巻いていたはずの様々な文脈から切り離された疑似的な世界である。当然のことながら、写真の被写体とそれを見る者の間には、必ずしも直接的な交流があるわけではない。それゆえに投票のために誰かを選ぶ際の基準は、芸妓という存在をただ、美しい「見た目」の女性として収斂させるスペクタクルの論理に基づくことになる。一方、芸妓も、写真として掲げられた時点において、技芸や風致、品格、あるいは何か客を引き付けるものを備えているかという花柳界内部の評価方法からは切り離されて、単なる表象へと転化しているのである。

1-2-3. 『文芸倶楽部』の「美人写真」

この百美人展のような企ては¹¹、その後、文芸雑誌の『文芸倶楽部』（博文館、1895[明治28]～1923[大正12]）¹²に引き継がれたとみることができる。『文芸倶楽部』では、ほぼ毎号において名所や都市の風景、芸妓、役者、俳優などの口絵写真が掲載されており、なかでも全国各地の芸妓の写真が多くを占めていた。口絵の芸妓の写真では、最初こそ「～美形」という表現が用いられていることもあるが、「京名所と美人」、「三都美人」というような「～美人」というタイトルが付けられ、これらを総称して「美人の写真」または「美人写真」と呼んでおり、百美人展を真似ていることは明らかだ。

ただ、先の百美人展は来場者を凌雲閣に集めたが、この『文芸倶楽部』の写真は、雑誌メディアを通じて不特定多数を対象にして大量に複製されたという違いがある。つまり、芸妓の写真に関心がない読者に対してもそれを見る機会を与え、あるいはすぐに読み飛ばされたり忘れ去られたりする可能性がより高いものとなっている。

ただし、『文芸倶楽部』の編集側としては最初から「美人写真」の被写体を芸妓に限定していたというわけではないようだ。誌面には読者に向けて写真の投稿を促す記事があるのだが、その記事では「夫人、令嬢、歌妓、絃歌の師匠、舞踏の師匠、女俳優、その他諸藝人」の中から「美人の写真」を募集するとある（『文芸倶楽部』1898[明治31]・4・16：259）。「美人」のなかに、積極的に「夫人」や「令嬢」などの芸妓以外の多様な女性を加えようとする意図があったことがうかがえる。しかしながら、その後の誌面に掲載さ

¹¹ 東京百美人展の撮影者である写真師・小川一眞は、1903(明治36)年の3月から大阪で行われた第5回内国勸業博覧会で、東京に大阪、京都を加えた「三都百美人大写真展覧会」を開催している(岡塚 2009)。

¹² 以下、『文芸倶楽部』と表記する。『文芸倶楽部』は、1905(明治38)年1月、博文館から『太陽』と同時に創刊された。明治期では、春陽堂の『新小説』と並ぶ有力な文芸雑誌とされていたが、1933(昭和8)年1月に廃刊となった(有本 1969)。『文芸倶楽部』の初年度の発行部数は、下記の通り。1号：11,000部、11号：15,500部、12号：18,000部(浅岡 2002:172)。また最も多いときには、50,000部に達した(有本 1969:173)。

れた読者による投稿写真（図1-4）は、全て芸妓のものであり、菅見のかぎり、そのなかに夫人や令嬢をみつけることはできなかった。読者から投稿された写真のなかに一般の女性のものが無かったのか、もしくはあっても掲載されなかったのかはわからない。だが、読者からの投稿写真だけでなく編集側が用意した口絵写真でも、たまに「仏蘭西美人」や女優が紹介されることはあっても、一般の夫人や令嬢が掲載されることはほとんどないのである。



京都花街十二美人 高得点者 祇園町池田まさ

図1-4. 『文芸倶楽部』第一回募集写真披露
（口絵『文芸倶楽部』1895[明治28]・10・20）

「日本百美人」と称した付録でも、同様であった（『文芸倶楽部』1908[明治41]・14・1）。この企画は、先の百美人展と同様の催しが誌上で展開されたもので、やはり読者による投票が行われたのだが、そこでも何の断り書きもないままに全国の芸妓百人の写真が「美人」と称して掲載されている。したがって、少なくとも先の写真の募集記事からこの付録の企画の間に、「芸妓」を被写体とするものを「美人写真」と呼ぶ習慣が定着したものと考えられる。さらに、このことから、男性読者を想定して編集された『文芸倶楽部』では、美人写真の被写体が「芸妓」に固定されており、その括りからはそれ以外の女性が除外されていたことがわかるのである。

一方、この「日本百美人」の付録は、おそらく人気投票という目的だけでなく、いわば芸妓のカタログとしても用いられており、ここに掲載された者のなかから、実際に料亭に呼ぶ芸妓を探すというようなことが行われていたものと推測される。ただ、そこに掲載されているのは、芸妓の写真と芸妓屋と源氏名のみであり、百美人展と同様にそこで芸妓に向けられたまなざしも「見た目」以外の要素がそぎ落とされている。投票の場合だけでなく、カタログとして使用される場合も「見た目」が基準に選定されることになるのだろう。

このようなある意味ではシンプルな評価であったからこそ、芸妓の美人写真が広範に流通し、直接芸妓に接する機会のない者にまで開かれていったといえるのかもしれない。むしろそのような消費のされ方こそが、この美人写真という複製物の特徴である。同時期に

流行した芸妓らの写真を載せた「美人絵葉書」も、花街という場から完全に切り離された文脈のなかで、たとえば戦地の兵士たちへと慰問品として流通していったし（佐藤 1994）、あるいは海外向けの日本案内のなかに掲載された芸妓らの写真も「かわいい女性（pretty girls）」として日本以外の場所へ流通していった（Hisamura 1904）。ここにおける芸妓は、写真というイメージを通じて、花柳界という限定された領域から、無限定に広がりをもせる空間のなかに位置づけられている。

その意味で、先の『文芸倶楽部』の付録「日本百美人」で9万票を獲得して1等となった赤坂・春本の「萬龍」（図1-5）は、まさに写真のイメージが流通し、匿名の視線のなかにさらされたことによって「有名性」を獲得し得た存在であった。たとえば第4章で取り上げる大正期の『婦人世界』の記事のなかでは、この「萬龍」が「赤坂春本の妓であつたころ、繪葉書美人として全都に響いた」と紹介されているし（長谷川時雨「現代美女一百人——色香とりどりの四季の花束」『婦人世界』1919[大正9]・15・4：99）、第3章で詳述するように結婚し芸妓を辞めた後も、化粧品広告に写真入りで登場している（ホーカー液化粧品広告『女学世界』1915[大正4]・15・3）。ここで「萬龍」に対してなされた評価とその価値とは、やはり芸妓であることではなくて、「美人である」という、ただそれだけに尽きるのである。



図1-5. 赤坂・春本の芸妓、萬龍の絵葉書

（ポーラ研究所 [2009：209]より転載）

先に、写真舗で販売されていた名刺判写真とは、芸妓や娼妓、歌舞伎役者とともに天皇や皇族、政府高官、財界名士の肖像写真であったと述べた。つまり、その被写体は、いわば階級的には両極に位置していた。西村清和(1997)が指摘するように、これらの肖像写真が市場に出回ることの利益は、当人にとっていずれも「名声 (celebrity)」を得ることにある（西村 1997:119）。とはいえ、その意味は同一ではなく、政府高官や財界名士であるなら肖像写真が流通することによって卓抜としての自己像を提示し得るが、芸妓や役者の場合は、彼ら自身のイメージという身体の一部を金銭や評判とひきかえに他者に譲渡し売り

出すということになる¹³。欧米では、カルト・ド・ヴィジッド（名刺判肖像写真）によって「覗き見」の対象となり、イメージが売買される者の大半が女優やダンサーであった。だが日本では、江戸期より女性が舞台に立つこと（女歌舞伎・遊女歌舞伎・女踊り子）は禁じられ、そうした存在がごく少数であったために芸妓の女性たちがその対象になったものと考えられる。このような事情もあって、2項で指摘したように、百美人展は、ウラの世界に属す女性たちが突如オモテへと流れ込んでいく、そういう事態となったのであろう。

もっとも口絵写真のキャプションなどに記されているように、芸妓が芸妓屋や源氏名という半ば公的な情報をもつ職業であったことは都合が良かったのかもしれない。イメージとして流通する類の写真が、とりわけ人物の写真である場合、全くの匿名であればやはりそれを見る者を不安にし、熱心に投票され、購入されることもなかったのではないだろうか。芸妓の写真は、「美人写真」として確かに花街という空間から切り離され流通していくのだが、それでもそこに写る者がどこの誰であるのかという情報だけは、いまだ保持されているのだと捉えることもできる¹⁴。

以上のことから、先の芸妓評判記の多様な項目に現れているように芸妓がもともと「器量」のみが高く評価される職業であり、かつ「美人」であったために「美人写真」の被写体となったという見方は、現代的な女性と美、あるいはそれと写真との関係性を自明視したところから発生するものだといえる（現代において、メディアなどで映像化される女性は、多くの場合、〈美しさ〉を備えている）。そうではなくて、写真というメディアによってイメージとして切り取られ、芸妓評判記に記述されていたような花柳界という場と密接に関連していた芸妓に対する多様で、かつ包括的な評価がそぎ落とされたときに、（一部の）芸妓が、はじめて容姿のみが高く評価される身分へと化したのである。そこでは、花柳界といういわばウラの世界に属す女性を「覗き見」し、そして所有したいという欲望が同時に働いていたのだが、それを可能にしたのは写真という形態であった。そして芸妓を被写体とする写真が「美人写真」としてカテゴライズされ、それが広く出回ることによって、芸妓のイメージが「美人」と強く結び付けられていったのである。さらにこの「美人」とは、『文芸倶楽部』でみたように「芸妓」に限定されており、そのなかにはまだ芸妓以外の女性が含まれていない。芸妓以外の女性が美人写真のなかに加わるためには、源氏名や芸妓屋とは異なる情報が別の形で付与される必要があった（この点については、第4章で考察する）。

¹³ 天皇の肖像写真という神話的象徴と国民国家—国民化との関わりについては、多木（1988）を参照。

¹⁴ W. ベンヤミンは、写真入り新聞のように写真に説明文が不可欠なのは、写真が一定の意味で受け取られていることを求めているからだという（Benjamin 1935=1995）。それはまた、たとえばアジェの撮るパリの都市写真のように人間の姿が消えたものだけでなく、無名の人物を撮った写真の場合でも、その人物の「名前」が自ずと要求されるのである（Benjamin 1935=2013）。

1-3. 「美人画」と「美人写真」

1-3-1. 美人画における「美人像」

明治期における芸妓の美人写真の隆盛というべきこの状況は、写真技術の進展と普及に依るところが大きいのだろう。ただ、写真の登場以前にも、ブロマイド的な性格を備えたメディアがあった。すなわち、遊女や歌舞伎役者が描かれた浮世絵や錦絵である。浮世絵は、版画という大量生産が可能な媒体で普及しており、安価であったことから庶民も容易に手に入れることができたという。現在では、この類の絵画を「美人画」と呼んでいるが、この名称は明治期以降に付けられたものであり、当時は「女絵」、「遊女絵」などと呼ばれていた。西洋美術史学が導入され、日本美術史を作り上げる過程において人物像の中でも特に美しい女性を描く絵画として美人画というジャンルが成立したのである（安村 2002）。とはいえ、当時の浮世絵には、「美人」というタイトルが付されているものも多くあり、確かにそれが「美人」を描いたものであったことに違いはないのだろう。

遊女を描いた浮世絵の美人画と、明治期以降の美人写真は、いずれも遊郭や花街という限られた場や空間に存在する「玄人」女性たちのイメージを流通させた。しかし、浮世絵の美人画と、明治期以降の美人写真の間には、絵画と写真という手法や技術以外の決定的な相違がある。

佐伯順子によれば(1993)、杉村治兵衛、鈴木春信、菱川師宣などの浮世絵では、男女が描かれていても、ふっくらとした顔の輪郭や目鼻立ち、丸みを帯びた身体の線という身体表現において両者の性別を区別する手掛かりがほとんどないという。両者の性別を示すのは、髪型や着衣のほんの少しの違いのみである（図1-6）。さらに浮世絵の顔の形態は、「細く切れ長の目と鉤のように細い線で描かれた鼻、米粒を立てて入れなければ入らないような極端に小さな口」というように、実際には在り得ない配置によって描かれている（村澤 1992:126-127）。この「引目鉤鼻」という様式化された顔の表現は、時期や絵師によって多少の違いが見出せるものの、いずれにせよ、とりわけ顔の違いを強調するために描かれたのではないということは共通している。特定の人物を描いた場合も同様であり、描かれているのは一貫して類型化された顔である。図1-7では、水茶屋の看板娘お仙（右）と楊枝店柳屋のお藤（左）、歌舞伎女形の瀬川菊之丞（中央）という明和の三美人が描かれている。お仙やお藤と比べて、菊之丞は大振袖に黒の帯という豪華な装いであることが目を引くものの、やはりここから3人の顔を比較することはできない。髪型や着物などの身なりによって、それぞれの「美人」の身分の違いが表現されているのであり、この絵は、描かれた本人の「顔」を表象＝再現する肖像画ではない。

このように顔への圧倒的な無関心が見出される当時の浮世絵に対して「美人」というタイトルが付されているのは、現代的な感覚からすると妙な違和感を覚える。ここで描かれる「引目鉤鼻」の顔は確かに美しいけれど、しかしその描写では、類型的なパターンが踏襲されており、個別的な違いに対してあまりにも無頓着であるように思われるからだ。浮世絵に描かれた「美人像」というものは、明らかに現代とは違うのだろう。では、それを見る者たちにとっての「美人像」とはいかなるものであったのだろうか。



図 1-6. 鈴木春信《雪中相合傘》

1767年頃 大英博物館所蔵

(左が男性、右が女性)



図 1-7. 鈴木春信《江戸三美人》

1764～70年頃 東京国立博物館所蔵

(左・右は女性、中央は歌舞伎女形)

浮世絵では、類型化された顔の代わりに、髪型、着物の柄や色合いは、無限のヴァリエーションを誇り、それにしぐさや身のこなしなどが加わった全体的なイメージとしての「美人の風情」が描かれている（佐伯 1993:424）。大首絵があるものの全身像を描く美人画が圧倒的に多いのは、さらにそれが写実性ではなく抽象度の高い画であるのは、装いやしぐさを含む全体的な「美人の風情」を際立たせるためのものであったと考えられる。

また美人画におけるその人物の特徴が、髪型や装いや身のこなし方の違いによって表現されたのは、身分や職業に応じた装いが厳しく定められていたこととおそらく深く関連している。美人画の「美人」とは、特定の顔や身体の状態にではなく、ある特定の場やそこに属す身分のうちに存在するのであり、それを示す髪型や着こなし、振る舞いという「風情」において体现されるのである¹⁵。

1-3-2. 「美人写真」が写すもの

次に、百美人展の芸妓写真に立ち返り、そこに写されているものを検討しよう。たとえば歌川豊国（三代、国貞）による《江戸名所百人美女》（図 1-8）¹⁶ と見比べてみるとすぐにそれがわかるであろう。江戸後期に出版されたこの揃物では、江戸の名所ご

¹⁵ 実は、こうした顔に対する無関心は、近世文学のなかにも見出せる特徴でもある。亀井（1984）によれば、近世文学、とりわけ後期の洒落本や人情本における登場人物の描写では、衣装などの身なりや風体によって表現されており、顔が描かれることはほとんどないという。稀に行われても、それは「身なりのシリーズ」の一環として類型化された顔でしかなかった（亀井 1984：24）。顔への関心が始まるのは、坪内逍遙の『当世書生気質』や二葉亭四迷の『浮雲』などの近代文学を創始した作品からである。

¹⁶ コマ絵の名所絵は二代目歌川国久による。

とに芸妓や花魁、女中、妾などの様々な百人の女性が描かれており、装いや髪型、小道具によってそれぞれの場に合った女性の特徴が表現されている。また腰を残したまま見返すという「蛇状」の姿勢も浮世絵においてよくみられるものだ（若桑 1997）。

一方、百美人展のほうは、撮影は全て同じセットで行われている。皆が凌雲閣と書かれた団扇を手に持ち、髪型や直立したポーズなどもほぼ統一されており、着物や帯の結び方のわずかな違いがみられるだけである（図1-9）。ゆえに百美人展の写真と、豊国の美人画とでは、「顔」と「着物やしぐさ」がちょうど反転しているようにもみえ、写真において際立つのは、やはりそれぞれの女性の「顔」の違いである。百美人展は、凌雲閣という東京名所を舞台とする《江戸名所百人美女》の明治版または写真版と評されることもある（我妻 2015）。しかし、《江戸名所百人美女》では百の舞台が描かれているのに対し、百美人展の背景はすべて同一であるという点において、やはり百美人展の写真は「場」に応じた「風情」に対する想像力が決定的に失われているといわざるを得ない。

百美人展の写真で撮影場所やしぐさなどが統一されているのは、「其の撮影場の異なる時はおのずから写真面にも相違を生ずる」という写真のイメージにおける多義性を統制するためであった（「凌雲閣の寫眞」『読売新聞』1891〔明治24〕年7月7日・朝刊）。カメラという「機械の眼」は、対象を選別せず詳細な細部をも写し出すという「新しい視覚」をもたらしたが（伊藤 1987）、そこで「人間の眼」が、見る対象をその人自身の意識によって選別し焦点化していることに初めて気付くのである¹⁷。統制された百美人展の写真は、この「機械の眼」がもたらす過剰な視覚を「人間の眼」に近づけるための配慮にほかならず、全身像を写していながらも、必然と「顔」に目が向くように構成されているのである。それは1節で取り上げた芸妓の名刺判写真（図1-1）との大きな違いでもあり、名刺判写真のほうでは芸妓の「風情」が着物の美しさやポーズによって表現されているようにみえる。むろん名刺判写真でも半身像の写真も見受けられるのだが、それでも百美人展の写真はあまりにも多くの要素が統制されすぎている。それゆえに、先に述べたように個々の女性の着こなしやしぐさ、さらに技芸の巧拙はもちろん、風致や品格というものをこの写真から判断することは難しい。フォーマット化されたこれらの写真によって、この人気投票が、ただ「顔」の美しさの違いによって競われることが最初から構造化されていることがわかるのである。

¹⁷ この「機械の眼」とは、W. ベンヤミンのいう「視覚における無意識なもの（視覚的無意識）」（Benjamin 1931=1998:17-18）と関連するであろう。



図 1－8．歌川豊国《江戸名所百人美女》

1857(安政4)～1858(安政5)年 東京都江戸博物館ほか所蔵



新橋(玉川屋)玉菊
十七歳 清元 川口しょう



新橋(相模屋)桃太郎
十九歳 常盤津 谷はな



新橋(中村屋)小と代
十九歳 長うた 辻とよ¹⁸

図 1－9．百美人展の芸妓の写真 1891(明治24)年

小沢監修(2012: 85-86)より転載

¹⁸ 左上から花街、(芸妓屋)、芸名、年齢、芸の長所、本姓名。()内の芸妓屋のみ
『百花美人鏡』(伊藤升次郎編、1891、金鱗堂)、あとは『東京百花美人鏡 志らせ号外
一名十二階美人品評の志ほり』(伊藤升次郎編、1891、金鱗堂)より(佐藤 2016:41-49)。



図 1 - 10. 『東京百花美人鏡』(1895)
(小沢監修 [2012 : 90] より転載)

百美人展の写真は、後に『東京百花美人鏡』として1冊の写真帳としてまとめられたが(図 1 - 10)、その写真は全身像ではなく、すべて半身像にトリミングされている。このことから、そこで焦点化されているのが「顔」であることを確認できよう。先の『文芸倶楽部』の口絵写真も、圧倒的にバストアップが多く、同誌の付録「日本百美人」も、やはり敷き詰められた百枚の写真のどれもが半身像であった。もともと半身像が「顔」に焦点化するものであるように、やはりその構図が「美人写真」の典型となっていくのである。

もちろん美人写真において、豊国の浮世絵のように豪華で優雅な衣装やしぐさというものにさほどこだわらなくてもよかったのは、これら女性たちの「顔」が十分に魅力的であったからに違いない。人々の「覗き見」の欲望の対象となったのは、あるいは「覗き見」を可能にさせたのは、芸妓の「顔」であったのだ。美人写真は、「芸妓」という存在が、遊廓や花街などの特定の場と強く相関するその装いや技芸ではなく、ただ「顔」というインデックスに落とされており、「顔」のイメージの表象＝再現によって消費されるようになったことを示している¹⁹。

¹⁹ 若桑みどり(1997)は、明治初年に油絵で描かれた《花魁》(高橋由一)では、浮世絵にみられたような遊女を美化する江戸期の視線が途絶えていることを指摘する。すなわち、それは西洋の視線を経由して公娼制が「人身売買」となるとみなされたことと深く関わっている。一方、本章で論じる「美人写真」は、「娼妓」(遊女)ではなく主に「芸妓」を被写体として定着し広まっていた。凌雲閣でも、百美人展後の1892[明治25]年11月13日より娼妓の「吉原百美人」展が開催されているが(広告『読売新聞』1892[明治25]年11月10日朝刊)、娼妓の写真は、『文芸倶楽部』のように芸妓の美人写真ほどオモテの世界における広がりを見せていない。第5章で論じるが、芸妓はこの後も現代でいうところのファッションモデルやタレント的な役割を担っていき、両者の落差はますます大きくなる。この娼妓と芸妓の間にある差異については、別途検討すべき課題だといえる。

1-4. 論じられる「美人」と「顔」

ここまで美人写真に写しだされたものを検討してきたが、次にこのような写真のイメージに対してどのような説明が加えられ、解釈がなされたのかをみていかなければならない。美人写真によるこの「顔」のイメージの消費は、まずは「見ること」の規範をめぐる「美人である／ない」を「顔」によって判断することへの批判と、そして「美人である／ない」を具体的に言語化する試みとを出現させた。

前者にあたるものとして、キリスト教の伝道者である松村介石による『婦人のかぐみ』（1893[明治 26]、警醒社）がある。同書は、女子教育の必要性を説くものだが、最後に「美人論」という章が設けられ、「美人」という言葉の使い方と、「内心の美」が伴わない美しい「外貌」というものが批判されている。

まずは、「美婦人」を指し示す「美人」という言葉の現在の使われ方に異議を唱えており、「美人」とは、「美婦人」のことではなく「賢人君子の類」を指すものであると主張される。ここで最初に咎められているのは、「女性」の「外貌」のみをもって「美人」と表現するそのやり方である。というのも、この「美人」には、「心意のうちに属」すものと「外貌の外に領」するものに分けられるからだ。とりわけ松村は、前者を重視しており、外貌だけでなく内心の美も伴わなければならないと述べる。松村のいう「外貌」の美しさとは、「色白く鼻高く眉目鮮やかに唇しまりて……」というもののだが、そこに「親切」、「優しさ」、「禮法」という「内心の美」が伴わなければ、いくら外貌が美しくともそれは「狼が羊の皮を蒙り」または「悪魔が天の使に變じたる如きもの」に過ぎないという（松村 1893：204-206）。つまり、外貌の美しさが、それそのものとして存在することを認めつつも、それとは別に内心の美というものが想定され、これらが互いに独立したものとしてみなされていることがわかる。

さらに、ここで注目すべきは、たとえ内心の美が伴わない「狼」であっても、「外貌の美」という「羊の皮」を被ることによって、それが容易に隠蔽されてしまうと捉えられていることである。とはいうものの、この著者が内心の美を重視するのは、以下の記事にあるように、外貌の美も注意深く時間をかけて観察してみれば、結局のところ、内心の美が伴っているかどうかを判断することができるからだという。

内心の美こそ亦た第一義なれ。内心こゝに美なるときは耳目鼻口自ら其情を洩らし。非常なる磁石力を放て周囲の人を引き寄するものとす。兎は云へども區別せよ作工して人造的に其美を装ふものと内心の溢れて自ら其美の外に發するものと。大に其趣きの異にするものあるを。（松村 1893：205）

外貌の美が、そのまま内心の美を現すわけではないが、しかし、内心の美のほうは、自ずと外側へとにじみでて、「外貌」（つまり、外面に位置する顔貌）に影響を与え得るものである。一度は外貌の美と切り離されて捉えられた内心の美が、ここで再び外貌と強く相関するものとして位置づけられている。具体的にどのような形で内心の美が外貌へと表出されるのかについては詳しく語られていないのだけれど、おそらくここでいわれていることは、後に「雰囲気」とか「表情」と呼ばれるものを指しているであろう。

以上のようにこの『婦人のかづみ』では、人々を様々な文脈から切り離し「外貌の美」のみによって捉えるやり方に対する違和感と憤りが示されている。ここで直接言及されるわけではないのだが、それは先の美人写真のような表層的な顔のイメージの消費、そして芸妓という職業の女性を「美人」として捉える見方を批判しているものと推察される。ここで重要なのは、前述のように内心の美というものが外貌の美によって隠蔽されることを認めているように、外貌の奥に隠された「内面性」に対する注視が呼び起こされていることである。つまり、内面性に対する注視は、むしろ美人写真が切り取り、自律した形で成立した外貌の美というものと深く関わっているのである。

それならば、「美人」とは具体的にどのような「顔」を指すのかという外貌の美そのものを直接的に語る記述が現れてくるのも、何ら不思議なことではない。たとえば『文芸倶楽部』に掲載されたある記事では、「面の美」よりも「意^いの美」を貴ぶべきだという先の『婦人のかづみ』のような意見を「俳優」か「宗教界の偽善者」による「道義的誤謬の見解」として退けている。この記事の執筆者は、「花の如く、雪の如く」美しい女性が男性を慰めるのだと、「意^いの美」よりも「面の美」を重視するのである（白水生「醜婦を呵す」『文芸倶楽部』1895〔明治28〕・10・20）。

ただし、こうした「面の美」に対する評価がそれほど容易ではないことを別の記事は示している。「和洋美人比較論」と題された記事では、6頁にもわたって希臘^{ギリシャ}や仏蘭西^{フランス}、米国の「美人の資格」が論じられるが、それは同誌の口絵部分の美人写真「三都美人」をみても「未^{いま}」に目移りがして、何人が一番美人だか優劣が判然しない」という想いと深く関わっている（思案外史「和洋美人比較論」『文芸倶楽部』1895〔明治28〕・8・20）。そして、ギリシャの「美人の資格」である「小さい頭」「低い額」「大きい、暗い——餘り鋭くない眼」「眞直ぐな鼻」「ふつくりした唇（引用元の傍点削除）」「小さい耳」「花のやうな清い顔の色」「細長首筋」というものと、日本婦人の基準との共通性や相違について、一つひとつ検討がなされる。おそらく何らかの洋書をもとに、ギリシャなどの美人の基準が紹介されていると思われるのだが、和洋の美人の間にある差異は「衛生の注意」の有無にあるものとして解釈されており、ここでは「内心の美」とか「意^いの美」には全く関心が払われていない²⁰。この記事における「美人」とは、たんに外貌の形態のことを指しているのである。

時代が下っても、『文芸倶楽部』では、美人の基準について論じる記事が散見される。たとえば「美人の顔」という記事では、「美人」に対し「客観的な定義」を下すことが難しいとしながらも、顔面の骨格が細長く頬骨が出ていないこと、滑らかな白い皮膚で、額の広さは顔の長さの3分の1弱で眼と眉の間は広く、眼頭と眼尻を結んだ線が水平であること、長い睫毛で、スラリと鼻筋の通った鼻、上唇が「富士山型」であること、横顔の曲線が「中凸^{なかだか}」であること……というように、その条件が挙げられている（兎耳生「美人の顔」『文芸倶楽部』1904〔明治37〕・10・1）。別の記事では、「美人」が「美しい顔」を意味するということが強調されている。「美人」とは、「貌^{かお}の美しい女の事也」、「顔面美！美人の光を放つものは是成、顔は美人の全部なる哉……」というように（富永沙鷗

²⁰ この「和洋美人比較論」に対する反論としては、青軒居士「京美人の評」（『文芸倶楽部』1895〔明治28〕・10・20）がある。

「美人とは何ぞ」『文芸倶楽部』1907[明治40]・13・2)。現代からみれば、このように「美人」と「顔」の緊密な関係について、執拗に論じられることに対して疑問を抱いてしまう。だが、それは「美人」という言葉の指し示すものが他でもない美しい「顔（の形態）」であるという、現代的な感覚によるものであるのかもしれない。この記事では、黒髪が推奨されることがあっても、装いや体型、さらに心の美なども捨象されており、主に語られているのは、やはり「顔」についてなのである。そして、わざわざそのことが強調されていたように、それは新しさを帯びた語り方であったのだろう²¹。

本章でみてきた百美人展や、『文芸倶楽部』の付録「日本百美人」の人気投票は、佐久間(1995)が指摘するように、コード化されていない「顔」が無秩序に増殖していくなかで、投票によって美の序列化を決めることが混沌とした身体イメージの群れに秩序を与え意味を与えることになる(佐久間 1995 : 234)。一堂に並べられ匿名の視線にさらされた多数の「顔」の美人写真は、先の『文芸倶楽部』の記事のように、それを見る者に対して自ずと「何（誰）が美しく、何（誰）が美しくないのか」という「美人」の標準と偏差を言語的に構成する欲望を生みだす。まず類型的で普遍的な見方が提示され、さらにそれが広く共有されることによって、感覚（とりわけ視覚）によって捉えられた「美人」の「顔」のイメージを序列化することが可能となるからだ。その意味では、「美人」の「顔」を「見る」こととは、それを「読む」ことだといえよう。ただ、ここでは先に挙げた『婦人のかばみ』のように、「美人」の内側にその美を読み込み、「顔」と内面性とのつながりを見出す試みとは異なり、「美人の顔の形態」そのものに対する解釈が語られるだけである。

本節で取り上げてきたのは、「美人」のイメージを「見る」ことにおける二つの様式であった。いずれも、自律した「美しい顔」の可視化に起因しており、さらにそれは本章で論じてきたように百美人展を契機として「美人写真」と呼ばれた芸妓の写真が広く流通していくさまと密接な関わりを持っている。これら相反する二つの語られ方は、この後も、同時期における〈女性美〉の多様な要素と結び付きながらさまざまな形で変容しつつ継続してみられるものとなった。顔の奥に潜む内面性に対する執着は、「女学生」向けのメディアにみられる典型であり、一方で外貌として独立している美しい顔（「美人」）の把握は、拡散しながら多様化していく。これらは、ここに端を発する「美人論」の系譜とていうべきものであり、後の章のなかで再び考察されることになる。

²¹ むろん「美人」の「顔」について言及するものは、明治期以前にもみられる。第2章で取り上げる1813年（文化10年）に出版された『都風俗化粧伝』^{みやこふうぞくけわいでん}では、「醜き顔を美人にする作り方」という化粧法が紹介されている（佐山＝高橋 1982 : 12, 81-101）。だが、そこで描かれている化粧法とは、たとえば「鼻の低きを高く見する伝」、「目の大なるをほそく見する伝」、「口の広きをせまく見する伝」、「丸き顔を長く見する伝」というものであり、ある美人像から外れた「見苦しい」形態を化粧によって修正する試みとなっており、そこで想定される美人像は、この記述を反転させた形でしかみえてこず、「美人」の形態を積極的に語る試みではないことがわかる。

第2章 衛生学における〈皮膚〉へのまなざし

2-1. はじめに

本章は、20世紀初頭における衛生学と〈女性美〉との関わりを記述していくことを目的とする。明治期において、西洋の科学的な価値観・考え方の影響が顕著に表れている領域の一つが衛生学であり、それに関連する身体的振る舞いや作法、身体に対するまなざしも大きく変わったといわれている。先の1章では、美人写真をきっかけにして「美人」を語る複数的な営みが出現したことを指摘したが、それらは、主に「芸妓」という身分・職業の女性を取り巻く出来事であり、それ以外の女性は排除されていた。だが、衛生学という領域では、その芸妓以外のある女性たちに向けて〈美しさ〉について語り始めるのである。

国民国家形成に伴う「国民化」の過程においては、画一化された身体的規範の要請が軍隊、学校、工場を通してなされたことが、これまで批判的に分析されてきた。文明＝衛生面に関わる身体の作法も、ここに位置づけることができる。政府による公衆衛生策は、国家的課題として国民の身体管理を目的とし、とくに明治初年には、コレラなどの急性伝染病に対して、西洋医学に基づく予防政策が掲げられた。急性伝染病への対処法としては、予防のための隔離が重視され、そして地方衛生行政が警察官僚に委ねられたことが、「国家主導の衛生」あるいは「上からの衛生」として問題化されてきた（波平 1984；安保 1989）。本論が照準する1900年前後は、成田龍一(1990)によれば、結核やトラホーム等の慢性伝染病対策として、とりわけ女性に対する日常的な衛生的配慮が要請された時期である。治療に長い時間を要する慢性伝染病に対しては、国家による公衆衛生策だけでなく、家庭内でのきめ細かな衛生環境の管理を必要とした（成田 1990：92）。この成田の議論は、国民国家形成期において、常に二次的な存在として扱われてきた「女性」の国民化の様相を描く試みだといえる。

しかしながら、女性身体に関する諸問題の全てを、とりわけ〈女性美〉という問題を国家論の文脈で捉えきれものではない。この点において井上章一(1991)の指摘は、非常に示唆的である。井上(1991)は、衛生行政の啓蒙機関、大日本私立衛生会による専門誌『大日本私立衛生会雑誌』のなかで、1884(明治17)年に展開された「衛生美人」構想に着目する（井上 1991:147）。その構想では、「面貌纖麗」で「色白く臀腰細小」たる古来の「美人」は「身体薄弱にして不幸短命」であるために、「身体特に健活なる者」を衛生上の「真の美人」として位置づけ¹、「臀腰肥大にしておたふく然たる良婦」との結婚を推奨する²。だが、この構想にはすぐに反論が寄せられており、「美の基準」を転換するのではなく、体育教育による女子の健康促進が提案された³。その意味では「衛生美人」構想は普及せず終わったといえる。しかし、二葉亭四迷の『浮雲』(1887[明治20]年)では「横幅の広い筋骨のたくましい」女性が「生理学上の美人」と表現されているように、

¹ 井上(1991)では、記事のタイトルが示されていないため、記しておく。以下注3まで同様。松山棟庵「談話会録事」『大日本私立衛生会雑誌』1884(明治17)年15号

² 柳下士興「談話会録事」『大日本私立衛生会雑誌』1884(明治17)年15号

³ 立花晋「女子体育法如何」『大日本私立衛生会雑誌』1884(明治17)年18号

「衛生美人」は「不美人」を指す言葉として使用されることになった。このように「啓蒙を茶化すような精神」が横溢していたのは（井上 1991：154）、衛生学的な観点から女性のく美>が語られるとき、やはり公衆衛生上の重大な問題であった伝染病対策のような緊迫性や深刻さがそこにはなかったということになるのだろう。あるいは「富国強兵」策という、兵士や労働者である「男性」に向けられた国家的課題と比べると、衛生学におけるく女性美>への関心は、はるか遠くの副次的なものとして位置づけられていたといわざるを得ない。

ただ「衛生美人」という言葉は、その後も医学・衛生学のなかに残存し、また女性向けの専門誌『婦人衛生雑誌』（1888[明治 21]～1926[大正 15]年、大日本私立婦人衛生会）においても、く女性美>に関するトピックが度々取り上げられていた。つまり、先の「衛生美人」構想は頓挫したとはいえ、衛生学の文脈においてく美>を語るという試みがここで全て立ち消えたというわけではなかった。と同時に、やはりそれらを国家論モデルによって扱うというわけにはいかない。

その証左として、明治期から大正期における消費領域のなかに、衛生学とく女性美>の結びつきを見出す以下のような議論がある。まず内田隆三(1994)は、資本の言説が人間（身体）についてどのように異なる語り方をはじめたのかを考える機縁として、1897(明治 30)年に東京の福原資生堂（現資生堂）が販売を始めた化粧水「オイデルミン」をめぐる言説編成について着目する（内田 1994）。内田(1994)によれば、近代以前と明治近代における化粧や美容をめぐる言説の決定的な差異は、近代のそれがく肌>を死化の過程に位置づけたという点にある。個人の生命の有限性を措定する西洋由来の「衛生と健康保全の政治学」を経由することで、く肌>を対象とした「美容法」はいずれ必ず訪れる死との闘い（「生－権力」Foucault 1976=1986）を意味し、そしてそれが「自己への配慮」、つまり主体化の形式となるのである。ここで、内田がく皮膚>をく肌>という言葉で表現するのは、それが商品を通して投資される「資本」として位置づくからにはかならない。

さらにこのく肌>に関する言説は、成田(1993)や鹿野政直(2001)が論じるように、1920年代において「大衆」を相手にしながら、より完成した形態に到達する。成田(1993)は、『主婦之友』や『婦人公論』などの女性雑誌において「衛生」とく美>を結び付けて論じる記事が頻出していることを見出し、衛生意識が定着するなかで美意識が衛生に同伴されてくる様相について論じている。そして鹿野(2001)も、やはり1920年前後の都市・新中間層において、治療のためではなく美容のために薬が服用されるようになったことを「薬の日常化」と表現している。両者ともに、く美>との結合による衛生思想の外延化、大衆への浸透を1920年代の消費領域のなかにみており、先の「衛生美人」構想のように1880年代において医学専門誌のなかで取り上げられたく美>に関することがらは、1920年代になると消費文化と結び付きながら展開されていくのである。

ただし、以上に挙げた三者の議論では、化粧や美容を転換させるきっかけを与えた医学・衛生学における「知」のあり方が必ずしも主題化されているわけではない。確かに20世紀初頭のある時期までの衛生学では、く美>について言及されることはあっても、化粧、あるいはそれに関する商品との間には明らかな断絶がみられた。だが、「皮膚衛生」という新たな衛生学に基づく身体観から生まれた「美容法」と、それに伴うある価値の浮上によって、両者が徐々に接続されていくのである。

本章では、〈女性美〉が語られる場が、医学・衛生学から消費の領域へと移行するその過程を記述していくことを目的とする。その際、公衆衛生や家庭内における衛生管理と密接に関連する、いわば国家論モデルと、そして内田らによる消費社会モデルのいずれか一方ではなく、社会空間のなかで、これらがそれぞれどう可動したのかについての同時代的な条件を捉えていく必要がある。そのため、本章で参照する資料もまた、複数の領域を横断せざるを得ない。一見すると断片的なものの寄せ集めのようではあるのだが、それは衛生学と〈女性美〉をめぐる言説の散らばりと、その布置を示すのである。

2-2. 〈皮膚〉の知覚

2-2-1. 「色の白さ」と徳容

後に論じていくように、19世紀末における衛生学は、〈皮膚〉に対する新たな知覚を提示する。ただし、日本では肌の「色の白さ」を尊ぶ習慣が近代以前からあったことはよく知られており、「色の白さ」という価値は、現在に至るまで連続して存在しているようにもみえるものだ。そこで本節では、衛生学における〈皮膚〉に対するまなざしが、それ以前といかに異なるのかを考察するために、近代以前の化粧・美容に関わる言説を検討することから始めたい。

1813(文化10)年に出版された『都風俗化粧伝^{みやこふうぞくけわいでん}』は、「色の白さ」に対する強い関心が寄せられていることをよく示している⁴。本書は、京、江戸、大阪で販売され、1923(大正12)年の関東大震災で版木が焼失するまで、初版の版木を用いて約110年の間、刷り続けられた(高橋 1982: 277)。これは世界に類をみない、驚異的なロングセラーである(石田 2009:20)。上中下の全三巻から成り、「顔面之部」(巻之上)、「手足之部」、「髪之部」、「化粧之部」(巻之中)、「恰好之部」、「容儀之部」、「身嗜み之部」(巻之下)に分かれているように、本書の内容は多岐にわたる(佐山=高橋 [1813] 1982)。

巻之上の「顔面之部」では、「顔の疾^{やまい}を治す薬の法」、「面上^{かみ}の色を白玉うする薬の法」、「醜き顔を美人にする作り方」という構成になっている(佐山=高橋 [1813] 1982: 12)。つまり、「化粧読本」として位置づけられることの多い本書ではあるものの、巻之上のおおよそ半分は漢方薬を用いた病の治療法にページが割かれているのである。

「顔の疾^{やまい}」として挙げられているのは、「粉刺^{にきび}」、「雀斑^{そばかす}」、「黒子^{ほくろ}」、「黒痣^{くろいぼ}」、「疣^{いぼ}」、「黒癬風^{くろなまず}」⁵、「白癬風^{しろなまず}」⁶、「瘡^{くさ}」⁷、「耳だれ」⁸、「唇さけいたむ」、

⁴ 江戸期における他の化粧書に関しては、高橋(1985)や鈴木(2003)を参照。なお、高橋によれば、江戸期において化粧から身だしなみ・美容などを総合的にまとめた書は『都風俗化粧伝』に限られるという(高橋1985)。

⁵ デンプウ菌によりできる淡褐色から暗褐色の斑点(佐山=高橋 [1813] 1982: 31)。

⁶ 後天的に発生する皮膚色素の脱失症(佐山=高橋 [1813] 1982: 36)。

⁷ 湿疹、天然痘、また梅毒(瘡毒)を指す場合もあり、もとは皮膚病の総称として使われていたという(佐山=高橋 [1813] 1982: 38)。

「眼赤く涙多く出ずる」⁹、「頭に兜瘡しらくぼの出来たる」¹⁰、「皺」、「耳鳴り」、「鼻赤くなりたる」¹¹、「齒齲はぐきより血出ずる」、「倒睫さかさままつげ いたむ」などである（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 31 - 61）。また、「乾癬たむし」¹²を治すための「呪まじないの伝」も紹介されており（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 45）、漢方医療と並行して神仏への祈願およびそれに伴う「呪まじない」が行われていた江戸期の様相をうかがい知ることができよう（富士川 1985）。ここに集められた病の分類基準は、現代医学のものと比べると不明確であるように思われるのだが、顔の皮膚、あるいは耳、歯、頭という顔周辺の、つまり、着物から露出する首より上の部分にみられる多様な疾病が「顔の疾やまい」として集約されているのである。さらに上記のなかには現在の化粧・美容の対象範囲ではないものも含まれているけれど、『都風俗化粧伝』ではこれらも対処すべき問題として捉えられていたという違いがある。

先述したように巻之上では、この「顔の疾やまい」を治す薬の法」の後に、12種類にも及ぶ「面上の色を白玉うする薬の法」が紹介されている。このような「顔面之部」の構成を改めて眺めてみると、先の多様な「顔の疾やまい」を治す薬の法」には、「色の白さ」を際立たせるためのものが寄せ集められていたと捉えることもできるかもしれない。さらに巻之中の「化粧之部」では、白粉を手際よくとくための方法や「黒き顔に白粉をする伝」などが取り上げられており、眉や紅と比べて白粉の比重が大きくなっている（佐山＝高橋 前掲 154-185）。つまり、本書の記述からは、「面上の色を白玉うする薬」を用いた方法や、「白粉」を塗った状態における「色の白さ」へのこだわりが確認される。むろん高価な白粉とその使用は、「都／それ以外の地方」、「上流／下層」の差異を形成するのであり、「色の白さ」には、ある程度の特権的な価値が与えられているとみなすことができるのだろう。

とはいえ、別の巻のなかでは、髪のかき方や身嗜みの方法が、やはり執拗と思われるほど詳述されており、ことさら「顔」やその「色」というものが他から明確に分節化されていたというわけではない。ここにおける顔、面上の色、病、化粧、髪、装いなどは、「化粧けわい」という枠組みにおいてすべて等価なのである。そもそも本書のタイトルにもある、「化粧けわい」とは、紅・白粉・眉墨・お歯黒などの、いわゆるメイクアップ（「化粧けしやう」）のことだけを指すのではなく、これら「化粧けしやう」に加えて、髪のかき方や、容儀かたちづくり（帯の結び方など）、身嗜み（楊枝の使い方、あくびの止め方など）のように広義の身の扱い方全般のことを意味する（高橋 1982 : 292）。さらには、ここに道徳が加わるといってよい。各巻の冒頭や各々の部には「頭書」が掲げられており、そこでは必ず「化粧けわい」とともに心得るべき「徳」について言及されるのである。たとえば巻之中は、次のような記述から始まる。

化粧容儀けわい かたちづくりするは、愛敬を得、徳をおさむるの源にして、身の穢れ、不浄を清潔し、礼を正しうするのもと、身清ければ心こころ自おのら正しく、聖人も婦人の四徳を給う。中にも徳容

8 耳垂、耳漏（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 39）。

9 涙腺炎（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 43）。

10 頭部潜在性白癬、白禿瘡はくとうそう（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 46）。

11 酒皸しゅき（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 52）。

12 尋常性鮮屑癬せんせつせん（佐山＝高橋 [1813] 1982 : 45）。

と並べ挙げ玉えり。徳とは身を脩め、家を斉のうるをいう。容は容儀することを謂う。容儀とは、化粧し、容儀を正しうするを云えり。心と容儀は、原、一体にて、化粧し容儀するときは、心自ら正しく、父母に孝を尽し、嫁しては舅、姑によつつかえ、夫に貞節を守り、他人を敬い、召仕える者に慈悲深く、貧しきを救い、長いたるを敬い、幼きをあわれむは、みな愛敬より出るところなれば、晨に起きては日々鏡にむかい、顔に化粧し、容儀をつくり、心の鏡にむかいては、あしきを遠ざけ、よきにうつり、曲がれるをため、直きにしがたい給わば、実に女の道を守り、化粧の誠を得玉えると謂いつべきなり。（佐山＝高橋 [1813] 1982：103）

このように「化粧容儀」と、父母に孝を尽くし、舅、姑に仕え、夫に貞節を守るという「徳」（心）は、「徳容」として一体のものであり、「化粧容儀」とは、ただそれ自体として在るのではなく、正しい「徳」を備えることによって完成される。江戸期における代表的な女子教訓書ともいえる『女大学宝箱』（1716〔享保元〕年）¹³では、「女は容より心の勝れるを善しとすべし」と明言されているように（石川編 1977:31）、『都風俗化粧伝』においても、「徳」から独立したところで「化粧容儀」が語られることはなかったということになる。したがって、先の漢方薬による「顔の疾を治す薬の法」、「面上の色を白玉うする薬の法」、白粉に関する記述からは、ある程度の「色の白さ」に対する特権的な価値が認められるものの、それはあくまでも「徳容」のなかに包摂されていたということをここで指摘しておかねばならない。

2-2-2. 「科学」的容儀

明治期においても、『都風俗化粧伝』の「化粧」および「徳容」は、「女子教育」の文脈のなかで引用され続ける¹⁴。たとえば『貴女のたから』（嘯風吟月楼主人、1891、細謹舎）、『女子修身美談』（篠田正作、1894、鐘）などが挙げられるが、これらの書における「容儀」も、「顔」や「化粧」に特化されることなく、また女性の生活全般に深く根付いているという点において、確かにそれは近世的な語られ方ではある。だが、本論ではこの点にこれ以上深く立ち入らず、『都風俗化粧伝』の記述を引き延ばしながら「医学」

「衛生（学）」「科学」の文脈のなかで語られる「容儀」へと論を進めることにしたい。

タイトルに「衛生」と冠して、病の治療法や「色を白くするための方法」を扱うものに、1891（明治24）年に出版された『容儀衛生 治病新法』（柴田三治郎編、鴻益堂）がある。緒言には、「内外諸大家か 浩博の學理を實驗により研究し得たる理化學的醫學的の一大新奇發明法にして苟も奏効確實にして鴻益便利なる者ハ之を蒐集して……」とあるように、本書はそれ以前の漢方医学とは異なる新たな処方掲載されていることが強調される。

¹³ 貝原益軒の『和俗童子訓』（1710〔宝永7〕年）から妙出したと言われている（石川編 1977：306-307）。

¹⁴ 他にも女子教育という枠にとらわれずに『都風俗化粧伝』の記述を引用する書もある。たとえば『男女必携容儀之栞』（成井武三郎編、1890、備後屋書房）、『美人——一名・

「漢字かな混じりルビつき」の文体であることから、本書は医学専門書ではなく一般向けに書かれたことがわかる。本文は、「死人蘇生法」や「^{ばいどく}煤毒傳染豫法の奇法」、「胃病^{そく}即治法」、「火傷即治法」などが書かれた「^{さいせいち びよ}濟生治病之部」と、「肉色を白く^{つやゝか}艶美ならしむ法」、「身体を肥大強壯にする法」、「腋臭を治す最簡易法」などの「容儀之部」の二部構成となっている。一冊の書籍のなかで、「濟生治病之部」と「容儀之部」が並置されているのは、一見すると奇妙である。だが、当時においてこうした構成はそれほど珍しいものではなかった。『内外名医万法秘術人間生涯之宝』（小田垣鉄治郎、1888、但海編、大和屋）でも、「身体の色を白くし艶を出す法」から、「頭痛即治法」、「傳染病を豫防する法」に至るまでいっしょくたに取り扱われているし、あるいは『諷誠妙々奇法』（捉風山人、1889、長瀬寛二）では、ほかに「商売ノ秘法」や「小説ノ面白キヤ否ヲ一見シテ知る法」などが加わっている。ようするに、これらは体系的であるというよりも、生活全般における知恵や問題の解決法を「衛生」や「医学」という「科学」的な観点のもとに寄せ集め、それを「奇法」「秘法」「秘術」などと称しているというわけなのである。

ただし、内容もそれに準ずるかといえそうではないようだ。『容儀衛生 治病新法』の「容儀之部」では、前述のもの以外に「七日間に男女の色を白くする法」、「^{よら}皺の寄^{（マツ）}奇法」、「鼻の赤きを治す法」、「^{（マツ）}ナマヅ速治法」などが詳述されるが、これらは先の『都風俗化粧伝』の「^{やまい}顔の疾^じを治す法」や「^{か お}面上の色を白玉うする薬の法」に書かれているものとほぼ重複しており、その方法も、ごく一部を除いて同じ内容なのである。たとえば「七日間に男女の色を白くする法」では、「白小豆」「滑石」「^{びやくだん}白檀」¹⁵を粉末にしたものを絹で漉し、顔を洗うときに用いるよう記されているが（柴田編 1891:23）、それは『都風俗化粧伝』の「色を白うする薬の伝」（佐山＝高橋 [1813] 1982: 67-68）に書かれたものと同じ製法なのである。前述のように本書のタイトルには「衛生」が、また緒言においても「理化學的醫學的の一大新奇發明法」であると掲げられていた。しかし、「理科學上の進歩」によって発見されたと謳われるその「新奇發明法」も、実は漢方薬を用いたものが中心であり、それも『都風俗化粧伝』からの引用が圧倒的に多くなっているのである。

とはいえ、『都風俗化粧伝』との違いも見出すことができる。本書の「容儀之部」の冒頭に掲載されている「肉色を白く^{つやゝか}艶美ならしむ法」で調合される成分には、「米の白水」、「^{たまご}鶏卵の殻」などの他に、『都風俗化粧伝』にはなかった「^{くすり}グリスリン」や「^{くすり}薬俵屋」にあるという「サアサパリラ」が含まれており、それが漢方薬ではなく西洋薬学由来の「^{はくしよくすり}白色薬」であることをうかがわせるのである。また、この「肉色を白く^{つやゝか}艶美ならしむ法」では、具体的な薬剤の製法が示される前に下記のように記述されている。

男女問はず貴賤を論せず、肉色の良^{よしあし}否ハ當に外貌の美醜如何のみならず大に風采にも係
はるものにて、世の諺にも色の白きハ七難^{かた}を置すと云へり。然るに或^{しやうらい}ハ性來或^{しやうらい}ハ
疾病^{やまい}によりその色醜^{みにく}悪くなる爲、心陰^{ひそ}かに不快を感じ憂^{ゆう}苦悲嘆の中に幾多の歳月を送れ

男女化粧法』（三田村真喜、1894、美人社）など。

¹⁵ ビャクダン科の常緑高木。白檀油には殺菌作用があるという（佐山＝高橋 [1813] 1982: 63）。

るもの少なからざるは豈慨嘆の至りならずや。故に人その肉色艶^{うつく}しくし天然の美を増さんと欲せば左の法を行ふ時ハ如何に色の黒きも醜さも忽ちかわる美婦男^{びふなん}となる事實地経験上最も確實なる良法なれハ世の貴嬢紳士よ幸に之を實行して其効確實なるを知給へ。(柴田編 1891 : 21)

おそらくこのような前置きも、先の『都風俗化粧伝』の形式を真似たものであるのだろう。ただ、これらが「容儀之部」としてまとめられてはいるが、それは明らかに『都風俗化粧伝』における「容儀」とは異なっている。というのも、上記のように「肉色^{としあし}の良否」は、「男女」の「外貌」や「風采」に関わるというのだが、『都風俗化粧伝』で女性に対して執拗に求められた「徳」という語は一度もでてこず、捨象されているからある。さらに「徳」から独立した本書の「容儀」は、外見上の、それも髪や装いではなく、「肉色」、「皺」、「赤鼻」というように、おおむね皮膚とその周辺に関する問題として編制されており、また先の前置きでは「肉色」を「天然の美」と表現しているように、それは科学的な知によってコントロールする対象として位置づけられるのである。

本書では、『都風俗化粧伝』において「化粧^{けわい}」に包摂されていた色を白くするための方法や病の治療法が、「衛生」あるいは「医学」の名目のもとに集められていた。むろん西洋医学・衛生学の体裁をとりつつも、ここに掲載されたものの多くが漢方薬に依拠しているのであり、内容的にはほとんど『都風俗化粧伝』と地続きにあるともいえる。ところが、この「徳」から切り離された「容儀」における「肉色」は、後に「医学」「衛生学」の領域へと機能分化されていくのであり、この混沌とした小さな本は、まさにその過程に位置づくものとして捉えることができる。

2-2-3. 「皮膚衛生」による美身術

先の『容儀衛生 治病新法』と比べると、1893(明治26)年に森種太郎(刈城)によって書かれた『衛生美身術(寸珍百種第34編¹⁶)』(博文館)は、より西洋医学的な文体となっている。著者の森種太郎は、東京市小石川の恒善堂医院の院長で、本書の他には『肺病の話』(1916[大正5]、森分院)や『妊娠の悪阻の原因と其新治療法』(1930[昭和5]、森種太郎)などの著作が確認される。先述したように成田(1990)によれば、1900年前後は慢性伝染病対策として、とくに女性に対して家庭内における細かな衛生管理が求められた時期であり、この『衛生美身術』も一般の家庭向けに書かれた通俗的な衛生書の類として位置づけることができよう。ただ、この「衛生管理」のなかに、「美身術」という観点が加えられているというところが本書の特徴となる。身体^{しみたく}のなかでも殊に摂生をつくすべき四器が「皮膚、毛髪、歯牙、爪甲¹⁷」とされるが、とくに「皮膚の色澤」によって、その

¹⁶ この「寸珍百種」シリーズは、『学問之方針(第一編)』、『事物原始一千題(第四編)』、『通俗簡易治療法(第十編)』、『實用英字書法(第十三編)』、『俳諧名家列傳(第二十三編)』、『西洋事物起源(第四十六編)』など、全52種が出版されており、多彩なテーマを取り扱う実用書であるといえるだろう。

¹⁷ ここで毛髪が挙げられているのは、当時の油を使用した毛髪の拭浄が容易ではなかったという事情だけでなく「身体髪膚之を父母に受く敢えて毀傷させるは孝の始めなりと然れば即ち一毛髪とたりともいえどもみだりに抜取すへからざるや知るべきなり」(森 1893 :

人自身の「健否」を察することができるという（森 1893：2）。本書の章立ては、第1章 人の皮膚、第2章 毛髪、第3章 歯牙、第4章 美身の爲めに使用する物品、第5章 急病の手引草から成るが、最初に皮膚に関する章が掲げられ、他の章と比べてページ数も多くその記述にも厚みがみられることから、これら四器のなかでもとりわけ皮膚に対する衛生管理が重要視されていることがうかがえる（そもそも「爪甲」に関しては独立した章も設けられていない）。

第1章の冒頭には、「皮膚を鉛直に切断」したという断面図が掲げられており、皮膚が「角質層」「粘液層」「色素層」「真皮」、「汗腺」「汗孔」「毛根」「皮脂線」等から成り立ち、触覚を司り、物質の分泌や放散作用という機能を備えていると説明される（森 1893:10-16）。この目に見える表面の部分だけではない、皮膚内部の構造・機能に対するまなざしは、これまでみてきた言説とは明らかに異なる認識論的転換をはらんでおり、ここではく皮膚が解剖学・生理学という西洋医学の枠組みのなかで、把握されるのである。また目に見える部分も、それまでとは異なる捉え方がなされている。く皮膚の表面は、単なる表面であるだけでなく、多くの疾病の侵入を防ぐことができるという重要な機能を備えており（森 1893：17）、さらにその「外貌」は、「体内器官と直接関係」を有し、体内の臓腑に疫病が生じるときには、必ず「不快の相貌」が表出されるというように、身体内部の状態や病の兆候を映し出す一つの指針として注視されるのである（森 1893：20-21）。病の外的兆候に着目するという、身体内部を可視化する試みも、やはり西洋医学の考え方に基づいている。西洋医学では、身体内部の各組織や器官の機能に関心を寄せ、そこに生じる「原因」と「症状」との間に直接的な対応関係を認めているが、ここでも解剖学・生理学が提供する理論上の構造をもとにして、直接目にすることはできない器官の機能不全や損傷を想像した上で、それが病の兆候としてく皮膚を通して、ある特徴を持って現れると捉えられているのである。

ところが、この衛生管理を怠れば、風邪や伝染病だけでなく、「^{こしは}細皰、^{にきび}面皰、^{りんせん}鱗癬、^{あせも}汗疹、^{なまず}癩風、^{くさ}苔癬、^{ひじん}皮疹、^{のうしん}膿疹、及び^{かじつはん}夏日班」という様々な疾病に罹りやすくなるという（森 1893：31）。やはりここに挙げられている病の多くが『都風俗化粧伝』でも扱われていた。だが、本書では、対象ごとに章が独立していたように、ここではく皮膚の疾病に限定されており当然のことながらそれ以外の病については言及されていない。現代ならば、これらく皮膚に関する病は、おおむね「皮膚病」として括ることのできるものである。

さらに病は、身体の形態が変形し、醜状を引き起こすという。く皮膚の醜さは、病の外的兆候であるだけでなく、衛生管理の怠慢による不健康な状態と結び付けられるのである。つまり、ここで推奨される「皮膚衛生」は、生存の条件を整えるための「身体」の規律であるだけでなく、「精神」の規律ともなる。このような身体管理は、『都風俗化粧伝』において重視され、そして前節の『容儀衛生 治病新法』では一度消失した「徳容」という規範の機能的代替物であると捉えることもできるだろう（ただし、その配分は大きく異なっているのだが）。

以上のように、『衛生美身術』のなかで説かれた「皮膚衛生」では、く皮膚の表面に

4）とあるように、儒教観の影響がうかがえる。

現れる病の外的兆候に着目し、「健康／病」の可視化を試みるが、その際、判断基準として提示されたのがく皮膚>の「美／醜」であった。もっとも『都風俗化粧伝』や『容儀衛生 治病新法』でも、病とその症状は対処すべきものとみなされていた。しかし、この『衛生美身術』では、解剖学・生理学という西洋医学の知に基づき、く皮膚>の衛生を保つことで多くの疾病を防ぐことができること、く皮膚>を身体内部の器官との対応関係のなかに位置づけること、そして「病」だけでなく「健康」な状態をもく皮膚>の美しさを通して判断するという新たな試みがなされているといえよう。

ここに、美しいく皮膚>というものが「資本」に転じる可能性を見出し得る。しかし、この段階では、まだそれをはっきりと確認することはできない。というのもこの「衛生美身術」とは、衛生を保ち、疾病を予防することによって達成されるもので、たとえば化粧品といった商品を使用することは、その範疇ではないからである。とりわけ有害な成分を含む化粧品は注意深く避けられなければならなかったし、化粧品による修飾は、表面上く皮膚>を「艶麗」にするものの、生身の身体に直接働きかけるわけではないために、それはたんに「不健康者」が「健康者」を擬するに過ぎないのである（森 1893：53）。く皮膚>の「美／醜」が、「健康／病」との関係のなかに位置づけられているとはいえ、「衛生美身術」では、化粧品などの何らかの商品を通してなし得るものとは考えられてはいない。

他方で、衛生学という新しい科学的枠組みのなかで「美／醜」という観点によって捉えられたく皮膚>は、積極的にく美>を形成するものとして取り入れられていく。1897(明治30)年に博文館より出版された『秘術伝法(日用百科全書第24編)』(大橋又太郎編)では、『衛生美身術』の一部が「美人となる法」(傍点引用者)として転載されている。この後に出版される一般向けの多くの衛生書においても、『衛生美身術』とよく似た記述が見受けられた。似たような言説がさまざまな回路を通して反復されることによって、く皮膚>に関する言説は徐々に厚みを帯びてくる。次節では、この類の言説について取り上げていくことにしよう。

2-3. 「美容法」としての衛生

2-3-1. く皮膚>の色

先の『衛生美身術』のように、衛生学的観点に基づき、美しいく皮膚>に健康な状態をみるという試みは、20世紀に入って、とりわけ日露戦争後になると、ある種の転倒がみられるようになる。すなわち、美しいく皮膚>を得るためのものとしての健康法が語られ始めるのである。それがはっきりと見出されるのは、1906(明治39)年に衛生新報社編輯局より出版された『実用問答 皮膚病篇』(田中友治監修、丸山舎書籍部)においてである。医学専門の新聞紙『衛生新報』をベースにして編まれたこの実用問答シリーズには、他に『生殖器篇』(1906[明治39])、『妊産婦篇』(1908[明治41])、『脳神経篇』(1911[明治44])、『呼吸器篇』(1912[明治45])、『花柳病篇』(1912[大正1])などがある。このよ

うに本シリーズは、医学内の専門分化にゆるやかに対応した区分がなされているのだが、医学専門書ではなくいずれも一般の読者向けに分かりやすく書かれた通俗的な医学・衛生書となっている。

さて、『実用問答 皮膚病篇』は、東京医科大学皮膚科の医学士・田中友治が監修・校訂を担当しており、「皮膚の養生法」、「皮膚病に対する養生法」、「毛髪及爪の養生法」、「皮膚病取扱と温浴」について詳述されている。本書も前節で取り上げた『衛生美身術』と同じように、〈皮膚〉は、医学・衛生学的なまなざしによって対象化されるが、特筆すべきは、これらとともに「美容法」という章が設けられていることである。それは、「美容法に就ている へ の方面から」、とくに「色を白くするにはどふすれば善いか」という質問があり、その要望に応えてのことであった（田中 1906:191）。つまり、先の『都風俗化粧伝』や『容儀衛生 治病新法』でも確認された「色を白くするための方法」は、ここにきて衛生学の知を用いた解決が求められるようになったことを示している。

本書で「美容法」として提示されるのは、「身軀を健全にすること」、「皮膚を清潔に且つ皮膚の抵抗力を強むること」、「粗悪な石鹼或は有害物を含んで居る化粧品を使用せぬこと」、「適當なる化粧を施すこと」、「飲食物に注意して運動を壯んにする」ことであり（田中 1906 : 190-192）、ようするに、それは「皮膚の健康法」なのである。そして「醜い皮膚には不健康の者が多い」と指摘されるように、先の『衛生美身術』と同様の論理も確認されるのだが、それだけでなく「皮膚の衛生」を守るという「心掛け」次第で、「皮膚の光澤や色合など」はどうにでもなるという（田中 1906:189）。ここでは、健康な状態は美しい〈皮膚〉に現れるという『衛生美身術』の論理を逆転させ、美しい〈皮膚〉を得るための健康法が「美容法」として提示されているのである。

ただし、このような美容法によって推奨される〈皮膚〉の「色」は、「一般の人の考へ」とは異なっていた。「いくら色が白くても年中病床に呻吟して居る人は決して美人とは云へない。それよりは少し位色が黒くても身體の丈夫な無病の人は顔色でも手足の色でもいき へ してどの位奇麗だか知れない」というように、〈皮膚〉における「医学衛生上から見た美」は、「色の蒼白き病者」ではなく「色の浅黒き健康」な者にある（田中 1906 : 191-192）。そして、この「根本道理」を損なう危険のある「藥劑」や「白粉」の使用が厳しく禁じられるのである（田中 1906 : 190）。

本書の新しさは、いろいろな方面からの求めに応じて、医学・衛生学の知見に基づく美容法が提示されたという点にあった。ところが、「健康／病」を基準に据える限り、「色の白さ」は「病者」のイメージと結びついているために、その〈美〉を認めることはできず、かつ「色を白く」するための「藥」や「白粉」も、やはり有害性という点から推奨することもできない。ゆえにその内容は、「美容法」といえども、実に、先の『衛生美身術』と何ら変わりがないのである。本書では、衛生学に基づく美容法というものが掲げられてはいるものの、それは「色を白くするにはどふすれば善いか」という質問に応え得るような方法ではなかったということになる¹⁸。

¹⁸ 1907（明治 40）年には、この実用問答シリーズのなかに『実用問答 男女美容篇』が加わっている。だが、同書に掲載された「色を白くする法」も、この『実用問答 皮膚病篇』に記述と大きく変わるわけではない。

2-3-2.『女学世界』の衛生問答

ここで、いったん分析を「女学生」年代向けの雑誌である『女学世界』¹⁹に転じてみたい。というのも、同誌に掲載された読者相談欄の「衛生顧問」では、先の『実用問答 皮膚病篇』と同様に、衛生学的に「正しい」く皮膚の色について言及されるのだが、それをめぐって相談者と回答者との間に興味深い攻防がみられるからである。「衛生顧問」は、1904(明治37)年(第4巻2号)から1910(明治43)年(第10巻14号)まで全51回掲載されており、問答の回答者は、民間の医師である糸左近が担当していた。この問答には、妊娠から出産、風邪や肺病、トラホーム等のさまざまな予防・治療法が取り上げられるだけでなく、化粧品の効果や痩せ薬の効能、背の高くなる方法、そして色を白くするための方法、つまり美容に関する読者からの相談も多数寄せられている。身体に対する様々な問題群について医学・衛生学的な知による解決が求められたという点は、先の実用問答シリーズと重なるであろう。あるときには、読者からの質問の葉書が一ヶ月間に「千百六十三通」にも及んだとあるように(「衛生顧問」『女学世界』1906[明治39]・6・12)、相当人気のある記事であったことがうかがえる。

やはりこの「衛生顧問」でも、「色を白くするための方法」について教えてほしいという読者の声が多数見受けられた。だが、やはりこの回答者も「日本人の色の黒いは特有である。白いのよりは何程立派であるかも知れぬ。答者などは色の白い女を見ると醜く思ひます」(「衛生顧問」『女学世界』1904[明治37]・4・5)、「天が興へた顔を人が何うされますものか……不具^{かたは(ママ)}で無くば大いに喜んでゐるが可い、……精神を美麗高尚に持てば、心身関係の道理で何となく其人の容貌も美しく氣高くなると思ひます、……余が敬愛する女学世界の愛読者よ、……色黒く、筋骨逞ましく、力秀で、腦力強く、それで花よりも美しい情^{じよう(ママ)}にならうと思召さぬか」(「衛生顧問」『女学世界』1904[明治37]・4・16)と、その願望を戒めるのである。この「精神」の美しさが「容貌」に影響を与えるとする論理は、第1章で取り上げた「外貌」の奥に潜む「内面性」を重視し、その「内心の美」が「外貌」に表出されるとする論理とほぼ同様のものであろう。ここでも、「色の白さ」という自律した外面上の出来事について語る読者に対して、「外面」と「精神」の美しさとの強い結びつきが提言されている。

一方、回答を担当した医師は、『女学世界』の別の記事のなかでも衛生学的に正しいく皮膚の啓蒙を試みており、「唯白いばかりで光澤も無く、脂も無く、コセ^{さだ}へと所謂鮫^{さめ}膚^{はだ}で、其の上冷たく、しかも風胃^{ふうい}をひき易いやうなのは、昔の美人かも知らぬけれど、二十世紀の美人では無い」と、「つや^{つや}へと光澤があつて脂こくすべ^かへと滑らかで、何時も温かい皮膚」を「生理衛生上でいふ美人の皮膚」として位置づける(「生理衛生美人の肌膚」『女学世界』1904[明治37]・4・9)²⁰。さらに、普通は「色さへ白ければ美人の如く考ふるけれど、余は浅黒なるを美とする」と、医学・衛生学上の理に適うく皮膚の

¹⁹ 以下、『女学世界』と表記する。『女学世界』は、博文館より1901(明治34)年1月～1925(大正14)年6月まで発行された。なお『女学世界』の概要については、本論第3章を参照されたい。

²⁰ この記事は、糸左近の著書『通俗治療法：四季応用』(1906、博文館)に再録されている。

色について言及し、「色の黒くなるを恐れて大切な太陽の光線を避けて深窓の下に閑居を事としたり、砒石を含める色白薬を用ゐたりする人」を非難する（「美人となる法：婦人の日常生活と美貌術」『女学世界』1906[明治39]・6・10）。「色の白さ」を衛生的観点から批判した上で、「生理衛生上でいふ美人の皮膚」を掲げているという点において、この回答者も先の『実用問答 皮膚病篇』と同様に、読者から問われた「色を白くするための方法」に対して明確な回答を示しているわけではない。

ただし、この「衛生顧問」では、その後も読者からの反論が切り捨てられることなく掲載されており、ある読者は「毎度先生の御説法もあります、凡人の情として黒いよりは白い美しい顔になりたくあります、色の白い者必ずしも弱くて黒い人は^{きつ}屹と強いとも限られぬやうですから、果してあるものならば^{どう}何ぞ教へて玉はれ」と、回答者の持論に対し異議を申し立てている（「衛生顧問」『女学世界』1905[明治38]・5・1）。また別の読者も「筋骨逞しく、身體健やかにて、それで色黒ければ先生のご持論通りになれど、私は……筋肉痩せてゐる上に皮膚銅色、それで結核の遺傳あるといふ不幸者、何卒筋肉肥え太つて皮膚雪の如く、その上澤々（つやのこと：引用者注）あるやうになる方法ありますまいか（傍点引用者）」（「衛生顧問」『女学世界』1905[明治38]・5・5）と、やはり「色の白さ」に固執する。結局、色の白さを求める読者からの相談が絶えることはなく、この「衛生顧問」のなかで回答者が勧める〈皮膚〉の色を黒くする方法について尋ねられたのは、色白く婦人のようだという質問者の夫に関する相談の1件のみであった（「衛生顧問」『女学世界』1905[明治38]・5・5）。回答者自身も、「衛生顧問を担当して以来『色を白くする法を教へよ』との手紙は一々数へても見ませぬけれどおそらく万に達した」というように（糸左近「醫學上より見たる白色法」『女学世界』1908[明治41]・8・11）、色の黒く健康的な「生理衛生上のいふ美人の皮膚」という新たな提案が読者に難なく受け入れられたとは、とてもいえない。むしろこのような「衛生顧問」におけるやりとりは、回答者と読者との間にある明らかな意見の相違が示されている。

そしてこの回答者は、同誌の別の記事のなかで読者の要望に対処しようとするために、これまで満足な回答を示してこなかった15種にも及ぶ「醫學上より見たる白色法」を紹介している。ただ、ここで紹介された多様な方法は、実際に検証してみるとどれも「根も葉も無い空言」や「法螺」であるとして、最終的に出された結論は「白色法は無いものと諦めて頂きたい」というものであった（糸左近「醫學上より見たる白色法」『女学世界』1908[明治41]・8・11）。「余は他日、確實なる皮膚艶麗法を責任を負うて論ずる」と締め括るのだが、管見の限り、そのような記事は確認されなかった。結局のところ、読者に求められた「色を白くするための方法」として十分に答え得る確かな方法はなかったということになる。回答者にとっては、「美貌云々の書物或は薬は俯仰天地に愧ぢぬといふ良心を以て著はし且つ賣るもので無い」のであり（「衛生顧問」『女学世界』1905[明治38]・5・5）、それは確かに医学・衛生的に正しく、誠実な見解ではあるのだろう。だが、やはりここには「医師」という立場によって言及することのできる美容法の限界が示されており、「色を白くするための方法」が知りたいという読者の要望は、ここでも結局裏切られることになっている。このできごとが直接的なきっかけとなったのかについては定かではないが、それから程なくして問答の回答者・糸による記事は誌面に掲載されな

くなり、この「衛生顧問」も 1910(明治 43) 年の第10巻14号で連載を終えている。

2-3-3. 文化的価値としての「色の白さ」

ただし、『女学世界』では、医学・衛生学に基づく美容法も同時に言及されなくなったというわけではない。たとえば医科大学の大森柳二は、〈美〉は健康から成り立つという前提に従い、〈皮膚〉を清潔に保つことの重要性を主張しつつも(大森柳二「化粧品使用の心得」1908[明治 41]・8・14)、しかし、「顔の色を白く美しくする法」と題した記事では、「美人」の最も重要な要件として「色の白さ」を挙げている(大森柳二「顔の色を白く美しくする法」『女学世界』1909[明治 42]・9・1)。それぞれの時代によって「瓜実顔」や「丸ぼちや」(引用元の傍点削除)が好まれてきたように、〈美〉の基準にはさまざまな変遷が見られるが、ただし「色の白さを貴ぶ風習は、熱帯地方を除いては、各國人共に同一である」という。ここにおける「色の白さ」は、医学・衛生学の観点からではなく、美意識に関する文化的な観点から評価されているのである。

そして「効があるかも知れぬ」という塗り薬の製法や「美顔術」の効能が紹介され、さらには「先天的に色の黒い人は化粧法に依つて色を白く見せなくてはならぬ」と、仏蘭西で行われているという化粧法が詳述される(大森柳二「顔の色を白く美しくする法」『女学世界』1909[明治 42]・9・1)。大森は、「生理衛生上の美人」の「黒い」〈皮膚〉の提案に抵抗を示す読者の意向に応える形で、先の間答の回答者と同じ「医師」でありながら「色の白い」〈皮膚〉を肯定しており、そこで語られる内容には大きな違いがある。ただし、大森が紹介する化粧品は、いずれも日本にはまだ輸入されていない外国の製品であり、読者の手の届くものではなかったはずだ。しかし、衛生的枠組みのなかでは「有害／無害」という観点からでしか語られてこなかった薬剤、美顔術、化粧品等の「商品」としての別の可能性、つまり〈皮膚〉を白くする「効があるかも知れぬ」という新たな可能性が、ここでは示されている。

『女学世界』の誌上にみられた変化について、ここでもう少し記しておこう。この時期の誌面の特徴としては、これまで主に男性の医師が担ってきた美容や化粧法の伝授が、女性によって行われるようになったことが挙げられる。たとえば「趣味のお廣い」と評される、ある女性の化粧法についてインタビュー形式で尋ねるもの(峰百合子「東京婦人の化粧」『女学世界』1910[明治 43]・10・4、日向欽子談「美人は如何に化粧するか」

1910[明治 43]・10・5など)、あるいは「婦人記者」(婦人記者「美顔術の主人と語る」『女学世界』1911[明治 44]・11・16など)、「婦人化粧師」(莊司直子「漸く流行を來せる美爪術」『女学世界』1910[明治 43]・10・6)、「理容館主」(遠藤波津「新年の化粧と晴着の着方」『女学世界』1912[大正元]・12・1)という肩書を持った女性たちによって書かれた記事である。これらの記事でも、やはり〈皮膚〉を清潔に保つことが重要であると明記されるのだが、それを語るのは医学的知識を備えた「男性の医師」である必然性がもうここにはないようである。これを〈皮膚〉を健康に美しく保つための衛生的知識が、十分に浸透した結果としてみなすこともできるが、おそらくそれだけではないのだろう。たとえば、婦人記者は次のようにいう。「美人——美人には女として誰でもなりたい、これは人情ですもの。それで化粧をする、何の悪いことがございませう？」

(安藤妍子「根底ある美顔術」『女学世界』1910[明治 43] ・10・11) 。

先の問答においてみられた、啓蒙する側の立場である回答者とそれに異議を唱える読者との討議ともいえるべきやりとりや、その後の上記のような『女学世界』の誌面の変化からは、〈美〉の価値が肥大化し、女性たちの間に〈美〉に対する自意識のようなものが立ち上がってくる様がみてとれよう。さらに、ここでいう〈美〉とは、獲得するのが困難なものとして捉えられると同時に、それでも商品を通じて獲得できると信じられているような何かである。もちろん化粧品等の美容産業側は、先の医学・衛生学の見方のようにこのような願望を否定・無視するはずもなく、むしろ、この種の類の欲望を喚起させながら、商品の交換価値を膨張させていくのである²¹。

2-4. 化粧と美容の近代性

2-4-1. 美顔術という商品

「美顔術 (Facial Culture)」も、同時期における〈美〉に関連する商品である。従来の化粧法とは異なる新たな技術としてアメリカより輸入され、『美顔術独習』(柴田一郎、1908、今古堂) によれば、1906(明治 39) 年 7 月に東京市京橋の理容館主であった遠藤波津子が美顔術をはじめて紹介したという(柴田 1908:15) 。先に、『女学世界』の誌面では1910年以降、女性の執筆者によって美容や化粧法が伝授されるようになったことを指摘したが、それはこの遠藤波津子のように、「美容家」または「美顔術師(家)」と呼ばれる職業が登場したこととも深く関わっている。

美顔術は、身体の内側を想像し、内部の器官に働きかけることによって容姿を美しい身体を作り変えていくという衛生学・医学的な知を応用したものである。たとえば美顔術において行われる美顔マッサージとは、医学の領域では手や器具によって外側からの刺激を与え、顔面内部の神経や筋肉、血液を調整する目的を持つ生理・解剖学的法則に基づくものであり、治療の一環として位置づけられていた。しかし、美容家たちは、この治療目的のマッサージを「衰弱せる顔面及び凋落せる容色を復活せしむべき最良の方法」として位置づけ直すのである(藤波 1916 : 160) 。

東京・神田で「東京美容院」を営む北原十三男は、自著『自ら施し得る美顔法』(1910、紫明社) のなかで、美顔術²² を以下のように説明する。

美顔術は化粧の様に一時的なものではなく顔色の黒い人を美顔術で白くすればそれは永久に白くなるのです。……美顔術は容貌に欠点のある人を美しくするだけでなく、天質^{うまれつき}の美人でも、その美をいよいよ發揮せしめ、またはその美を維持するのです。

²¹ これより後の『女学世界』の展開については第 3 章を参照。第 3 章で詳述する読者相談欄「美容問答」(初回のみ「最新化粧問答」[1918 18・3]後に「美容問答」と改題 [1918・18・8～1921・21・8] 全22回) では、まさに「効があるかも知れぬ」という新たな可能性を備えた化粧品を積極的に取り上げた記事となっている。

²² 北原はほかに隆鼻術、美髪術、爪磨術、美歯術を広義の美顔術のなかに含めている(北原 1910)。

(北原 1910 : 4 - 6)

また『欧米最新美容法』(玉木広治編、1908、東京美容院) では、美貌術 (Facial Culture) を欧米の最新の科学技術を利用した美容法として「斬新なる科学的技術と精巧なる器械力と衛生に適する化粧品」を応用したものだと定めている。以下のようにその効果を主張する。

凡て容貌の美は各自の天性に依りますものとして致し方のないように思われますが決してそうとは限りません。天性よりもよく見える様にとよく注意し施術を致しますれば誰でも必ず美人となるだけの資格があるのであります。美しい生まれつきの方もそうでない方も美しく見せて自然を失わずに健全なる方法と巧妙なる技術とて以てその生まれつきの顔容をよく見せるように致すことが出来るものであります。(玉木 1908 : 17)

以上のように美顔術とは、一時的な効果に過ぎない化粧法とは異なり、生理学的法則に基づく科学的技術を利用することにより、誰でも必ず美しく変わることができるという新たな効果をもたらす技術であると主張されている。

他方で、医師の箱崎孝平は、この十年の間に流行している美顔術の営業者が「医学的の知識を欠いて」いることを批判する(箱崎 1914 : 2 - 3)。しかしながら、以下のような先の遠藤波津子による美顔術の実例報告をみると、むしろ医師が治療方法として用いるところとは全く別の効果を主張しており、美容術師たちは医師らと棲み分けることを強調しているかのようである²³。

芝濱松町のある商家のお娘御は、お輿入れの当日までに只った六日しか無いといふ日取になりまして、突然顔へ湿疹のやうなものが出来ましたので、狼狽して最寄の薬舗から塗布剤を購求め、それを塗りました所が忽ち火膨れのやうになり、驚いてお医師さまにいらしたところが、塗布剤をおよこしになりましたさうで、それをおつけになりましたら、成程火脹れはお治りでしたが、あとへ真つ黒な色素斑が出来ましてどうすることも出来ないから治るものなら試つて見て呉れまいかと親御さんがお連れになりましたが、朝夕二度ずつ施術致しましたら、お輿入れの前日までにすっかりお治りで大層お喜びでございました。(柴田 1908: 25-26)

さらに前出の『欧米最新美容法』では、交際上において、「美貌」を備えていることにより厚いもてなしを受けることができるため、「婦人が容姿を美しくすることは生活に伴う必要の条件」であると指摘する(玉木 1908 : 2 , 17)。美顔術によって獲得される「美貌」とは、社会生活や社交を有利に営むことを可能にする価値のあるものとして位置づけられるのである。

以上のように、自らの容貌の変更可能性と、かつ他者関係を良好にするという効果が美

²³ この広告における実例報告は、商品そのものだけでなく、それを使う消費者の自己像を主役に据えた「参加型の逸話」(吉見 1994) を含むものだが、このような手法は第3章で取り上げる化粧品広告においても多用されている。

顔術の新しい魅力として提示された。美顔術は、衛生学の知を利用した一つの商品となっており、それが身体を清潔・健康に保つための作法のみを要請した、先の『衛生美身術』や医師による美容法と大きく異なるところである。

2-4-2. <皮膚>から<肌>へ

ここにきて内田(1994)が論じたように、衛生学の視点のなかで捉えられた<皮膚>は、<肌>として言説の厚みを増し、「化粧品」や「美顔術」という商品を中心に転回し始めていく。内田が合焦した資生堂の化粧水「オイデルミン」も、その象徴的な商品であった。そもそも資生堂は、創業当初は西洋薬局であったが、1913(大正2)年には化粧品事業へと一本化しており(資生堂 1972)、それは、まさしく上記のような価値の転換に対する「企業」としての嗅覚のするどさを示すものであるのかもしれない。さらにその商品が「化粧水」という生身の<肌>(素肌、当時の言葉では「生地」)に直接働きかけるものであったという点も重要である。後の第3章で詳述するが、『女学世界』に掲載された化粧品広告を商品の種類別にカウントすると²⁴、「白粉」に次いで「化粧水」が多くなっていた。「白粉」による「白さ」だけではなく、生の<肌>が自然化され、それそのものの「白さ」の価値と商品による変更可能性が浮上している。それは前項で述べた「美顔術」の効果とも重なるであろう。

他方で、生の<肌>の分節化は、表面に塗られる「白粉」にも派生したと捉えることができる。後の第3章でも触れるように、やはり1910年前後からそれまで主流であった練り白粉に加えて、粉白粉、化粧水やクリームに白粉を混ぜたもの、あるいは元来の<肌>の色味に近いものが登場し始めるのである。

一見すると「色の白さ」をめぐる価値自体には、明治期以前より大きな変化がないようにも思われるのだが、しかし、その「白さ」とは、確実に生身の<肌>に向けて志向されている。以上は、<肌>そのものだけでなく、同時に化粧の近代化をも明確に示しているが、それは衛生学における<皮膚>へのまなざしを経由したことによる決定的な効果であったことは、いうまでもない。

²⁴ 資生堂以外の化粧品会社の広告を含む。毛髪料は除く。

第3章 化粧品広告からみる『女学世界』の変容

3-1. はじめに

本章では、主に「女学生」年代の女性向けに出版された雑誌『女学世界』¹を具体的な素材とし、同誌の創刊から終刊まで(1901[明治34]年～1925[大正14]年)の化粧品広告の変容について検証する。広告のなかで、〈女性美〉なるものがいかなる言葉によって語られているのかを着目し、さらに明治後期以降にみられた広告の変容が『女学世界』というメディアに与えた影響関係についても考察したい。

『女学世界』が創刊されたのは、女子中等教育が制度化された時代であった。識字層の増大と活字メディアに対する関心の高まりを受けて、明治期における婦人雑誌ジャーナリズムの転換期となった時期である。こうしたなかで『女学世界』も、国家的要請としての女子教育の推進を創刊の目的に掲げた。

婦人雑誌研究において『女学世界』は、男尊女卑の生活秩序を積極的に肯定する啓蒙的記事が盛り込まれた「良妻賢母主義のジャーナリズム」として批判されてきた(岡 1981)。ただ、その一方で読者の意向を取り込み娯楽性に富んだ「商業的婦人雑誌」の代表例として位置づけられてもいる(三鬼 1989)。このように相反する評価がなされているのは、明治後期から大正期にかけて婦人雑誌の読者層が拡大するなかで『女学世界』のメディア的特性が変容していったからだと考えられる。だが、婦人雑誌研究では、『女学世界』がどのようにして啓蒙媒体から商業雑誌へと移行を遂げたのかについては、これまで意外なほど顧みられることがなかった。本章で示していくように『女学世界』のメディア的特質の変容においては、同誌に掲載された広告が果たした役割が決して小さくはないのである。

明治・大正期の女性の〈美〉を対象に据えた広告研究としては、化粧品広告から美的な身体観の歴史的変化を捉えた谷本奈穂(2008)や、大正期における『女学世界』の化粧品広告を分析した川村邦光(1993；1994)の議論がある。谷本によれば、届き得ない他者性を表象する「あこがれ」や「科学・医療・テクノロジー」に媒介される「身体美」というものが、化粧品広告のなかで多くみられた身体表象の要素であるという(谷本 2008)。川村は、『女学世界』の記事では老いと労働を否定する「色白の容貌」が、〈ブルジョワ的身体〉として具体化されており(川村 1994)、また大正期の化粧品広告に掲載された商品が「オトメ」イメージを構築するためのモノとして位置づけられると指摘する(川村 1993)。この〈ブルジョワ的身体〉とは、先の谷本の「身体美」の「あこがれ」というカテゴリーに近接していよう。

ただし、広告にみられるこうした傾向は、化粧品に限られるわけではなかった。以下で示していくように、実は、化粧品以外の商品広告のなかでも見出されるものなのである。つまり、同じような広告を提示しているにも関わらず、なぜ他の商品ではなく、(現在のように)「化粧品」が〈女性美〉を構成する商品として優越しているのかということを考

¹ 以下『女学世界』と表記する。なお、誌面の引用元は本文中に(執筆者「記事タイトル」発行西暦[和暦]年・巻・号)で示してある。

えてみなければならないであろう。

ゆえに本章では、化粧品広告とともにそれに類似する商品広告を取り上げ、固有の社会的文脈における商品間の配置関係を明らかにし、化粧品というモノと「女性美なるもの」との関係について考察する。また先に述べたように化粧品広告と記事内容の連動、そしてこれらが『女学世界』というメディアそのものへ影響を与えた過程を記述することも本章の課題である。

3-1-1. 『女学世界』の概観と誌面構成

最初に、『女学世界』の概要についてごく簡潔に触れておきたい。『女学世界』とは、1901(明治34)年1月から1925(大正14)年6月まで博文館より発行された女性向けの月刊誌である(全350号)。創刊号の「發刊の辭」では、良妻賢母思想に基づく女子教育振興の意図が記されており、誌面には識者による女子教育論や高等普通女学校等の入学案内から学校生活まで多彩な情報が掲載されている。こうした記事内容は、1899(明治32)年に公布された「高等女学校令」によって新たに生まれたいわゆる「女学生」の増加を受けてのことだと考えられる。ただし、既婚女性を対象にした記事も散見されるため、十代半ばから出産前くらいまでの年代の女性、つまり良妻賢母たることを求められた世代を読者層としていたことが推測される。雑誌を購入できるという経済状況に鑑みれば、中以上の階層に限定されるだろう。

『女学世界』の発行部数は、1901(明治34)年の創刊号では2万2千部、翌年の第2巻16号では2万8千部、1910年前後では約5万部に増加している(嵯峨 2009)。1923(大正12)年の関東大震災直後には、1万8千部を発行したとされるが、その間の発行部数は不明である。一時は博文館の雑誌のなかでも首位を占めるほどの多くの部数を発行していた『女学世界』であるものの(坪谷 1937)、明治後期をピークに徐々に部数が減少する傾向にあったことがうかがえる。

約25年の間発刊された『女学世界』は、同時期に出版された女性向けの雑誌のなかでも比較的長寿の雑誌であるため、ここで『女学世界』の誌面構成のおおよそその変化についても記しておきたい。創刊当初は、識者による論説文や古典文学、伝記、読み物のほかに衣食住に関する実用記事、読者による投稿欄等の記事が続き、啓蒙的な色彩が濃いことが特徴となる。1908(明治41)年以降になると、論説文の代わりに実用記事や読者の投書、有名・無名人の体験談や告白手記が掲載され始め啓蒙色がやや薄れている。そして1917(大正6)年より文壇作家による連載長編小説が中心となる文芸雑誌として一新された。職業婦人向けの記事も増えたことから読者層の広がりを見せるものの、1923(大正12)年頃から読者層を女学生に限定させた誌面作りが目指されたのであろう。だが結局のところ、こうした編集方針の変更は迷走に終わり、1925(大正14)年の25巻6号を以て終刊となった。以上のように『女学世界』は時流に応じた変化をみせているのだが、本章ではとりわけ良妻賢母教育の推進を掲げて創刊された同誌がその特質をどのように変化させていくのかについて、化粧品広告に着目しながら論じていくことにする。

3-2. 『女学世界』の広告の概要

本節では、『女学世界』に掲載された広告の種類や数的動向を確認した上で化粧品広告とそれに類似する商品広告も取り上げる。

3-2-1. 『女学世界』広告の数的動向

創刊当初の巻頭頁には、博文館広告部による「廣告の廣告」が掲載されている。そこでは、博文館が発行する雑誌広告は内外を通じて数十万の人の注意を惹くことができ、「一朝一部」に過ぎない新聞よりも商品販売において偉大な広告効果があると謳われている(1901[明治34]・1・3)。また掲載料がきわめて「低廉」であることも、その利益のひとつであった(「博文館雑誌廣告の利益」1906[明治39]・6・1)²。『女学世界』の広告掲載料は、博文館から出版された八大雑誌のうち、料金設定が最も高い『太陽』、そして『實業世界太平洋』、『文藝倶楽部』・『少年世界』に次ぐ設定となっており、あとに『中學世界』、『公民之友』、『圖書世界』が続く(「博文館雑誌廣告料」1904[明治37]・4・1)。掲載料は、五号活字二十四字詰めで特等から三等までに分かれ、たとえば一等の価格は一行で四十四銭、半頁(三十二行)で十四円八銭、一頁(六十四行)が三十三円となっている。発行部数の多い『女学世界』は、広告依頼主にとって格好の宣伝媒体であり、一方で作り手側も広告料を低く設定し多くの依頼を受けることで広告収入を増やし、そして「薄利多売」という博文館の企業理念に則る形でさらなる読者獲得を目指した(坪谷1937)。

『女学世界』に掲載された広告総数と上位5種の広告の数的変遷をまとめたものが表3-1である。各年の第3号(その年の三番目に発行されたもの)の広告数を数えた³。全巻の広告総計は、書籍(386点)が一番多く、次いで売薬(234点)、化粧品(212点)、雑誌(196点)、各種学校の生徒募集(75点)の順となる。書籍・売薬・化粧品は、明治・大正期の広告市場における三大広告主であったのだが(内川1976)、『女学世界』でもやはりこれらの広告が上位3種を占めている。

各年の広告総数は1908(明治41)年から飛躍的に伸び、上位5種のうち売薬・化粧品・雑誌は明治末期において量的なピークを迎えた。とくに化粧品の広告は、同時期の化粧品産業の興隆と重なる形で1906(明治39)年から増え始めたことが確認される(水尾2003)。大正期半ば以降、つまり終刊に近づくにつれて広告数が減少していることから、広告数の増減は前述のような『女学世界』の発行部数と連動しているものと考えられる。5番目に広告総数が多いのは、女学校や裁縫学校、医学校、通信教育等の各種学校の生徒募集広告

² 本章で引用した記事は、すべて『女学世界』のものであるため、引用元の表記では雑誌名を省略する。

³ 標本として第3号を選択したのは、第1号は御正月特集で第2号が増刊号である場合があったことから、より標準的だと思われたためである。またひとつの広告につき一種類の商品広告として数え、種類の異なる複数の商品が掲載されている場合は最初に掲載されている商品のみを数えた。また1号～12号は『女学世界 明治期復刻版』(2005)、13号～16号及び19号は日本女子大学図書館所蔵の原本、17号、18号及び20号～25号は国立国会図書館所蔵のマイクロ資料を参照した。

であり、それ以下の6～10番目は自宅療法(48点)、呉服店(45点)、飲食品(41点)、習い事(32点)、病院(24点)となっている。

表3-1. 『女学世界』(全巻各3号)掲載広告総数および上位5種の変遷

巻数	発行西暦 (元号)	広告総数	書籍	売薬	化粧品	雑誌	各種学校 生徒募集
1	1901(明治34)	29	16(55.2%)	0(0.0%)	0(0.0%)	5(17.2%)	2(6.9%)
2	1902(明治35)	55	34(61.8%)	6(10.9%)	1(1.8%)	2(3.6%)	4(7.3%)
3	1903(明治36)	48	30(62.5%)	3(6.3%)	1(2.1%)	4(8.3%)	3(6.3%)
4	1904(明治37)	30	18(60.0%)	1(3.3%)	1(3.3%)	2(6.7%)	1(3.3%)
5	1905(明治38)	38	21(55.3%)	4(10.5%)	1(2.6%)	4(10.5%)	2(5.3%)
6	1906(明治39)	64	21(32.8%)	8(12.5%)	4(6.3%)	8(12.5%)	5(7.8%)
7	1907(明治40)	68	13(19.1%)	11(16.2%)	10(14.7%)	4(5.9%)	2(2.9%)
8	1908(明治41)	129	28(21.7%)	25(19.4%)	18(14.0%)	6(4.7%)	5(3.9%)
9	1909(明治42)	102	26(25.5%)	12(11.8%)	20(19.6%)	9(8.8%)	4(3.9%)
10	1910(明治43)	97	20(20.6%)	17(17.5%)	15(15.5%)	8(8.2%)	5(5.2%)
11	1911(明治44)	110	22(20.0%)	14(12.7%)	17(15.5%)	19(17.3%)	2(1.8%)
12	1912(明治45)	98	21(21.4%)	13(13.3%)	14(14.3%)	16(16.3%)	3(3.1%)
13	1913(大正2)	86	13(15.1%)	19(22.1%)	15(17.4%)	9(10.5%)	2(2.3%)
14	1914(大正3)	71	7(9.9%)	16(22.5%)	10(14.1%)	9(12.7%)	3(4.2%)
15	1915(大正4)	69	10(14.5%)	16(23.2%)	10(14.5%)	11(15.9%)	4(5.8%)
16	1916(大正5)	54	8(14.8%)	7(13.0%)	10(18.5%)	9(16.7%)	3(5.6%)
17	1917(大正6)	59	10(16.9%)	12(20.3%)	9(15.3%)	9(15.3%)	6(10.2%)
18	1918(大正7)	54	6(11.1%)	14(25.9%)	9(16.7%)	5(9.3%)	6(11.1%)
19	1919(大正8)	53	8(15.1%)	10(18.9%)	9(17.0%)	5(9.4%)	3(5.7%)
20	1920(大正9)	55	10(18.2%)	8(14.5%)	10(18.2%)	8(14.5%)	0(0.0%)
21	1921(大正10)	48	8(16.7%)	6(12.5%)	6(12.5%)	11(22.9%)	0(0.0%)
22	1922(大正11)	49	13(26.5%)	4(8.2%)	9(18.4%)	7(14.3%)	2(4.1%)
23	1923(大正12)	42	10(23.8%)	6(14.3%)	6(14.3%)	11(26.2%)	3(7.1%)
24	1924(大正13)	21	4(19.0%)	2(9.5%)	4(19.0%)	6(28.6%)	2(9.5%)
25	1925(大正14)	27	9(33.3%)	0(0.0%)	3(11.1%)	9(33.3%)	3(11.1%)
全巻広告総計		1556	386(24.9%)	234(15.1%)	212(13.7%)	196(12.7%)	75(4.8%)

広告欄の掲載位置は大別すると三箇所に分かれている。まずは表紙の裏や巻頭近くに掲載されたもので、これらは目次や口絵と並置される。次に記事と記事の間の中央に位置するもの(二手に分かれる場合もある)、そして巻末・裏表紙となる。ただしこうした区分けは、徐々に薄れ、独立した広告頁だけでなく記事の一部にもしくはその間に掲載されることが増えてくる。広告効果が高いと考えられる表紙裏の広告では、化粧品17点(レートシリーズ・平尾三平商店13点、美顔水・桃谷順天館4点)、呉服店6点(三井・三越呉服店)、書籍・雑誌各1点ずつ(博文館)となっており、裏表紙には化粧品14点(クラブシリーズ・中山太陽堂7点、二八水/石嶮・花王5点、レートシリーズ・平尾三平商店2点)、売薬10点(「中將湯」津村順天堂)、楽器1点(西洋音楽器・同文館)の広告が掲載されている(各3号総計)。表紙裏と裏表紙では、化粧品の広告が目立ち、化粧品メーカーが広告掲載に対して積極的な姿勢であったことがうかがえる。

そして美容・装飾関連の広告について多い順にみていくと、化粧品212点、美容に関する売薬91点(後述)、三越呉服店や白木屋呉服店等の呉服店・服飾45点、指輪や時計等の装飾品・アクセサリー18点、隆鼻術・隆鼻器17点、美顔術・美顔術器、すき毛やかもじ等

の結髪道具、自宅療法と同じように申込者に対して赤毛や癬毛を改善する方法について書かれた冊子が郵送されるという美髪法が各10点ずつとなっている（各3号総計）。以下では、とくに広告数の多かった化粧品と美容目的の売薬広告について詳しくみていく。

3-2-2. 化粧品広告と、類似する商品広告

先の表3-1によれば、総数としては3番目に多かった化粧品広告であるが、創刊した1901(明治34)年では全て掲載がなかった(3号以外でも同様)。翌年から1905(明治38)年に至るまでも、花王の化粧水・石鹸の広告1点のみとなっている。1906(明治39)年からは4点になり、後の1909(明治42)年には最多となる20点が掲載されている。前年より広告数が倍増する1907(明治40)年からは、化粧水・石鹸に加えて洗い粉や化粧水、白粉、香油の広告が加わっている。化粧品の種類やアイテムが増えたことと密接しているであろう。

次に、化粧品を商品種類別にカウントした。表3-2は、上位10種を示したものである⁴。白粉や化粧水、クリームといった皮膚に関する商品が上位に挙がっている。また広告に頬紅や口紅という商品が初めて登場するのは、1917(大正6)年以降である。広告数はピーク時の1909(明治42)年から減少しているにも関わらず、広告の種類や商品数が増え始め、1920(大正9)年には最も多い11種類が掲載された広告が見受けられた。

表3-2. 化粧品広告(全巻各3号)・種類別上位10種

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	化粧品種類別総数
化粧品種類別	白粉・美顔料	香油	化粧水	石鹸	クリーム	香水	洗粉・洗顔料	毛髪料	歯磨き	ポマード	
全巻総計	106 (23.3%)	82 (18.0%)	68 (14.9%)	47 (10.3%)	36 (7.9%)	33 (7.3%)	21 (4.6%)	9 (2.0%)	7 (1.5%)	6 (1.3%)	455

表3-3. 化粧品広告(全巻各3号)・消費者イメージのモデル上位10

順位	1	2	3	4	4	6	6	7	7	10
モデル	皇族・皇室関係者	紳士	令嬢	御婦人・婦人	貴婦人	淑女	美人・佳人	高貴の方・上つ方	芸妓・俳優	美容業従事者
全巻総計	32	29	25	18	18	13	13	9	9	6

次に、広告における消費者イメージの「モデル」（誰が使っている商品なのか、誰のための商品であるのか）について確認したい。表3-3には、全212点の化粧品広告のコピーや説明文で言及されているモデルの10位までをまとめた。煩瑣になるので時系列を示していないがこれらのモデルに大きな移り変わりがみられたわけではなく、全巻を通して皇族・皇室関係者が多くなっていた。たとえば「御園白粉」の「皇后陛下 東宮妃殿下 御料」（伊東胡蝶園、1907[明治40]・7・3）や「ピノー」化粧品の「大日本帝室御用達」（ウェラワクリー、1914[大正3]・14・3）という文言には、それが最もよく表現されている。化粧品以外でも、たとえば「ヒゲタ醤油」の広告（田中玄蕃、1904[明治37]・

⁴ 各3号の広告に掲載されている商品すべての種類をカウントした。以下の表3-5も同様。

4・3)では「宮内省御用達」というコピーが添えられている。皇族・皇室関係者に使われているということが消費者を惹き付け、さらに商品価値を高める効力があつたのだろう。2位以下には「紳士」「令嬢」「貴婦人」「淑女」「高貴の方・上つ方」等があるが、これらも上流階級をイメージさせるものだ。下記図3-1の「大学白粉」(矢野芳香園、1908[明治41]・8・5)の広告では、「貴婦人」と「令嬢」が消費者モデルとなってお



図3-1. 大学白粉化粧品広告
(1908[明治41]・8・3)



図3-2. たつた白粉化粧品広告
(1908[明治41]・8・5)

り、パッスルスタイルの貴婦人風の女性の写真が掲載されている。

ただし、こうした上流層のイメージのモデルばかりでなく、「芸妓・俳優」(内訳は、美妓2、歌妓2、名妓2、名優2、俳優1、川上貞奴1、中村芝翫1)や、花柳界の女性を連想させるような「美人・佳人」も見受けられる。図3-2の「たつた白粉」の広告(仁壽堂、1908[明治41]・8・3)では、東京の「貴婦人淑女」や大阪の「令嬢」らとともに「五大遊郭の歌妓」にも慕われていると記されている。後の4節で詳述するように、こうした上流階級の女性と花柳界の女性の並置は誌面記事ではみられないもので、広告独自の記述の仕方である。

次に、各化粧品広告で謳われている使用効果(上位15)をまとめると表3-4になる。ここでは、化粧水やクリーム、石鹸、白粉の皮膚に関する種類別広告数257点(各3号総計)から抽出した。「美・美しさ」が頻出しているが、それ以降に挙がるいくつかのものも商品の効果であるとともに「美しさ」の具体的な要素として捉えることが可能であろう。「美・美しさ」の次に多かったのが「白さ」であり、皮膚を白くする・見せるという両方の効果を指す。また「色白く」というように、しばしば4位の「色」と併せて使用される。1916(大正5)年以降には、桃色や薔薇色といった表現が一部にみられるものの、やはりこ

表 3-4. 化粧品広告（全巻各 3 号）・使用効果

順位	1	2	3	4	4	6	7	8	9	10	10	10	13	14	15
使用効果	美・ 美しさ	白・ 白さ	あれ	色	ツヤ	ニキビ	きめ	のり	脂肪・ 分泌物	日焼け	白粉下・ 化粧下	無鉛	シミ・ ソバカス	ひび	のび
全巻総計	94	60	49	39	39	29	28	26	21	16	16	16	15	14	12

の「白」に及ぶほどではない。さらに「白さ」は、「ツヤ」「きめ」（4位、7位）とも組み合わせられることが多く、たとえば「色を白くきめを細かに光艶をだしうつくしくなる……」（「美顔水」桃谷順天館、1907[明治40]・7・3）のようなフレーズがいわば常套句となっている。ここから、化粧品広告における「美しさ」の要素とは、皮膚の「白・ツヤ・きめ」から成り立つことがうかがえよう。

肌の「あれ」と「ひび」（3位、14位）は、抽出した3号の発売時期（多少の幅があるがおおよそ1月～3月）が影響していると考えられる。「のり」や「のび」（8位、15位）はテクスチャーを示し、白粉や化粧水等の白粉の下地の機能と関連している。そして「シミ・ソバカス」（13位）を取り除くことは1912(明治45)年に、「脂肪（皮脂）・分泌物」（9位）を除去することは1917(大正6)年に初めて登場し、化粧品の新たな効果として提示された。なお表にはないが、「シワ」（7点）や「若々しさ」（6点）も、1917(大正6)年以降のとくに「レート」化粧品（平尾賛平商店）の広告にみられたものだ。商品の種類数が増大する1910年代以降になると、広告で謳われる効果も「白・ツヤ・きめ」に加えて多様化し始める。それまで練り白粉が主流であった白粉に、粉白粉や水白粉、そして無鉛白粉、薄化粧のための「白色美顔水」（桃谷順天館）やクリームと白粉を混ぜた「レートメリー」（平尾賛平商店）といった商品が加わり、それまで白色ばかりであった色合いに肌色や黄色などが登場している。化粧の技法がより複雑化し、商品の使用効果も多様化するなかで、必然的に広告のなかでも商品に関する情報量が増していくことになる。

以上のような広告の特徴は、実は化粧品に限って見られたわけではない。『女学世界』の広告を一つひとつ確認していくと、化粧品によく似た商品があることに気付く。それは皮膚の色を白くするという「白色剤（液）」や「毛生薬」、「痩せる薬」といった商品である。これらの広告には「薬品」や「薬剤」であることが明記されているものの、たとえば「月やく下し（堕胎剤）」や「肺病（肺結核）」の治療薬とは、明らかに種類が異なるものだ。「白色剤（液）」等は、主として容姿の改良を目的とする薬として位置づけることができ、以下ではこれら美容目的の薬品・薬剤を「美容薬」と呼び、その広告を確認していく。

美容薬を含めた全ての売薬広告に掲載された薬を効能別（上位10種）にみていくと（各3号効能別総数319点）、皮膚の色を白くする白色剤と毛生薬がともに39点(12.2%)、月やく下し・通経剤37点(11.6%)、痩せる薬25点(7.8%)、肺病19点(6.0%)、脇臭17点(5.3%)、縮毛・癖毛15点(4.7%)、らい病11点(3.4%)、ニキビと血の道（精神神経症）の治療薬がともに8点(2.5%)となる。そして売薬効能別総数319点のうち美容薬は141点(44.2%)であり、さらに美容薬を効能別（全8種）に分け、各総数を示したものが表3-5である。このなかで「白色剤」や「ニキビ」治療、「あざ」の除去、色を白くする薬用「石鹼」をまとめ

ると61点(44.5%)となり、美容薬の半数近くが皮膚に対する効能を謳うものとなっている。とくに白色剤は 1914(大正3)年時に最も多い5種類の広告が掲載されており、化粧品広告と同様に皮膚の「白さ」が重視されている傾向がうかがえる。

表3-5. 美容薬広告(全巻各3号)・効能別上位(全)8種

順位	1	1	3	4	5	6	7	7	美容薬 効能別 総数
美容薬 効能	白色剤(液)	毛生薬	痩せる薬	縮毛・ 癖毛	ニキビ	徐毛剤	あざ	白色石鹸	
全巻総計	39 (27.7%)	39(27.7%)	25(17.7%)	16 (11.3%)	8 (5.7%)	6 (4.3%)	4 (2.8%)	4 (2.8%)	141

表3-6. 美容薬広告(全巻各3号)・消費者イメージのモデル上位10

順位	1	2	2	4	5	5	7	7	9	10
モデル	紳士・ 貴紳	淑女	男女	婦人	美人・ 佳人	粋士・ 粋客	欧米婦人	貴婦人	美容業 従事者	高貴の 方々
全巻総計	10	9	9	7	6	6	5	5	3	2

美容薬の広告の消費者イメージのモデルを集計したものが表3-6である。美容薬の広告では、先の化粧品広告のモデルで一番多かった「皇族・皇室関係者」は確認されなかった。だが、たとえば「肉體色白新剤」の広告(p.62、図3-4上段右)には「本剤は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明剤にして如何程色黒き男女にても特別製貳剤を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艷美の容貌となる……」とあるように、フランス・パリの「貴紳淑女」の間で流行しているという(おおむね事実ではないだろうが)。化粧品と同じように美容薬広告でも、「紳士・貴紳」「淑女」「貴婦人」といった「上流階級向け」の商品であることが記述されているという点は共通している。また「粋士・粋客」は、「美人・佳人」とともに花柳界を想像させる消費者モデルであろう(「美人」と芸妓の結びつきについては第1章・第4章を参照)。

そして化粧品・美容薬のいずれにおいても、「皇族」の女性や「令嬢」等に比べ数こそかなり少ないが、1910(明治43)年以降、「美顔術業者」や「髪結い」という美容業従事者が新たな消費者モデルとして登場していることは注目に値する。商品の効果や対処すべき身体的問題が増加するなかで、美容産業に携わりその技術に長けたプロフェッショナルの意見が商品に対する説得的な価値を持つようになったものと考えられる。

以上のことから、化粧品と美容薬の広告では、消費者モデル、重視されている商品の効果・効能がかなり似通っていることが確認された。ただ、実のところ、売薬業でありながら化粧品の製造・販売を行っていた業者もあり、なかには化粧品と美容薬のいずれかに区分し難い広告も一部に見られた⁵。他方、一部の化粧品メーカーも社史を遡ってみると、売薬・製薬業を営んでいたことがわかる。たとえば1872(明治5)年に創業した資生堂は、洋薬を専門に扱う薬局であったが1897(明治30)年に売薬に加えて「オイデルミン」等の

⁵ 例えば「橋本薬榮」の広告には「白色美容外療法」として「アルラ白色飲剤」とともに練白粉「アルラペス」が掲載され(1919[大正8]・19・3)、「鐙木薬局」の「ホワイトテン」という商品には「美顔白色剤」・「高等化粧料」という表記がなされている(1908[明治41]・8・3)。

化粧品を販売し始め、1913(大正2)年に化粧品業に一本化された(資生堂 1972)。平尾賛平商店もまた1878(明治11)年の創業当初は売薬とともに化粧品の製造を行っており(平尾 1929)、桃谷順天館に至っては売薬として発売された「にきびとり美顔水」が後に「化粧用美顔水」として売り出されている(桃谷順天館創業百周年記念事業委員会編 1985)。ただし、化粧品の製造においても薬剤師や化学者が携わっていることに変わりはなく、むしろそれが近代的な製品であることの証左となるのである。たとえば桃谷順天館の広告では顧問や技師として薬学・医学博士の名を連ね「学者」によって「創製」されたというその化学性が宣伝文句となっている(1916[大正5]・16・3)。それはまた美容薬も同様である。商品の発明・製造者として広告のなかに記された医学・薬学者等の専門家は、化粧品では総計43名(重複あり以下同)、美容薬では総計32名となっている⁶。つまり商品の科学技術の先進性が使用効果・効能を裏付けるものとして、化粧品と美容薬の双方において強調されるのである。



図3-3. 口絵・御園白粉化粧品広告 (1907[明治40]・7・16)

6 売薬広告は一つの広告につき複数の商品が掲載されている場合が多いため、化粧品広告（全 212 点）との極端な差がでないように美容薬効能別総計 141 点から抽出している。したがって大まかな傾向として参照されたい。さらに広告では外国名も商品の科学性や権威を示すものとして利用されているが、海外の国名が言及されている化粧品広告（全 212 点）は 36 点でそのうち「佛国」（18 点）が一番多く、美容薬広告（効能別総計 141 点）では 23 点で「欧米」（8 点）が最多となっている。

対して美容薬広告は、図3-4のように他の広告とともに隙間なく配置されており、多くが一頁を占める化粧品広告に比して、掲載料も安価である。また美容薬の広告はスペースいっぱい文字が敷き詰められ、商品のイラストや写真を載せるものもほとんどなく小さな女性のイラストを添えているかもしくは商品名と説明文のみとなっている。コピーやデザインもほとんど変わらないのが特徴で、たとえば白色液「ハンドコロソ溶液」(図3-4下段左より2番目)(オリエンタル薬館)は、1903(明治36)年(3・4)から実に約9年もの間(1912[大正1]・12・7)、多少説明文が異なっているものの、ほぼ同様のデザインが用いられている。化粧品広告がイラストや人物写真に彩られた華やかなイメージであるのに対し、美容薬広告は新聞広告によく見られるような文字中心のどちらかといえば地味な趣を呈している。



図3-4. 美容薬その他売薬広告 (1904[明治37]・4・1)

3-3. 記事にみる化粧品と美容薬

本節では、化粧品と美容薬の広告をめぐる社会的文脈に注目しておきたい。上記のように広告のテキストを見る限りでは化粧品と美容薬の間に明確な違いはなかったが、以下でみていく二つの読者相談欄では、両者に対する評価がはっきりと分かれているのである。

3-3-1. 「衛生顧問」における美容薬批判

「衛生顧問」(1904[明治37]・4・2～1910[明治43]・10・14、全51回)とは、第2章でも取り上げたように風邪や肺病等の予防法や治療法について取り上げられた読者相談欄であり、民間の医師である糸左近が回答を担当している。化粧品や美容薬の効能について尋ねる相談も掲載されており、こうした問題も衛生学・医学的な知による解決が求めら

れたのである。

そして美容薬に対しては、以下のような身体・健康に対する害が指摘されている。

（問）美顔法といふものは果たしてあるものでせうか、……（答）失望して下さるなよ、……〔白色剤に含まれる亜砒酸は〕變質劑で薄弱なる者が服めば蒼白い色が赤みを帯びて強壯になるし、色の黒い健康者が服めば段々蒼白くなつて、望みは達せらるゝ變りに、身體一般に貧血になり、従つて薄弱になります、斯様な次第であるから色白薬は皆身體を貧血にして、色を白くせんとする危険劑と謂はねばなりませぬ。…（「衛生顧問」1904[明治37]・4・16）

さらに、あざが治ると銘打った売薬広告の詐欺まがいの（効果がなければ全額返金すると記載していたものの実際は返金に応じないという）商法を紹介し、「何々博士の證明など」と書いてあっても全くあてにならないので「賣薬の廣告は信じてはなりませぬ」と忠告する（糸左近「衛生顧問」1906[明治39]・6・16）。「衛生顧問」では、新聞・雑誌に掲載された美容薬広告を「山師」による虚偽・誇大広告として位置づけ、こうした広告に騙されないよう読者に注意を促すのである（糸左近「衛生顧問」1904・4・9）。ただし月経不順に効くという日本薬局方の「^{ろくわい ぎもつ び がん}蘆薈药刺巴丸」や「毛生薬」等は使用を勧めているため（糸左近「衛生顧問」1905[明治38]・5・3）、すべての売薬が虚偽であると批判されていたわけではない。「衛生顧問」のなかで、とくに非難されていたのが、先の引用にもある皮膚を白くする効能があるという白色剤であった。というのも、それに含まれる亜砒酸は身体を薄弱にするだけでなく砒石中毒を起こす危険性があったからである（糸左近「衛生顧問」1905[明治38]・5・1）。

回答者は、読者に対してその使用を戒めるために「天真爛漫心高尚なれば容姿自ら優美に見ゆるものなり」（糸左近「衛生顧問」1904[明治37]・4・9）、「生理衛生の道を守って身軀を健康にし、精神を氣高かつ優美にして居れば、内に在るもの自然と外に表れて、自然と品格の備はるものである。これ最上の美貌法である」と繰り返し説くのである（糸左近「衛生顧問」1905[明治38]・5・5）。体内に吸収され中毒を引き起こす恐れのある鉛を含んだ白粉についても、それを厚く塗り立てる化粧法は「醜いばかりで無く、すべて衛生上に」悪いので「薄化粧」こそが「高尚」で衛生的であると主張する（糸左近「衛生顧問」1905[明治38]・5・8）。

さらにこの回答者は、「彼の女郎や藝妓は如何に素人風に作つても一見賣女であることが分り、さうして色が白くても目鼻立ちが善くても卑しく且つ醜く見えます」と、『女学世界』の読者に対して健康な身体と氣高く優美な精神を要請し、読者と「女郎や藝妓」の差異化を試みている（糸左近「衛生顧問」1905[明治38]・4・16）。

第2章でも述べたように、この「衛生顧問」のなかで、焦点が当てられたのが「皮膚」であった。最も美しい「皮膚」とは、近代医学的な健康法を実践することによってつくられる健康な身体に備わるものであり、さらに前述のように「氣高く優美」な「精神」も重要な要素だ。ゆえに先の化粧品や美容薬の広告に頻出していた「色の白さ」は、ここでは全く重視されていない。また白粉や紅という化粧が外側から装飾されるものであるのに対し、「衛生顧問」の回答者が提示する美容法では、身体の内側の「健康」ないし「精神」

が身体の表面に影響を与えると考えられている。これらは身体的なリスクを伴う白色剤や白粉の使用を回避するために編み出された持論である。つまり、「衛生顧問」では、「色を白くしたい」という相談に対して具体的な回答を与えず、衛生学に基づく近代的身体規範と近世の女訓書にも通ずるような道徳的規範を併せ持った教訓が「美容法」として説かれていた。

ただ、この「美容法」は、『女学世界』等に掲載された美容薬の広告の誇大・虚偽性に対する近代的規範に基づく抑圧の試みでもあったのだが、こうした取り組みが首尾よく成し遂げられたとは必ずしもいえない。『女学世界』には依然として白色剤の広告が掲載され続けており、読者からの相談も絶えることがなかった。というのも前頁に引用した回答のなかには、白色剤は身体にとって「危険剤」であるが一方で確かに色を白くするとも書かれているからである。そのために、いかに注意が繰り返されようとも読者はその効果のほうに強い関心を持ち続けたのかもしれない。「衛生顧問」によれば、当時の美容薬には全くの虚偽と、効果はあるが危険が伴うもの、そして多少の効果がみられるものとが混在していたのであるが、しかし読者がそれを広告から判断することは容易ではなかったはずだ。それゆえに読者はいかがわしいが目を引く美容薬の広告に対して、不安と期待という、相反する感情を抱き、「衛生顧問」という場でその是非が繰り返し問われることになったのである。

3-3-2. 「美容問答」における化粧品 の 推 奨

次に、1918(大正7)年から連載が始まった別の読者相談欄「美容問答」(初回のみ「最新化粧問答」[1918 18・3]後に「美容問答」と改題[1918・18・8～1921・21・8]全22回)をみてみたい。「美容問答」では、化粧や衣服に関する相談が中心であり、回答者の小口みち子は、美容産業に携わり、美容研究所主任・婦人美容研究会主任・桃谷研究試験部実験顧問・巴里院新日本式美顔術部主任という多くの肩書を持っている。

「美容問答」でも、白色剤の効能を問う相談が掲載されているが、小口は「内服薬によつて其目的を達し得られる人が皆無だとは申しませんが、……世間にあるいく多の内服薬に對して何れをお奨めしてよいかと云ふことは私の躊躇する處であります」と答えている(小口みち子「美容問答」1920[大正9]・20・2)。先の「衛生顧問」のように激しく非難するわけではないけれど、小口もその使用に対して消極的な立場であることがわかる。

代わりに回答のなかで繰り返し勧められていたのが「化粧品」である。たとえば皮膚の乾燥には「ベルツ液」、シワには「ナイトクリーム」、品質の良い白粉は「シモンクレーム」というように『女学世界』にも広告が掲載されている数多くの化粧品の名が挙がる。〈美〉をめぐる問題に対して先の「衛生顧問」では衛生・医学的な知に基づく回答がなされていたが、「美容問答」では相談に応じた化粧品を紹介することが解決法となっているのである。とりわけ小口が従事する「美容研究所」の化粧品が紹介される頻度は他のメーカーのものに比べて高く、その割合は実に7割近くにも及ぶ(重複分含めて130点中89点)。またこれらの商品に限っては、下記にあるように価格や販売所については広告欄を参照するようという注釈が付されている。

(問)シミ、ソバカス、アザはどうすれば取りさることが出来ますか。(M子外三人)
(答)マッサージクリームでマッサージするのが宜しいが、面倒ですからビョージャクハンと申す化粧液を使って御覧なさい。……定價販賣所等は廣告欄を御覧なさい。(小口みち子「美容問答」1919[大正8]・19・3)

読者の側も「マスターとジャクハンを同時につけましても害はありませんか」(小口みち子「美容問答」1919[大正8]・19・12)と質問を寄せ、具体的な商品に関する情報のやりとりが続くのである。

しかし、小口は、「顔を小さくする法」「乳房を小さくする法」「脊を高くする法」に関しては「現今に於ける美容術の取扱ふべき範囲」のものではないと考えていたようである(小口みち子「美容問答」1921[大正10]・21・3)。女性は、「人の眼を楽しませるための飾り」ではないため、「撫で肩ですらりと」した細腰を望むことは間違っており(小口みち子「美容問答」1919[大正8]・19・2)、また美容術の使命は「其人の自然」や「特長」を尊重することであるからだ(小口みち子「美容問答」1921[大正10]・21・3)。ここで小口が述べているわけではないのだが当時の文脈から判断する限りでは、以上は芸妓のような容姿を指し批判しているのである。そして「健康でありさえすれば」「貴女としての美は充分に発揮されている」(小口みち子「美容問答」1919[大正8]・19・8)と、先の衛生学的な美容法に通ずる意見が示される。だが、先にみたように小口にとって皮膚の色やシミ・ソバカス・シワ等は化粧品によって対処すべきものであり、これらは、もはや個人の「特長」として尊重すべき「自然」の対象ではない。とくに皮膚の白さを高く評価し化粧品の使用を推奨している点は、先の衛生学に基づく美容法の主張と最も異なるところとなる。

しかしながら、「美容問答」のなかで、現代の化粧品でさえ難問であるシミやシワに対する効果が明言されるのは、美容薬広告と同様に明らかに虚偽であり誇大であろう。実際、紹介された商品を使ってみたが効果がなかったという読者の声もある(小口みち子「美容問答」1919[大正8]・19・9)。それに対して小口は、使用方法に問題がないかを確認し、別の新しい商品を勧めるという形で対処している。つまり、効果がないのは化粧品そのものの問題ではなく、ただ「あなた自身の皮膚」には合わなかったからだと主張することによって、当該の化粧品や小口自身に対する批判を回避する意図があるのだろう。明言されたほどの効果はないけれど、しかし美容薬のように身体に害を及ぼすわけではないという化粧品の特性を利用した回答である。それまで先の「衛生顧問」などで美容薬の虚偽や危険性が再三指摘されてきたからこそ、こうした化粧品の特性がより際立ってくるともいえよう。それゆえに化粧品は、美容薬のようにいかがわしいものとして咎められることはなく⁷、新たな使用価値を創造しながらこの後も消費の対象として魅惑的な商品であり続けるのである。

⁷ ただし鉛を含んだ白粉は例外であり大正後期になっても記事のなかで批判されている。

3-4. 広告と記事の間の連続／非連続

以上のような、二つの読者相談欄にみられた美容薬や化粧品の語られ方の違いとは、いかなるところに起因しているのでしょうか。実はこれらの読者相談欄の掲載時期には、約7年もの開きがある。「衛生顧問」は1910(明治43)年(10・14)に連載を終え、「美容問答」が始まるのは1918(大正7)年(18・3)のことである。したがってこの間に生じた価値の落差を明らかにするために本節では広告の形式と広告と記事の内容の違いについて確認しておきたい。

3-4-1. 化粧品の「記事風広告」

上品で華やかなイメージを備えた化粧品広告は、1910年前後から注目すべき変化が見られようになる。2節で指摘したように広告で示される商品の使用効果が多様化すると、新たに配合された成分がいかに作用するのかについて解説されなければならない。そもそもこうしたシリーズ化された商品とは、より多くのものが所有されることを念頭に置いている。そのために商品に関する情報量が増え、カタログ的なデザインの広告が多くなるのである。

こうした変化に連動しながら登場したのが、誌面の記事を真似た形式の化粧品広告である。たとえば図3-5の舞台女優の川上貞奴をモデルに起用した「乳白化粧水レート」の広告(平尾賛平商店、1908[明治41]・8・12)では、川上貞奴の談が紹介されている。誌面のインタビュー記事の体裁をなしつつ、この商品がパリの牛乳浴よりも手軽で優っているという情報が提示されているのだが、商品名以外には発売元や価格の表示もない。一見するとここに書かれているものが、インタビューの内容なのか商品情報であるのかは判然とせず、これまでの広告と明らかに違っているように思われる。

このような例をいくつか挙げてみよう。同じレート化粧品の別の広告(1910[明治43]・10・10)は、従来のように商品のイラストや写真を載せず一面が文章で埋め尽くされており、「美顔術師某氏」による海水浴に行った時の注意について細かく記されている。そして海水で荒れた皮膚や日焼けによく効くのが「乳白化粧水レート」であると結ばれる(「温泉地」バージョンもある[1911・11・10])。クラブ化粧品(中山太陽堂)の広告上で14回に渡って掲載された「クラブ新聞」でも(1912[大正1]・12・4～1913[大正2]・13・7)、先の広告と同様に、あるトピックを取り上げ最終的にはそれに関連する商品が宣伝されるという流れである。そして他にも、和歌や「クラブ川柳」、「クラブ占い」、噂話等が載せられていることから、この「クラブ新聞」が『女学世界』の読者欄を集約させた作りとなっていることがわかる。『女学世界』には、識者や記者による記事だけでなく投書による読者欄が掲載され、和歌や短文の優劣が競われるなど、誌上における読者間のコミュニケーションの場となっていた(川村1993;嵯峨2011)。上記の広告では、こうした誌面の読者欄を真似ながらも、商品情報を含んだ独自の読物欄が展開されているのである。

実際に「私の化粧法」や「美顔ユーマーについての経験物語」という懸賞文を募集し、当選作を掲載する広告もあった(堀越二八堂「ホーカー液」1914[大正3]・14・8、



図3-5. 乳白水レート化粧品広告
(1908[明治41]・8・12)



図3-6. ホーカ液化粧品広告
(1914[大正3]・14・8)

1915[大正4]・15・5；桃谷順天館「美顔白粉」「美顔ユーマー」1916[大正5]・16・3、4、1917[大正6]・17・1、2など。「美顔白粉」の懸賞文の応募数は、3万4011通にも達したという(1916[大正5]・16・3)。この応募数からすると『女学世界』の読者だけではないと推測されるが、雑誌と同じように化粧品広告も投稿先として開かれていたのである。掲載された女学生や主婦等の感想文には美しい色つやを放ち、きめを整え、衛生的で肌を荒らさず、手軽でムラにならない……と広告の文言以上に多様な商品の効果が記されておりその情報量の多さに圧倒させられる程である。商品の感想を綴った文章は、現在でいうところの「口コミ」のような役割を持たせる意図があったのだろう(ただしあまりにも「広告的な語り口」ではある)。と同時に、自分自身で書いた文章が、商品の情報が主であるにせよ、広告上に掲載されるということは読者にとって喜ばしい出来事であったに違いない。

さらに図3-6の「ホーカ液」広告(堀越二八堂、1914[大正3]・14・8)の「女学生日記」は、後に取り上げる誌面の「令嬢の日記」(1908[明治41]・8・1-)という記事のパロディとなっている(ただし、懸賞文ではない)。この日記には次のように書かれてある。女学校に入学した「花子」は、周りから「田舎者」と思われているようで自分の「黒き顔」が恥ずかしくふさがちであった。だが色が白くキメが細かな雪子さんに教えてもらった「ホーカ液」を試してみると皆から美しくなったと褒められ、学問にも身が入るようになった……。この読者の日記を模したストーリーでは、商品の使用効果を述べ

るだけでなく、その商品を使用した人自身の人生までも変えていくと示唆するのである。

以上のような記事に酷似した広告は、先にみた美容薬広告のように文章が中心であるとはいえ、その内容は大きく異なっている。すなわち記事風広告では、商品名やその使用効果が前面に主張されるのではなく、それらが「女学生」や「淑女」たちの私的な語りのなかに組み込まれているのである。吉見(1994)によれば1920年代のアメリカでもみられたという「参加型の逸話」を含むこうした広告は、商品そのものよりもそれを使う消費者の自己像を主役に据える。『女学世界』に掲載された広告の場合、この消費者の自己像を浮かび上がらせる際に援用されたのが、同誌の記事や読者欄・投書欄であったのである。次項では、読書欄・投書欄における〈美〉をめぐる語りに着目してみることしたい。

3-4-2. 令嬢の日記

読書欄・投書欄という情報様式のなかで、とくに注目しておきたいのが読者の日記や手記である。これらは、『女学世界』の誌上において、学校や家庭生活における読者の私的な事柄を互いに綴り合うことで良妻賢母たれという課題に応えるための実用的な方法を共有するという機能を備えていた(仙波 2008)。

こうした模範的な語りが多くを占める一方で、1908(明治 41)年第8巻第3号に掲載された読者の投稿による「令嬢の日記」は、趣がやや異なっている。以下は、「お正月の追想」という副題が付けられた「令嬢の日記」の一部であるが、そこでは〈美〉に対する読者の思いが赤裸々に語られている。

……私はお座敷へ歸ると散らばつて居る新聞を読む、一番面白かつたのは藝者の晴着だつた、定めし私が藝者の晴着を喜んで讀んだと云つたら心有る方はまア品性の下劣な人だ、私貴女のために悲しむワ杯と思はれるかも知れないが愛想がついても仕方がない、全く何だか、面白かつた、奇麗な人が奇麗な着物をきてすいと立つた姿なんかバチラ へ するやうであゝ嚙ぞ美しい事だらうと思ふと藝者も何も有つたものぢやア無い、唯だ美しからう奇麗だらうと思ふ思ひが先に立つて夫れで私は何んだか面白くつて堪らなかつた、私は常に然う思つてゐる……美しい人が粧 ひこらして姿見鏡の前に立つて自分ながらあゝ美しいと感じた時ほど心からの喜びは有るまいと私は思ふ。

顔なんか如何だつて心さへ美しければ好いと云ふのは唯だの眞の氣休めに慰めて呉れる言葉に過ぎない、那麼お慰めを聞くのは有り難かア無いと云つて、美しくもないのに美しいと云はれゝば餘り人を馬鹿にしていると癢に觸る、何んと云つても美人は羨ましい、夫れでなくとも兎角女は美しいことを望むものだ、併し夫れは何も女に限つた譯ぢやアなし男だつて美しいのが嫌いと思ふ事は聞いた事が無いからして、見れば美を好むのは人情だ、だから其麼人だつて美しく粧へば見よくなるから私はいつでも女は出来るだけ奇麗にしたが(ママ)良いと思つてゐる。

と云つた夫れが虚栄だと云れるかも知れないがそんなら若しも着物なんか欲しくは有ませんよと暑さ寒さを凌ぎさへすれば澤山、簪だつてリボンだつて頸掛時計だつて那麼虚蝕は私は望まないねと云はれたら夫れこそ困る、凡べて那麼物以外に女を満足させて呉れるやうな事が出来るか何うだか第一夫れが心配だ、から、尚且着物でも拵

らへて貰つて喜んでる方が始末がよからうと思ふ……彼の方の帯が好いのお襦袢の襟の色が好いの杯云つて夢のやうに日を送らうと思つた、而して質素に送るも一生なら華美に送るも一生だから何も好んで質素にせずとも事だ。

(姉、峰子「令嬢の日記」1908[明治41]・8・3)

この日記が掲載されたのは、本章3節でみた「衛生顧問」が連載していた時期でもある(「美容問答」が掲載される前である)。前述のように『女学世界』の誌面では、衛生的観点に基づく「正しい」美容法が掲載されていた。有害な成分を含むものが多い化粧品や美容薬の使用は咎められ、さらに衛生的知見から「健康」や「心」という身体内部から成るく美しさ>が重視された。だが、この「令嬢の日記」を書く「峰子」は、「顔なんか如何だつて心さへ美しければ好いと云ふのは唯だ眞の氣休めに慰めて呉れる言葉に過ぎない」とそうした考え方を真っ向から否定する(1908[明治41]・8・3)。「顔」よりも「心」の美しさを重視する雑誌側の啓蒙的な物言いに対する、いわば読者の「本音」が吐露されているといえるだろう。

このような思いが生じたのは、新聞に掲載された芸妓の晴着姿をみたことがきっかけである。「峰子」は、人から「品性の下劣な人だ」と思われるかもしれないが「綺麗な人が綺麗な着物をきてすいと立つた姿」を思うと「藝者も何も有つたものぢやア無い」と、芸妓に対する世間の目がどのようなものかを知りながらも、それに魅かれてしまうという。そして、「美しい人が粧ひこらして姿見鏡の前に立つて自分ながらあゝ美しいと感じた時ほど心からの喜びは有るまいと私は思ふ」と美しく装うことはその人自身にとって喜びだと、「美人は羨ましい」、「女は出来るだけ綺麗にしたが良(ママ)い」という率直な欲望が語られるのである。

『女学世界』側は、先の「衛生顧問」のところで引用したように「彼の女郎や藝妓は…色が白くても目鼻立ちが善くても卑しく且つ醜く見えます」と(1905[明治39]・4・

16)、読者に対して健康な身体と気高く優美な精神を要請することで、読者と「女郎や藝妓」を「玄人／素人」という二項対立図式を用いて差異化する試みがなされていた。こうした類の記事は、他にいくらでもでてくる。たとえば、「女子と化粧」という記事では、「藝者」と「貴女として世間に仰がれ社会を清むる者」を区別するために、「貴女は貴女らしく」「品格を高むるために」「控え目に」「あつさりと薄化粧」を施すことを勧めている(武田藍涯「女子と化粧」1905[明治39]・5・5)。または日本女性の化粧は濃艶で気品に欠けるが、西洋婦人は一見化粧をしているとは分らないほど自然に同化しているというように(松本閨薫「美貌を得んと欲する淑女の心得」1906[明治40]・6・9)、西洋的な価値基準を提示しながら、濃艶だが気品のないとされる化粧法を批判するものもある。ここでは日本の化粧法が非難されているわけだが、このなかに芸妓のそれが含まれていることは明らかである。

以上の記事のように、差異がことさら強調されるのは、やはり化粧の方法において「堅氣の阿嬢様と藝者輩と殆んど見分けが」付かず、「如何にも玉石混淆」な状態になってい

るからであろう（武田藍涯「女子と化粧」1905[明治39]・5・5）⁸。「芸妓」のイメージがメディアを通じて流通するなかで、先の令嬢日記でも書かれていたように、その「美しい人」の姿は、芸妓という身分であるにせよ、「堅氣」の女性に強い影響を与えていたようである。こうした読者の思いとは、『女学世界』の誌面の中心を占めていた外見の美しさを否定するような、いわば女学的な語られ方とは、一線を画している。

化粧品の記事風広告は、こうした読者の欲望を積極的に掬いあげた。誌面とは異なり、商品というモノを日常生活上のストーリーの中に取り込み、読者に対して巧みに演出してみせたのである。

3-4-3. 広告／記事における境界の消失

もちろんすべての化粧品広告がこうした様相を呈していたわけではなく、従来の華やかなイメージが保持された広告もある。図3-7は先の「クラブ新聞」を載せたクラブ化粧品の別の広告であり（中山太陽堂「クラブ白粉広告」、1913[大正2]・13・3）、コピーや説明文を加えずイラストと商品名だけで構成されている（広告の上部には「美人」をゴールとする化粧の順序が描かれている）。これは、やはり従来の絵画を利用した芸術的要素の強い広告形式が踏襲されたものであろう。



図3-7. クラブ白粉化粧品広告
(1913[大正2]・13・3)

⁸ このような批判は、化粧に限らず、第5章で論じるように「衣服」においてもみられるものである。



図 3-8. ベーリン（白色剤）美容薬広告
(1920[大正9]・20・6)

ただし、記事風広告は、化粧品広告に限らず自宅療法や通信教育といった他の様々な広告に広がりを見せてもいる。その一つが白色剤の広告（図3-8）（博仁房「パール」広告、1920[大正9]・20・6）である。そこに掲載された「女子大學生の面白い告白談」は、ニキビを悲観し独身主義を鼓吹する女子大学生がその商品によって「純白な顔」を得るとともに独身主義から転向し救済されるというものである。先のホーカー液化化粧品広告（図3-7）の「女学生日記」と同様に、商品を使用することによって、その人の人生が好転していくというストーリーである。

2節でみたように美容薬と化粧品の広告イメージの違いは一見して明らかであったが「パール」の場合はそうではない。デザインが度々変更されその多くは美容薬のなかでは珍しい一頁広告となっている。「パール」の別の広告では、「全身のお化粧」というコピーが使われ「薬」の文字が小さく控え目に表記されていることから（1920[大正9]・20・12）、意図的に化粧品広告を真似て作られたものと考えられる。おそらくそれは1914(大正3)年3月に施行された売薬広告の虚偽・誇大を規制する売薬法の影響であるのだろう。本章2節で確認したように『女学世界』の美容薬の白色剤の広告数は、1914(大正3)年(3号)に最多の5種の白色剤の広告が掲載されているものの、それ以降は減少傾向にあった。先の「衛生顧問」における売薬広告批判が、ここにきてようやく受け入れられ始めたといえるかもしれない。そしてこうした事情が、先の「パール」広告に化粧品広告を真似るといった戦略をとらせたのだろう。

なお、以上のような広告／記事における境界の消失は広告に限って見られたものではなく、記事のなかにも派生していた。たとえば3節で取り上げた「美容問答」は、その典型である。具体的な商品名が散りばめられたこの記事は、現在でいうところの化粧品メーカーとのタイアップ広告（もしくはスティルス・マーケティング）のような体裁だ。回答者の小口みち子は桃谷順天館の研究試験部顧問を兼任していたので「美容問答」のページの間に同メーカーの「美顔水」などの広告が挟み込まれていることもある（1918[大正7]・18・8）。いや、そもそもこの「美容問答」は、「白色美顔水」の広告上に掲載されていた問答（回答者は同じく小口みち子）に由来している（1916[大正5]・16・3）。つまり「美容問答」は、広告のなかの読物欄が誌面の連載記事として発展したものなのである。この「美容問答」は、広告なのか、記事なのか。広告の消費者イメージのモデルとして美容業従事者が挙がっていたことはすでに2節で指摘したが、化粧品メーカーに従事するプロフェッショナルの意見が誌面においても効力を増し始めれば、広告と記事の境界が消失することはある意味では当然のことなのかもしれない。

こうして記事のなかに広告的要素が持ち込まれ、広告と記事が連続性をみせることで、化粧品はよく似た商品である美容薬（またはそれ以外の商品）との差異を際立たせていった。以上が、二つの読者相談欄「衛生顧問」と「美容問答」の間に起こった出来事である。

3-4-4. 広告と記事にみられる矛盾

前項では、記事と広告の形式における連続性を確認してきたが、ここでは広告と記事の間に見られる相違や矛盾について、とくに「芸妓」の社会的位置に着目しながら明示しておきたい。図3-9の「ホーカー液」の広告（1915[大正4]・15・3）は、記事風広告の



図3-9. 「ホーカー液」化粧品の広告（1915[大正5]・15・3）

形式を備えたもので、著名な貴婦人へのインタビューを載せた誌面の連載記事「貴婦人の嗜好（後に社交に改変）」（1906[明治 39]・3・9→）とよく似ている。写真の人物は、元赤坂の人気芸妓の「萬龍」である。某学士に嫁ぎ、芸妓を辞めた後の「貞淑」な「賢婦人」としての生活が語られるなかで、「萬龍の頃から使ひ慣れたホーカー液」を「取付の三越呉服店」から取り寄せて「^{あつさり}淡泊と素化粧」をしていると紹介される。

2節でみたように、芸妓は、広告のなかでモデルとして度々登場していた（表3-3）。だが、先の4節で示した通り、記事では、むしろ批判的に位置づけられた存在であった。高群（1966）によれば、当時の財閥や富豪が芸妓出身の女性を妻として迎えるという、階層移動を伴う結婚の形態、いわば「玉の輿婚」が多く見られたこともこの時期の特徴である。しかし、このような現象を記事では「賣淫婦その者の形を變じて貴婦人となつたもの」が上流社会に跋扈していると非難するのである（二十三階堂「婦人演説會評判記」1903[明治 36]・3・15）（「芸妓」を意味する「美人」批判については、第4章第2節を参照）。

そして良妻賢母を育成する立場にあった識者たちは、「不道德な美人」である「芸妓」と「貞節・淑徳」な「貴婦人・令嬢」なる女性を対立項として位置づけ、恋愛や結婚観、そして外見において両者を差異化するまなざしを徹底させている⁹。とくに芸妓のく美>が対立項に置かれることによって、「外見の美」ではなく先の衛生学的な美容法のように健康な身体や精神という身体の内側から成り立つく美しさが重視されたのである。

ところが、後の5章で論じるように日露戦争後に芸妓の装いを真似た流行現象がみられ、芸妓は一般女性の羨望を集めていた。というのも、彼女たちは巧みな化粧とともに常に新しい装いをみせ、先のホーカー液広告の「萬龍」のように「玉の輿婚」を達成させた（もしくはその可能性を備えた）存在であったからだ。観念として「自由結婚」が解禁され、配偶者の選択時において容姿が優先された同時期において、これらのことは一般女性らの欲望を多いに刺激したに違いない。それゆえに識者による記事とは対照的に、広告のなかでは、芸妓が「皇族」や「貴婦人」、「令嬢」と等しく消費者イメージのモデルとして据えられていたのである（表3-3）¹⁰。先の「ホーカー液」の広告（図3-9）では、芸妓「萬龍」が「玉の輿婚」を成し遂げると、以前の「艶麗桜花の」「色香」は薄らぎ、「花柳界に生育つた女性とは思はれない」ほど「雪に香ふ梅花のやうな氣品さ」が加わったと表現される。このように芸妓という記号の社会的位置は、揺らいでおり、芸妓が識者の描く単純な二項図式のもとには容易に回収できない両義的な存在であったことをよく示すものである¹¹。

⁹ この二項対立図式については、第4章で詳述する。注釈10も参照。

¹⁰ その意味で、広告モデルの「美人」もまた同様である。広告のなかで「美人」が

1908(明治 41)年前後に頻出しているが、それは1章で論じたように同時期に流行した芸妓の「美人絵葉書」や「美人写真」の影響であろう。しかし『女学世界』の記事では、4章で論じるように「醜婦」を良妻賢母思想を内面化した存在として賞賛する一方で、「美人」は芸妓と結び付けられ妻・母としてふさわしくない不道德な存在として位置づけられたのである。

¹¹ 3節で確認したように広告風記事であった「美容問答」においてさえ「芸妓」的容姿に対する評価は低い。ただしここでは現今の美容術では解決できない形態の改良が、既存の論理である識者の二項図式に寄り添うことで、美容術の範囲から捨象されていると捉えることもできる。

以上のように、芸妓の社会的位置をめぐる多様な図式が混在していたことが、誌面の記事と広告にみられた矛盾をもたらしたのであろう。つまり、投書欄の日記における女性たちの「美しい芸妓」を称賛するという率直な欲望を掬いあげ「本音」が露呈された広告と、「良き妻・母」たることを啓蒙する記事との間にみられた矛盾である。これらのことは、『女学世界』の誌面においてそれまで中心を占めていた啓蒙の論理と、〈美〉をめぐる資本の論理がせめぎあいつつも共存していることを示している。この同一の誌面内における主張や論理の相違は（先の「衛生問答」における美容薬批判と美容薬広告の並置も含まれるだろう）、編集上の非整合性を示すものであり、現在の雑誌ではみられないこの時期特有のものだと考えられる。

3-5. おわりに

本章4節では、「記事風広告」が化粧品を中心に現れたこと、そしてそこで示されたストーリーが消費者としての読者を主役に据えた形で展開されていたことを指摘した。北田暁大（[2000]2008）は、広告／記事の境界が消失したタイプの広告を「融解する広告」として位置づけ、ここに近代日本の広告空間の構造的な転換をみている。融解する広告が男性を読者層とする新聞ではなく、1920年代後半の『主婦之友』（1917-2008）等の実用派婦人雑誌に見られたのは、消費に対する過剰な欲望を女性の本質として位置づけられたことにある。つまりそれが融解させたのは、広告と記事の物理的境界だけでなく、モノの世界と〈わたし〉との認識論的境界であった（北田 [2000]2008）。

先に確認したように『女学世界』では、この類の形式の広告が1908（明治41）年にすでに登場しており、1910年代以降定着していった。北田の議論に従うなら、それは女学推進を目的とする総合雑誌的性格を備えた『女学世界』が消費文化と密接に関わり合う媒体へと変貌を遂げつつあったことを意味している。化粧品広告の比重が増加し、記事風広告が出現したことにより、『女学世界』の誌面も、広告性が増し、誌面構成も決して小さくない変化をみせることになったのである。誌面では、読者の美に対する率直な思いが語られ、婦人記者や美容業従事者による「外貌の美」のための化粧法のハウツーなどが掲載され始めた。つまり、それまで啓蒙的な立場の識者によって否定され誌面に不在であった「外貌の美」というものが自律し顕在化していったのである。

ただ、その後の『女学世界』では、文芸作品が中心に取り扱われ（1917（大正6）年～）、先の「美容問答」は1921（大正10）年（21・8）に連載を終えた¹²。1925（大正14）年に廃刊となったように、こうした試みが成功しなかったことも事実である。『女学世界』の翌年に創刊された『婦人画報』（1905-）は、当初女子教育論が中心となる誌面構成であったものの、後に他の実用派婦人雑誌のように美容やファッション・モードを取り上げる方へシフトしていった。大正後期の『女学世界』は、こうした動きに抵抗するかのように、そ

¹² 小口みち子は、雑誌『婦人くらぶ』や『主婦之友』でも美容相談の回答を担当している。『女学世界』では、読者相談欄「躰育・衛生問答」（1921[大正10]・21・2-）が終刊まで続くが、「美容問答」の連載の終了は同誌の編集方針の変更と大きく関わっていると考えられる。

れとは異なる選択をしたのだろう。

ただし、本章で論じたように『女学世界』では、確かに同時期においてく外面の美を否定する論理と、肯定するそれとの奇妙な共存状態を呈するに至っていた（ただし、前者の論理を完全に解除するまでには至らなかったのだが）。それは確かに、啓蒙の論理のなかに取り込まれていたく美が、消費文化における資本として位置づけられていく過程でもあったのである。

第4章 資本としてのく女性美

4-1. はじめに

「美人」という言葉が、「芸妓」という身分・職業の女性と密接に関連していたことを第1章で述べた。浅草凌雲閣で行われた写真の展示会「東京百美人展」や、『文芸倶楽部』に掲げられた「美人写真」の被写体が芸妓に限定されており、それ以外の女性が排除されていたことに現れていた。また「美人写真」とは、自律した形の美しい外貌を可視化させる契機となり、この「美しい顔の可視化」が、「女性」の「外貌」を「美人」と表現するそのやり方に対する憤りとともに、そこに「内心の美」をも加えようとするものと、外面のみの「美人」の標準と偏差を言語化する試みの両方を出現させた（第1章4節）。ここから「外面における美」と「内面における美」の循環運動が始まっている。

本章では、この循環のなかで生起した「美人論」の系譜ともいうべきものに着目する。井上章一(1991)は、明治期においてみられた「美人」を否定的に論じたものを「美人罪惡論」として捉えている。修身の教科書では、たとえば「美人は、往往、気驕り心緩みて、却つて、人間高尚の徳を失ふに至るものなきにあらず……之れに反して、醜女には、従順・謙虚・勤勉等、種種の才徳生じ易き傾あり」（加藤弘之・中島徳蔵著、1906、『中等教科・明治女大学』）と記述されているのである。井上は、他の媒体にも散見されるこうした「美人罪惡論」が出現したのは、身分制解体後の配偶者選択において「容姿」がその条件となったとき、既存の秩序が脅かされたために「美人」が断罪されることになったからだと解釈する（井上 1991）。

一方、渡部周子(2007)は、近代国家形成期の教育的言説に着目するなかで、良妻賢母役割と連動する、少女期において特有の規範が存在していたことを明らかにした。その規範とは、性的な「純潔」規範、愛情に富む「愛情」規範、そして「美しさ」を求める「美的規範」である（渡部 2007）。「美的規範」に関しては、明治期の女子教育において「美育」を通して女性が美しくあることを要請し、それを男性から愛される上で重要な要素として位置づけられていたことから、先の井上(1991)とは異なる点があると指摘している。ただ、渡部が参照する高等女学校の修身教科書にみられた「美的規範」とは、「礼儀」を重んじ「心」を正しくするための「容儀」を中心に据えるものであり、2章で取り上げた『都風俗化粧伝』（佐山＝高橋 [1813] 1982）のように、「化粧」あるいは「徳容」に包摂される語られ方である¹。衛生的な配慮が求められる点は、やはり『女学世界』の「衛生顧

¹ とくに渡部が引用する井上哲次郎の『訂正女子修身教科書 1 巻』（1906[明治39]）の「古人も、婦容とて、容儀を整ふるは、人の親愛を得る道なるのみならず、人に対する礼儀にして、又己れの心を正しうする所以なり。之をただ虚飾の爲めにする事と思ふは、誤解なり。されば支那の曹大家も、婦人四行の一として、婦容を教へ、又我が朝の春日局も、『女は毎日衣服を整へ、上を搔き撫づべし。又髪結ひ化粧するには、夜明けぬうちになるべし。寝顔は、すさまじきものなれば、朝寝して、人に見られんことは、如何にも恥かしきことなり』云へり……」は、『都風俗化粧伝』の「巻の中」の頭書部分の記述によく似ている（佐山＝高橋 [1813] 1982:154）。また本章でも取り上げる女性雑誌『女学世界』のなかにも、以下のように似た記述を確認できる。「女は夫に寝貌を見せず、朝は疾く起

問」などでみられた衛生学的観点から語られる美容法（第2・3章）とも共通している。また「虚飾」や「驕奢」に走ることが咎められ、女性に求められてきた「徳」というものから決して切り離されていないという点からも、この「美的規範」は、良妻賢母思想の啓蒙という枠組みに位置づけ得る。

つまり、たとえ女子教育の文脈のなかで、美しくあることが重要だとする主張がなされていたとしても、それが必ずしも女性に対して積極的に「美人」であることの要請につながるわけではない。以下で述べていくように明治期における「美人」という言葉は、現代とは異なる特別な響きを持つものであったのである²。本章では、「美人写真」以降に出現した複数的な「美人」の語られ方について、主として女性向けの雑誌である『女学世界』（1901[明治34]年創刊、博文館）と、ほぼ同時期に創刊された『婦人世界』（1906[明治39]年創刊、実業之日本社）における記述を確認しながら、その変容を辿ることを試みたい。

4-2. 女性雑誌における「美人論」の展開（1）

4-2-1. 『女学世界』の「美人論」

井上（1991）が捉えた「美人罪惡論」と同種のもの、つまり「美人」に対する批判的な語り口が、『女学世界』のなかでも多く見受けられた。たとえば「美人と云ふものは、兎角缺點の多きもの」で（無署名「今日の智識」『女学世界』1903[明治36]・3・12）、「其の容貌に恃む所があるから」「無能」で、「顔」だけでなく「言語」や「態度」において「愛嬌の乏しい物が甚だ」多く、「人の感情を惹く力が甚だ」乏しい、というように（閉月庵主「醜婦安心の礎」『女学世界』1906[明治39]・6・2）。さらに「美人」は「人の目を引き易い」ため、墮落の危険が伴うとも指摘されている（泊子「美人の勢力範囲」『女学世界』1906[明治39]・6・8）。以下の記事でも、「美人」という言葉こそ用いられてはいないものの、「美なる」者に対する厳しい批難が、先の記事と同様になさ

出て、髪形を繕ひ、衣服を整へ、而て後、夫をまみゆべしといえる教へあり。……朝は第一番に起出て、水を汲み、火を焚き付けておきて、手早く口嗽ぎ、貌手足を洗ひて、身を清浄し、紅白粉は施さずとも、髪の乱れを正し、僂服たりとも、着様を直して、自墮落にせず、帯を正敷結び、いかなる場合にも、行儀を崩さざるを以て、女第一の嗜みと為す、……」（水原翠香「姿かがみ」『女学世界』1901[明治34]・1・1）。ただし『都風俗化粧伝』のなかで、本書に書かれた化粧や「身の動靜^{とりまわし}」の通りに行えば「都会の地の婦人」のような「美人」になれるという記述や、花魁道中を描いた挿絵などは、『女学世界』の記事のなかでは消されてしまっている。ここで求められているものとは、自分を美しく見せるための「おしゃれ」ではないのはもちろんのこと、「徳容」に、新しい女子教育の要素が加わっているといえる。

² また明治期の「く美人」と新聞を中心とするメディアとの関わりについて論じているものに、佐伯順子の『明治く美人論』（2012、NHK出版）がある。ただ佐伯は「く美人」を「女学生」などの一般女性の美を指すものとして、芸者に代表される女性美を『美人』として使い分け、明治期においては「美人」からく美人への移行がみられるという。しかしながら、以下で示していくように、本論は、いずれの「美人」もく女性美のなかに包摂されていくという立場にある。

れている。

世に器量自慢の女ばかり厄介なものこそなけれ。……美なるは、鏡の前に自ら鼻をうごめかし、逢ふ人毎に我をほめざるはなきに、益々増長し、あはれ美しくも生れたるもの哉、われ一たび笑はゞ城を傾けくるに足らむ。氏なくして玉の輿に乗るを得むと、慢心一たびきざしては、學問に精出さず、藝能を勉強せず、たしなみ、しつけ、女の心得べきものの一切がつさい心にとめず、氣髓氣まゝに人となり、日夕化粧のみ忙しく、出でゝ人に見らるゝを喜び、花見の、芝居見物のと、常に出あるき、……

（大町桂月「家庭時言」『女学世界』1902〔明治35〕・2・3）

先にも引用した閉月庵王の記事では、「人間世界」のうちで「不可思議なる」ものとして「美人が好き配偶を得ない事」を挙げ、その理由を以下のように説明する。

世に所謂完全なる美人と稱する者がある。彼女は多くの賞讃者から圍繞せられ、多くの批評者から讃美せられて居る、而かも彼女の女は斯くの如き美なるに拘らず何人よりも、結婚を申込まれた事はなく、又何人よりも嫉妬されたる事はない、多くの男子は彼女の女を見て即座いに其の美貌を認識せり、而かも敢て彼女を娶らんと欲する者は一人もない。是れ甚だ不思議な事ではないか。然しよく――研究して見ると彼女の女は唯皮一重である皮膚の下に潜んで居る靈光がない、活力がない。機警の働きのない、茲に於てか容貌に變化がない、活動がない、故に男子は一見して其美に僕たるゝも、之を熟視するに至つて、呆然として失望し、再三視するに至つて遂に倦厭の情を催ふし來るのである。

（閉月庵主「醜婦安心の礎」『女学世界』1906〔明治39〕・6・2）

ここでは、皮膚の下に潜む「内面」の「靈光」や「活力」がない「皮一重」のみの「美人」批判されている。ただ、注目すべきは、「美人」という存在を靈光や活力などの内面を備えていない者と捉えるその見方である。それは、単に「美人」の内面に対する批判ではないのである。

さらに、もし美貌に惹かれて結婚相手を選択すれば、それは家庭の不和を招くことになると、家庭という場では「賢にして、徳高き行ひの清い醜婦」は「美人」に優るとも指摘されている（泊子「美人の勢力範囲」『女学世界』1906〔明治39〕・6・8）。上記のように「美人」が批判的に論じられていたのに対して、称賛されたのが「醜婦」である。先の閉月の記事でも、「醜婦」は、愛情深く智恵があり、家事に長じて多能、多産で健康、愛嬌に富み、貞節であるということが、「男子の希望する所」である「醜婦の八徳」として挙げられている（閉月庵主「醜婦安心の礎」『女学世界』1906〔明治39〕・6・2）。つまり「醜婦」は、愛嬌があり、心が美しく、結婚相手としてふさわしい女徳や家政能力を備えた者として位置づけられるのである。これらの記事では、「醜婦」が「美人」の対語となっており、「美人」を批難する代わりに「醜婦」を賞賛するという形となっている。

では、この奇妙な対置における「美人」という言葉が指し示すものとはなにか。もちろん、字義通りの意味合いではないことは明らかだ。「美人」の対抗軸に「醜婦」を置きつつ、ここで問題にされているのは、「外面」ではなく、主として「内面」である。さらに

いえば「美人」と「醜婦」を分けるのは、容貌や見た目ではなく、良妻賢母としての規範が内面化されているかどうかによる。つまり、ここでいわれていることとは「美人／醜婦」という「外面」と、「非徳／徳」という「内面」との直接的な対応関係では、ないのである。

ただし、『女学世界』には、配偶者選択の基準において「美人」の優位性をはっきりと指摘している記事もある。たとえば、縁談では「醜なるものは、容易に賣れ」ず（大町桂月「婦女雑観」『女学世界』1903[明治36]・3・6）、「多少別嬪などゝもて囃される者は、高等女学校時代に片付く者が多」いという（元祿女史「現代女學生の半面」『女学世界』1906[明治39]・6・6）。「結婚」は「婦人の運命」を定めるものであるが、その際、「美貌が最大要件」となっており、「女の運命は或る程度迄は容貌の良否に依って左右せらるゝもの」と強調する者もある（福迫龜太郎「前途に光明ある婦人」『女学世界』1908[明治41]・8・7）。さらに「美人」は、「玉の輿に乗つたり」、「美に依つて成功」することが可能で、こうした事象が「美人」特有の「勢力」であるとも指摘されている（泊子「美人の勢力範囲」『女学世界』1906[明治39]・6・8）³。上記の記事からは、配偶者の選択において当人の自由意志が尊重されるなかで、「身分」から「別嬪」や「美人」などの条件が優遇されるようになった状況が確かに示されている。

では、このように結婚市場において「別嬪」や「美人」が優遇されるという指摘があるのにもかかわらず、先の「美人罪惡論」の類で「美人」が批判されるのはなぜなのだろうか。実は、『女学世界』におけるこの「美人」の批判的な位置づけは、ある種の女性を想定した上で成り立っていた。すなわち、「容色の麗しきのみを以て、美人と稱する」「花街の地」や「翠樓紅閨」における「芸妓」や「娼妓」である（翠廉豎人「婦人の天分と其勢力」『女学世界』1906[明治39]・6・10）。それは、品位という「心の美」を備えていない、「容貌の美」に限られた「野鄙」な「美」であるとも表現される（與謝野鐵幹「現今の女學生」『女学世界』1904[明治37]・4・10）。

1章で述べたように「美人写真」が流通するなかで、「美人」とは主に「芸妓」を指し示す言葉として用いられていたのだが、それがこの『女学世界』という雑誌にも引き継がれているのである。ただ、先の記事や3章（4節）で論じたように『女学世界』の誌面では、「美人」である「芸妓」に対する評価は良いものとはいえない。というのも「芸妓」は、社会、とりわけ「中流以上の風紀」を壊乱させる動力の一因とされていたからである。たとえば待合料理屋で開催される名誉戦士のための祝賀会や凱旋歓迎会、紳士紳商の会合などをきっかけにして、芸妓を「畜妾」にする者が出てくるが、それが離婚の原因となり、私生児の増加につながると批判されている（寺田勇吉「女學生を完全にする方法（下）」『女学世界』1907[明治40]・7・7）。また井上（1991）が指摘したように、「身分」の釣り合いとは異なる配偶者選択が行われ、それまでの社会的秩序を混乱させたところにも、「美人」としての芸妓を批判する要因はあったものと思われる。

ただし、良妻賢母思想を掲げた『女学世界』にとって「芸妓」は、望ましい内面を備えていないものの、先の翠廉豎人や與謝野鐵幹の記事にあったようにそれでも確かに「容色

³ 他の「勢力」として、学校の教員も生徒に対して訓練・教授上有利だとして「美婦」を高給で雇い入れたという例が挙げられている（泊子「美人の勢力範囲」『女学世界』1906[明治39]6・8）。

の麗しき」「美人」であった。しかし、そう認められるからこそ、逆に「美人」そのものを否定し、批判せざるを得ないのである。

すなわち、『女学世界』の「美人罪惡論」における「美人」とは、外見や容貌の美しい人を指すのではなく、まさに「芸妓」そのものを指していた。後の5章では、複製された「芸妓のイメージ」が百貨店などの広告を通じて流通したために、「玄人女性」と「素人女性」の外見上の差異が消失したことにより、『女学世界』の読者である「素人女性」の装いの規制を強化する記事が多くみられるようになった。その規制を強化する記事と、この「美人罪惡論」が頻出する時期とが重なっているのである。こうした点からも、『女学世界』における「美人罪惡論」の「美人」が誰を指しているのかということが示唆されよう。このような不道德な「美人」=芸妓に対する批判的なまなざしによって、「醜婦」を賞讃するという論が展開されたのである⁴。

一方で先に示した記事のなかには、「美人の勢力」を指摘し、配偶者に対して「美貌」が求められたとも書かれていたように、「美人」であることが重視された場があったこともまた確かなのだろう。ただし、芸妓のように内面とは関連しない（とされる）「美のあり方」とは、良妻賢母たる女性に求められた規範と真っ向から対立するために、『女学世界』の誌面では否定されてしまうのである。というより、否定するほかない。

それゆえに「醜婦」を褒め称え、「容色の美」に加えて女徳や豊富な学識、秀逸な技芸を求め、外面だけではない内面からなる〈美しさ〉を備えた者が「眞の美人」（傍点引用者）であるというように、わざわざそういう言い方をしなければならなくなるのである（翠廉豎人「婦人の天分と其勢力」『女学世界』1906〔明治39〕・6・10）。それはく内面の美を賞賛し、自律した形における〈外面の美〉というものを否定した上で成り立つ〈美〉の語られ方である。逆にそうせざるを得ないほど、やはりこのとき、「美人」とは「芸妓」を指し示す言葉であったということがわかる。

4-2-2. 表情という内面性

『女学世界』の「美人罪惡論」には、く内面の美をより具体的な形で論じる「表情論」が組み込まれることになる。1912（明治45）年のある記事では、「表情」という言葉が

⁴ 「恋愛」に関する記事においても、「内面」を重視する同様の論理が用いられていた。身分の釣合や親の取り決めに依らない「自由結婚」は、婚前に両者が相愛し「心を知り合ひ、そして父母の認諾を受けて結婚する」という段階を経るとされたので（福迫龜太郎「結婚に就ての考慮」『女学世界』1907〔明治40〕・7・11）、その要件である「恋」や「愛」「自由恋愛」に対する関心も同時に高まりつつあったのである。そして家庭を平和にするのが夫婦間の愛情であると説かれ（小式部「愛の生活」『女学世界』1907〔明治40〕・7・5）、互いの内面を重視する「精神的戀愛」が賛美されている（登坂北嶺「戀愛の兩面觀」『女学世界』1906〔明治39〕・6・4）。したがって「肉體的美」によって惹かれ合う「肉體的戀愛」は恋愛の真意ではなく、装飾を尽くす必要があるのは客の目をひき「色を賣る」「藝娼妓」に限られることになる（登坂北嶺「戀愛の兩面觀」『女学世界』1906〔明治39〕・6・4）。精神と肉体が分節化し、精神による「愛」と肉体による「色」を対置することによって素人と玄人の差異が明確に提示されているのである。そしてここでも芸娼妓という存在を否定した上で尊ばれたのが、それ以外の女性の「内面」であった。

「昔は無かったもので近年になってから盛んに行われる新言葉の中の」一つだと述べている（齊藤羽雪「女の表情と表情術 附 能面に現れたる女の表情」『女学世界』1912[明治45]・12・2）。もともと「日本婦人」は、「能楽式の沈着な有美な態度が上品」とされ、「喜怒哀樂の情を外に表はさぬ」ことを尊ぶ習慣が維持されていたのだが、欧米の文化と比較されるときに、それは劣等な文化として位置づけられるのである（齊藤羽雪「女の表情と表情術 附 能面に現れたる女の表情」『女学世界』1912[明治45]・12・2）。とくに「写真や絵画に就いて見てもただ人物が妙に取り澄ましているばかりで、少しも内部の精神状態、即ち魂や情の現はれたものはない」というように（尾關敷夫「表情を基礎とする美容法」1908[明治41]・8・3）、写真などで切り取られた日本の女性の「外面」には、「内部の精神状態」を読み取ることができないと批判されるのである。

人の心は直接眼に見えぬけれど間接に之を見ることが出来る、それは顔面の表情によって見るのである。最も眼や鼻や口の大体の形は天性だからどうともならぬが、しかしある程度までは筋肉の働かせ方一つで、美しくも醜くもなるのである。……人間の顔面にある筋肉は非常に表情的に発達して居つて殊に文明人ほどそれが自在である。だから常に美相を保たんとするには先ずその情緒を現はすところの精神を美しくせねばならぬ。この心さへ清く爽かであれば顔は自ずから優しく円満に見えるけれど、若し内心に不平が絶えなかつたり悪いことを考へていたりすると、其の色は必ず外貌に露はれて来る。（尾關敷夫「表情を基礎とする美容法」『女学世界』1908[明治41]・8・3）

相手の目には直接みえない「心」を間接的に伝えるためには、美しい「精神」と「筋肉の働かせ方」をうまく連動させる必要があり、またそれが「文明人」的な振る舞いとされた（尾關敷夫「表情を基礎とする美容法」『女学世界』1908[明治41]・8・3）。本論の第2章・3章で取り上げた衛生的な美容法を説いた医師の糸左近も、感情や心と深く連関する顔面の筋肉（「表情筋」）の働きについて以下のように詳しく説明している。

愉快に感ずれば、第一に環口筋（口の周囲に在る筋肉）を収縮させ、眼を少し開くし、悲しいと思へば鼻翼は下がり、鼻孔を半ば閉ち、皺眉筋（眉と眉との間に在る筋肉）を収縮させるし、腹が立てば大いに眼を開き、大いに皺眉筋を縮めるものなる…その他口を軽く閉ち、眼を軽く見つめる形をすれば満足の表情、この一層強きは自信の表情、尚一層緊張すれば高慢の表情、口を開き頬を下げ遠方を見るが如きは驚きの表情 口を軽く閉ちて、口角を下げ眼を見つめる形をすれば、人を軽蔑してるのである。（糸左近「生理衛生上から観たる標準の娘」『女学世界』1908[明治41]・8・8）

一方、この表情論では、「内部の精神作用に基づく一種の美的修養」として、「表情」による「外面」の変更可能性が示唆される。「表情」は、「西洋」の「衛生」や「体育」のように、人体を根本から美化する新式の方法として位置づけられ、「顔料を塗り付けるばかりの俄化粧」と区別されている（尾關敷夫「表情を基礎とする美容法」『女学世界』1908[明治41]・8・1）。そして「精神の持ちやうと習慣とそれに表情法」によって、「何人も美人となり得る」のであり（尾關敷夫「表情を基礎とする美容法」『女学世界』

1908[明治41]・8・1)、「醜貌を美化」することも可能だという(真葛居士:「美貌の新しき解釈」1907[明治40]・7・15)。

つまり、この表情論における「美貌」とは、輪郭や顔の眼や鼻、口という身体的形態ではなく(真葛居士「美貌の新しき解釈」『女学世界』1907[明治40]・7・15)、「内面」と連動する豊かな「表情」を身につけることにある。「外面」には、「表情」によって表出される「内面」がすぐ裏側に張り付いており、やはりこの「表情論」でも、「外面」というものを「内面」から完全に自律したものとして捉えてはいない。ここにおける「表情」とは、「外面」であると同時に「内面」に属している。そして、やはり「芸妓=美人」を前提にした上で、このような「表情」を有する者こそが「眞の美人」であるという論理に接続されるのである。

このような「内面」と密着する「外面」という位置づけは、1章で取り上げたように「外貌の美」のみを切り取ることを批判し、「外貌」の奥に潜む「内心の美」が重要だとする立場とよく似ている。いずれも女子教育論であり、こうした語り口は、読者に蒙を啓く試みの一つの典型なのだろう。とりわけ『女学世界』という雑誌メディアにおいてみられた振る舞いは、以下でみていくような他の雑誌メディアとは異なる「女学的作法」として位置づけ得る。ただし、このような女学的作法を『女学世界』の読者が素直に受け入れたわけではないということは、すでに2章・3章でみてきた通りである。

4-3. 女性雑誌における「美人論」の展開(2)

4-3-1. 『婦人世界』における「美人論」

本節では、上記の『女学世界』の「美人論」と比較するために、ほぼ同時期に創刊された『婦人世界』の誌面を検討する。『婦人世界』でも、「美人」が一つの重要なトピックとして掲げられているのだが、そこでは『女学世界』とはまた異なる語られ方がなされていた。

『婦人世界』の記事を検討する前に、『婦人世界』の概要について簡潔に説明しておく⁵。『婦人世界』は、1906[明治39]年に実業之日本社より創刊され、1933[昭和8]年に休刊となっている。同時期には、『婦人界』(1902[明治35]年)、『婦人画報』(1905[明治36]年)、そして『婦人世界』というように、雑誌名に「婦人」を掲げた雑誌の創刊が相次ぎ、石田あゆ(2004)は、近代女性文化としての「婦人雑誌」の登場をこの時期にみている(石田 2004:54)。先の『女学世界』は、タイトルに「女学」と冠しているとはいえ、「女学生」年代を中心とする女学生、未婚女性、既婚女性を読者層に据えており、『婦人世界』もそれとそう大きくは変わらないように思える。ただやはりこの「婦人」という言葉に込められているものは、階層、年齢、学歴を超えた包括的な「女性」であり(石田 2004:54)、その意味では『女学世界』の読者層よりも、より広く設定されて

⁵ 日本女子大学図書館所蔵のマイクロ資料(臨川書店、1994)を参照した。第5章の分析でも同様。

いたとみることができる⁶。出版史においては、買い切り制ではなく、委託販売制をはじめて導入したことで部数を伸ばしたと記録されており、最初に20万部を達成した雑誌として知られている（橋本 1964）。

創刊号の発刊の辞には、「激烈なる世界の競争場裡に上れる帝国の進軍に鑑みて、其家庭、国家、社会に対する責任を自覚し、男子と協戮して先づ家庭の改良を期図として、併せて国家社会の福利を増進する」と宣言される（傍点引用元、『婦人世界』は何が為に生まれたる乎』『婦人世界』1906[明治39]・1・1）。「家庭の改良」が求められている点において、そのベースにあるものは「良妻賢母思想」だといえるが、日露戦争直後に創刊されたこともあり、そこには「国家社会の福利」が結びつけられており、石田（2004）が指摘するようにナショナリズムの気運の高まりを確認できる。誌面は、女子教育家による理想の婦人像、家庭生活の向上のための実用記事、文芸欄が中心となっている。そして「暖かい情と美はしい感じ」を欠くという「学校教育」を補うために力を尽くし（高信峽水「婦人と雑誌」『婦人世界』1906[明治39]・1・1）、「新しい趣味と智識」を提供することが宣言される（高信峽水「婦人と雑誌」『婦人世界』1906[明治39]・1・1）。女子教育家による記事が多くみられる点は『女学世界』と共通しているが、『婦人世界』の語り口は、『女学世界』の女学的作法との相違がある。

こうした違いは、もちろん「美人論」の語られ方にも見出される。たとえば『婦人世界』の1912（明治45）年・第7巻第1号では、「現代の美人は誰か」という特集が掲載されている。このような特集が組まれることそのものも、両誌の違いであろう。女性教育家であり跡見学園の創設者である跡見花蹊によって執筆された「私の見た四美人」という記事では、「ただ縹緖がよい」というだけでなく「心ばえがよく」、いつも「楽しさうに見え」「優しく親切さうに見える」人が「眞の美人」であると位置づけている（跡見花蹊「私の見た四美人」『婦人世界』1912[明治45]・7・1）。『女学世界』の「美人罪惡論」とは異なり、『婦人世界』では、「美人」の外見とともに内面をも褒め称えている。

さらに跡見は具体的な「美人」として、閑院宮妃殿下、九條公爵夫人景子様、安田善次郎氏の令嬢で安田善三郎氏夫人の照子様、萬里小路伯令嬢の酒井伯爵令嗣忠克氏夫人喜美子様の名を挙げ、この4人は「縹緖を鼻にかけて、ツンと」しているわけでも「ハイカラ」過ぎるのでもなく「優しい女らしい」ところがあると絶賛する（跡見花蹊「現代の美人は誰か」『婦人世界』1912[明治45]7・1）。また同特集に記事を寄せる高橋義雄は、跡見が「美人」のひとりとして挙げていた閑院宮妃殿下を外国人から高く評価されている女性として、他にも「神神しい中に柔和なお優しさが」とあるという東伏見宮妃殿下や華族の徳川慶喜公の「お姫さん」を紹介している（高橋義雄「氣高くて愛嬌ある人」『婦人世界』1912[明治45]7・1）。高橋も、先の跡見と同様に「ただ顔立ちが揃つて、姿がよいといふばかり」ではなく、「何処か氣高く神神しい感じを人に與へる」人のことを、やはり「眞の美人」だと述べている（高橋義雄「氣高くて愛嬌ある人」『婦人世界』1912[明治45]7・1）。「下流社会」や「田舎」にも「随分美しい、部分的に整つた人」とい

⁶ 永嶺（1987）によれば、1919（大正8）年と1921（大正10）年に行われた女工を対象にした購読雑誌の調査では、いずれも『婦人世界』が一位を獲得している（永嶺 1987:173-176）。

いうのだが、先のような「眞の美人」は、「上流の人」によくみられるという。

同特集の他の記事でも、金港堂主人夫人の原麗子、田中不二麻呂氏未亡人の富田鐵之助氏夫人のぬひ子、先の高橋も挙げていた東伏見宮妃殿下（棚橋絢子「柔和な品のある人」『婦人世界』1912[明治45]7・1）、岩下清周氏の令嬢、牛込の小笠原伯爵夫人、高橋義雄氏の令嬢（柴田常吉「隠れたる美人」『婦人世界』1912[明治45]7・1）など数多くの名が挙げられている。さらにここで注目すべきは、具体的に名指されていた閑院宮妃殿下などの「美人」を含む8名の女性たちの写真が、「現代の美人」と題して一つの枠のなかに収められ掲載されていることである（図5-1）。「上流の人」が「美人」の中に



図5-1. 「現代の美人」

（「現代の美人は誰か」『婦人世界』1912[明治45]7・1：93）

組み込まれていることも、『女学世界』の「美人罪惡論」との大きな違いであろう。ただし、その際、顔形や容貌という「外面」のことだけを指しているのではなく、「上品さ」や「優しさ」などの内面の美しさが加味され、それを「眞の美人」と表現しているあたりは、先の『女学世界』と同様であろう。やはり『婦人世界』でも、「美人」が誰のことを指しているかが暗に示されている。

ただし、『婦人世界』の場合には、多様な語られ方がなされている。同特集のなかには、三越写真部の柴田常吉による記事のように、とりわけ「美人」の「外面」について論じる記事が見受けられる。この記事では、「美人」の「内面」には触れられておらず、終始「外面」のみがフォーカスされるのである。そして柴田は、「美人」として、「何人も承認する野津弘子様や、有名な美人藝妓春本の萬龍などより、もつと美しい、もつと優しい姿」とあるという向島に住む上流の、名も知らない令嬢を挙げている（柴田常吉「隠れた

る美人」『婦人世界』1912[明治45]・7・1)。「この方は、あまり雑誌などでも拝見しませんが、まづまづ美人中の美人と申すべき方」であるという(傍点引用者)。つまり、このような言い方がなされるということは、上流の「美人」の多くの写真が雑誌に掲載されていたということになる。もっとも、先の引用文にある「野津弘子」とは、1907(明治40)年にアメリカの新聞社からの依頼を受けて時事新報社が行った「素人女性」の写真のなかから一等の「美人」を決める催しで一等をとった女性である⁷。雑誌を中心とするメディアでは、すでに「上流の令嬢」を序列化する際に、「美人であること」が一つの評価基準として成立していたことがうかがえる。第1章でみた芸妓の「美人写真」のように、令嬢たちが写真として切り取られたときの評価基準は、「内面」に対するまなざしが捨象されているのである。

同様に、小説家の小杉天外による記事では、「美人／不美人」を「遺伝」あるいは「體質」によって捉えており、「美人」とは「身體の瘦せた、色の蒼白い」女のことであると説及される(「小杉天外「美人論」『婦人世界』1912[明治45]・7・1)。また「温和しい女」を「容貌以外に美人と認めます」と書かれてもいるのだが、「西洋婦人」のように「筋肉の發達した血色の優れた女をあまり美しいとは思えず、「こんな婦人を愛する気は」起こらないとあるように、小杉が美人の「外面」に比重を置いていることは明らかである(「小杉天外「美人論」『婦人世界』1912[明治45]・7・1)。

1919(大正9)年の『婦人世界』(第15巻4号)では、「如何にして眞正の婦人美を發揮すべきか」という特集が組まれた。この特集は、「巴里婦人の化粧ぶり」(マリイルウキズ)、「形の美より心の美」(宮田修)、「體格の上から見た男性美と女性美」(長井潜)、「皮膚を美しくするには」(岡村龍彦)、「小説家の見た婦人美」(小杉天外)、「氣品の高い英國美人」(栗原玉葉)、「各地美人の印象」(伊藤銀月)、「寫真を美しく撮るには」(柴田當吉)⁸、「現代美女一百人」(長谷川時雨)、「世界美人番付」(無署名)などと、多彩な内容の26本もの記事から成る大特集となっており、この特集記事が本号の誌面のおおよそ半分を占めている。

同特集の長谷川時雨による「現代美女一百人——色香とりどりの四季の花束」(『婦人世界』1919[大正9]・15・4)では、タイトルにもある通り、百人もの具体的な「美人」の名が書き連ねてあり、先の「現代の美人とは誰か」という特集に通ずる⁹。ただし、この「現代美女一百人」には、皇族の「九條武子」、「大谷^{かずこ}籌子」、実業家大倉八郎氏令嗣

⁷ 野津弘子は、一等となったことにより、女学校を退学させられるもその後すぐに結婚が決まったという(井上 1992:52)。記事に記された姓は、結婚後のものである。

⁸ 「寫真を美しく撮るには」という記事(後述)がこの「如何にして眞正の婦人美を發揮すべきか」という特集のなかに掲載されているという点にも、「美人」と「写真」の強い結び付きを見出すことができよう。

⁹ 長谷川は多くの「美人伝」を書いている。1911(明治44)年には上古より近世までを対象にした『日本美人伝』(聚精堂)を出版しており、また1913(大正2)年8月より『読売新聞』に連載した「明治美人傳」、1914(大正3)1月から1917(大正6)年末までの『婦人画報』における連載「続明治美人傳」を合わせて、『美人傳』(1918[大正7]、東京社)として1冊にまとめている。続いて1918(大正7)～1922(大正11)年まで『婦人画報』で「続明治美人傳」を連載しており、それに「九條武子」の項を加えて、1936(昭和11)年に『近代美人傳』として出版されている(和泉 1986:8-9)。

の夫人「大倉久美子」、大橋新太郎の妻「大橋すま子」、女流文壇の先駆者「曙女史」らとともに、明治初年に心中した芸妓の「叶屋歌吉」、赤坂・春本の元芸妓「萬龍」などの名が挙げられている。長谷川のこの記事は、女性による女性の「美人評」であるが、それは外見の描写だけでなく、どちらかというところそれぞれの女性の「生き様」に重きが置かれる。さらに、ここにおいては上流の婦人も芸妓もいっしょくたに扱われているという点が、先の特集記事や、あるいは前節で取り上げた『女学世界』における「美人罪惡論」と大きく異なるところである。長谷川の「美人評」においては、芸妓や、皇族や華族の貴婦人、そして令嬢も、「外面」だけでなく「内面」のく美しさゝを備えた者として等価なのである。

とはいえ、同特集においても、執筆者の立場は様々である。伊藤銀月による「美人系論」¹⁰が記述された「各地美人の印象」と題する記事の冒頭には、「良家の家庭から重きを置かれる本誌の品位を傷つけ」ないために「花柳界の女性」を取り上げることを避けたとある（伊藤銀月「各地美人の印象」『婦人世界』1919[大正9]・15・4）。「玄人女性」と「素人女性」を区分する試みは、ここでもなお顕在である。ただし、この伊藤の「美人系論」では、「花柳界」の女性ではなく、それ以外の女性が「美人」として位置づけられている。このように「美人」の枠から芸妓を除外しそれを批難する声と、先の長谷川のように芸妓を他の女性と同様に「美人」と位置づけ賞賛する声とが混在していることは注目に値する。

以上で取り上げた二つの『婦人世界』の特集記事では、「美人」が意味するものは錯綜しており、必ずしも統一されていない。ただし、後者の特集記事では、「美人」について論じる際、前者の「現代の美人は誰か」という特集記事にみられたような「眞の美人」というまどろっこしい冠は付されておらず、「美人」の意味合いが変わりつつあることが示されている。加えて、それは前節の『女学世界』のように「外面」よりも「内面」のく美しさゝを重視し、自律した形におけるく外面の美ゝを否定するやり方とも明らかに違うのである。

4-3-2. 誌上の「見合い写真」

本項では、「美人」の意味合いについて考察するために、雑誌の「写真」に着目することにした。『婦人世界』の巻頭の口絵部分には、皇族や華族の家族写真やそれらの女性の優雅で豪華な衣装をまとった肖像写真（図5-2、図5-3）や、一族・家族写真（図5-4）、女学校の学校行事の風景（図5-5）、卒業式の集合写真、「女学生」や「令嬢」の写真などが掲載されている¹¹。このような口絵の写真は、同時期に出版された他の多くの女性向け雑誌のなかでも確認されるものである。口絵写真における上流層の女性や

¹⁰ 「美人系論（系観）」とは、おおよそ「京都に根源を發して、日本海岸を走り、山形、秋田、青森に及ぼし、津輕海峡に到つて断滅すると云ふ」「美人系なるもの」の「筋道」を記したもののことで「明治時代の産物」であるという（伊藤銀月「各地美人の印象」『婦人世界』1919（大正9）・15・4：89）。たとえば青柳有美による『日本美人論』（1913[大正2]、明治出版社）は、この「美人系論」の一つとして位置づけられるであろう。

¹¹ 坂本（2014）によれば、『婦人世界』の口絵部分の「最初」に掲載されている人物は、おおよそ7割を「皇族」が占め、9割程度が「女性」となっている（坂本 2014 :99-100）。

学校行事などの写真は、模範的な女性像、あるいは学校生活の紹介という役割を備えていた。

しかしながら、口絵部分には、ことさら学業が優秀な者として称えられているわけでもない、おそらく雑誌の読者だと推察される女学生や令嬢たちの写真も同時に掲載されている（図5-8）。これらの被写体は、1章で取り上げた「美人写真」からは除外されていたはずの女学生や令嬢などの、いわば全くの「素人」である（先の三越写真部の柴田の記事のなかで言及されていたのも、こうした類のものなのだろう）。そのため、その写真に込められた意味合いを考えてみなくてはならない。

しかし、それはさほど難しいことではなく、『女学世界』や『婦人世界』とほぼ同時期の明治半ば以降に創刊された他の女性向け雑誌をみると、そのねらいは露骨なほど明らかなのである。

たとえば1902（明治35）年3月に東京社より創刊された『婦人界』では、冒頭の口絵部分に「令嬢かゞみ」と題された4人の女性の写真が掲げられている。写真の横には「雑録欄を見よ」との指示があり、その雑録欄には、各女性の年齢や学歴、家庭環境などのプロフィールが記されている（口絵『婦人界』1902[明治35]・1・1）。また1910[明治43]年に創刊された『婦女界』（同文館）でも、同様に「令嬢かゞみ」と題された女性二人の写真が掲載されており（図5-8）、それぞれ「大山全権公使令嬢」、「徳川達孝伯令嬢」と記されている（口絵『婦女界』1910[明治43]・1・1）。さらには、このような写真を中心に編集された雑誌が、1911（明治44）12月に創刊した『淑女かゝみ』（入念社）である。本文の目次の前には「写真目録」が掲げられ、誌面の口絵部分や記事の間に掲載された、図5-6・7のような写真のおおよそ50名の女性の氏名などが一覧できるようになっている。目録の隣の頁では、写真の提供を募っているが、その対象は「未婚の淑女秀閨」に限っており、巻末の投稿規程には「花柳其他卑雑のものは取らず」とある。そして大隈伯曾の言葉を援用しつつ「我女子の存在を示すは父母の義務なり」と、写真の提供を促している。その目的については「発刊の辞」にあたる記事のなかで明確に示されており、すなわち「結婚を欲する男女の爲めに良配を選ぶことや、相手方の身許を取調ぶことを引受け」「幾多の善男善女を、誤れる結婚の機会から」救うためとある（黒岩涙香「女の最大問題と其實際的解決」『淑女かゝみ』1911[明治44]・1・1）。つまり、この写真は、この写真は、誌上の「見合い写真」なのである。このように、同時期における複数の雑誌のなかで横断的にみられるように、誌上を通した見合いは、おそらく人気のある企画であったのだろう¹²。

『婦人世界』でも同様に、口絵部分には「令嬢」たちの写真が掲載され、その写真には氏名や家庭環境、学歴、年齢が添えられている（図5-9）（口絵「名家の令嬢」『婦人世界』1909[明治42]・4・10）。ただし、先の『淑女かゝみ』のように、明確にその目的

¹² 読売新聞上の「ヨミウリアルBUM」と称する連載（1910[明治43]年1月17日～4月17日）でも、「令嬢」たちの見合い写真のが掲げられており（佐伯 2012）、また1912（明治45）年に博文館より創刊された『淑女画報』の増刊号でも、「新粧百令嬢」と題し、「花嫁の候補者」としての「結婚前の名媛一百人を集める、現代稀観の令嬢アルバム」が掲載されているという（佐久間 1995:216）。また佐伯（2012）によれば、読売新聞でも「ヨミウリアルBUM」と称する連載（1910[明治43]年1月17日～4月17日）で「令嬢」たちの見合い写真が掲げられていたという。

公爵令嗣徳川慶久氏夫人實枝子の方



図5-2. 口絵「公爵令嗣徳川慶久氏夫人實枝子の方」

(『婦人世界』1909[明治42]・4・13 頁数表記なし)

吉崎季枝子夫人



図5-3. 口絵「吉崎季枝子夫人」

(『婦人世界』1919[大正8]・8・7、
頁数表記なし)

徳川公爵家の一族



図5-4. 口絵「徳川公爵家の一族」

(『婦人世界』1909[明治42]・4・8、頁数表記なし)

古の稽の刀薙の校女學女実践



図5-5. 口絵「実践女學校の薙刀の稽古」

(『婦人世界』1920[大正9]・15・2、
頁数表記なし)



図5-6. 男爵野村友次郎氏令妹系子（第二女）
学習院女學部出身

（『淑女かゝみ』1911[明治44]・1・1、頁数表記なし）（『淑女かゝみ』1911[明治44]・1・1、
頁数表記なし）



図5-7. 會社員大江松太郎氏令嬢嘉江子
（麻布區）三輪田高等女學校出身



図5-8. 口絵「令嬢かがみ」
（『婦人世界』1909[明治42]・4・10、頁数表記なし）



図5-9. 口絵「名家の令嬢」
（『婦女界』1910[明治43]・1・1、頁数
表記なし）

が示されているわけではないのだが、その意図はもはや疑いようがない。またかなり時代は下るが、『婦人世界』では、1925（大正14）年第20巻第3号より、誌面に「縁組を求むる人々」という連載が始まっている。この記事では写真は掲載されていないものの、女性だけでなく男性も紹介されており、プロフィールには、現住所と本籍地、年齢、職業、学歴、系累（家族構成）、資産、希望（結婚相手の条件）などが詳細に記載される。「御誌の紹介によつて結ばれた私共の結婚」という記事では、「縁組を求むる人々」をきっかけにして結婚へと至った夫婦の手記が書かれており（「御誌の紹介によつて結ばれた私共の結婚」『婦人世界』1926[大正15]・21・1）、同じ号の巻頭の口絵部分に、この夫婦の写真が掲載されている。このように誌面上の見合いは、一定期間継続して行われており、メディアを利用した新しい配偶者選択のあり方だといえるだろう。それは確かに自由に相手を選ぶという「恋愛結婚」とまではいえないものの、それ以前の「強制結婚」とも呼ばれた「見合い結婚」とも明らかに違っている。

写真のキャプションは、氏名や年齢、学歴、家庭環境という見合いの「釣り書き」である。同時に「写真」が掲げられていることから、ここでは、こうした釣り書きとともに各女性の〈外面の美〉が配偶者選択の基準のなかに加えられているのである。令嬢たちの写真は、確かに先の皇族の女性の写真のように優雅で美しいけれど、どこか生々しく感じられるのは、見合い写真の女性たちの表情や姿が写真を撮られることの目的と自分自身に向けられる視線を想像した上でのものであるからかもしれない。見合いのために撮られ、誌面に掲げられた写真は、皇族らの写真のように、その人物の社会的な地位を誇示する「肖像写真」とは大きく違っているのである¹³。この見合い写真に対するまなざしは、少しの釣り書きと〈外面の美〉のみにそそがれているが、女性にとってはそれがそのままその後の人生を左右する資源となる。不特定多数の者へとさらされたこれらの写真はまた、地縁・血縁から切り離された女性たちのイメージが時空を超えて流通するという点において、やはり芸妓の「美人写真」と共通していよう。

そしてこの女性へのまなざしは、前項でみた『婦人世界』における「美人」の新しい論じられ方とも深く関わっている。具体的な「美人」として名指された女性たちのなかには、「芸妓」も一部に含まれてはいたが（なかには「美人」から「芸妓」を排除しようとする者もいたが）、皇族や華族の上流層の女性、そして無名の「令嬢」たちが大半を占めていた。さらに、『女学世界』の美人罪惡論のように、「美人」という言葉によって「玄人／素人」の間を境界づけることにすら、強い関心は寄せられていなかった。つまり、誌面に掲載された無数の見合い写真は、芸妓以外の女性の「美人」を発見させる契機となり、「美人」に対するまなざしの変容をもたらしたのではないだろうか。そもそもこれらの見合い用の写真では、わざわざ「美人」と冠する必要もないほどに、各々の女性の〈美しさ〉がはっきりと知覚され、分節化されている。

一方、前項で少し触れたが、1907（明治40）年には、アメリカの新聞社からの依頼を受けた時事新報社が「素人女性」の写真を対象に一等の「美人」を決める催しが行われた。

¹³ さらに大正末期から昭和初期にみられた、都市の新中間層のアマチュア写真家による「新興写真」とも異なるであろう（飯沢 1982）。飯沢は「新興写真」の特徴として、写真表現方法における「スナップショット」の採用と、作品の「構成」に対する意識の深化を挙げている。

この美人コンテストは、1章で取り上げた芸妓の「東京百美人」展の「素人」版であるといわれてきた。だが、こうしてみると、素人女性の美人コンテストに対するまなざしは、女性向けの雑誌の「女学生」や「令嬢」たちの「見合い写真」のなかに、あるいはその他の口絵写真のイメージを通してすでに準備されていたのである。

4-3-3. カメラ・アイによる自己像

こうしたなかで、写真に写し出される自分のイメージを操作しようとする試みがあったことは当然だろう。『婦人世界』では、創刊年より美しくみえる写真の撮られ方を指南する記事が掲載されている。1906（明治39）年の「婦人と寫眞（其二）」という記事では、「近來新聞や雑誌に貴婦人の肖像を寫眞銅版にして載せることが流行」しているが、そのためにはまず「白金寫眞¹⁴」で修正を施した後に「光澤紙」に焼きつけると「大層良く出来る」と伝えている（石塚月亭「婦人と寫眞（其二）」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・9）。

加えて「見合ひをする前に双方から寫眞を取り交^{かは}せて、一應其人の様子を見て置くといふことを随分世間に行はれるやう」だとも書かれており、そういう場合は「見合ひ寫眞で評判を取る寫眞屋」に「一層よく見える様に寫眞師に特別に頼む人」がみられるという。その際、多様な修正作業が行われている。たとえば「光澤紙」や「鶏卵紙」の伸縮を利用し、長い顔は横紙を用いて「自然とふつくり肥った様」に、「肥り過ぎた顔」は縦に伸びる「豎紙」によって長くみせ、「鼻の低いのを光線の具合で影を黒くして高く見せ」、「痣や黒子^{ほくろ}」、「痘痕^{あぶた}」は、修正の時に消して取り除き、「美しくも涼しくも見える」よう「眼睛の白點^{ひとみはくでん}」を付け、「眉毛」や「生え際」の薄いものも修正によって濃くみせる……というように、様々な工夫によって「御婦人の寫眞を本人より一層美しく見せ」ることができるとある。だが、それゆえに当然のことながら、ある「令嬢の写真は本人よりも數倍美しく出来上がって」おり、実際に会ってみると「寫眞」ほど美しくなかつたというようなことも起こってくる（石塚月亭「婦人と寫眞（其二）」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・9）¹⁵。

別の記事でも、以下のように「写り」をよくするための様々な工夫や、写真に施される様々な修正技術が細かく紹介されている。

あまり厚化粧をなさるより、うっすりとした方が、よく寫ります。髪も、油をあまりつけると白く寫るといつて、結ひたての髪をお嫌ひになる方もありますが、ところどころ光つて白く寫る方が風情があつてよいと思ひます。

¹⁴ 白金で焼きつけたもので、鶏卵紙や光澤紙に比べると、変色の度合いが少ないという特徴がある（石塚月亭「婦人と寫眞（其二）」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・9）。

¹⁵ さらにこの記事では、「近頃は結婚式が濟むと新郎新婦が必ず相携えて寫眞を撮りに行き、其時寫した寫眞を親戚朋友へ配つたり、或いは寫眞版にして世間へ發表したりする事が流行」しており、「結婚は人生の最も公明正大なる儀式ですから、成る可く多くの人に知らせると云ふ事が生涯の幸福を増す」ことにもつながると賞賛されている（石塚月亭「婦人と寫眞（其二）」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・10）。「見合い」や「結婚」という機会が「写真」によって「記念」化される様相が示されている。

お召物と半襟や帯との配合は、濃いものと薄いものといふやうにしますと、よく調和いたします。そして、裾模様でもお召しになつた時の外は、全身よりも七分身ぐらゐの方がよいやうでございます。お召物も、寫真をお撮りになる時は、襟を普通より少し抜き気味になさいませんと、肩のあたりがあまり怒つて見えたり、胸のあたりが肥つて見えたりいたします。肥つておいでの方は、殊にさういふ御注意が必要でございます。肥つた方は、私の方で少し横から撮りますと、背のあたりも幾らか削^{じつ}げて格好よく寫ると思ひましても、お客様の方で、是非正面から撮ってくれなどと仰いますと、實に困ります。寫しよいのは、ふつくりした、ゆるやかなお顔です。

(市川鈴子「美しく撮れる寫眞」『婦人世界』1912[大正1]7・13)

以上は、化粧の方法や衣服の色や着こなし、撮られる角度などに配慮しながら、ふだんの自分自身のイメージと、写真に映し出されるイメージの齟齬を修正する試みである。多くの修正が加えられたこれらの写真は、もはや透明なメディアであるとはいえないであろう。先のエピソードが示すように、こうした修正などによって、あるいは偶然によって「写真写り」のほうが、実際の自分自身に対するイメージよりもはるかに良いものとなることも十分に考えられる。ここでは、すでに鏡に映るものとは異なる自分のイメージを写す技術との格闘が始まっているのだが、それは被写体本人にとって、きわめて魅惑的な経験であつたことだろう。

1919(大正8)年の三越写真部柴田常吉による「寫眞を美しく撮るには」という記事では、「昔」の写真は、「堅くなり切つた、顔にも體にも餘裕のない、不自然極まるもの」であつたが、最近では「素人で寫眞機を持つて居る方も多くなり」、「一般の婦人も寫し方¹⁶が非常に上手になりました」とある。写真機の機能の向上とともに、被写体側も写真に撮られることにも慣れてきた様子うかがえる。ただ、見合い写真では、流行の「ソフトホオカス」のレンズを用いると、ぼんやりとした写りになってしまうため、「目鼻立ちがハッキリ分からなければならない」という見合い写真の目的には適さないという(柴田常吉「寫眞を美しく撮るには」『婦人世界』1919(大正8)・15・4)。この記述からも、やはり見合いといえども、身分の釣り合いばかりではなく、女性の「目鼻立ち」が重視されたことが明確に示されている。

とくに見合い写真では、上記のようなテクニックを駆使して、より良い「写真写り」になるための努力がなされていたということは容易に想像がつく。それこそがまさに結婚という、女性の今後を決定づける重要なきっかけとなる可能性を秘めているからだ。見合い写真に写された女性たちが、妙に生々しいのは、こうした一瞬の切り取りに込められた作為とともに、いかに「見られるか」という想いが滲み出ているからかもしれない。こうした写真は、自分自身を写したものでありながら、自分とは違う、別の何かに変貌を遂げている。

4-3-4. 配偶者選択基準としての〈女性美〉の多様性

女性たちの見合い写真を通してなされた〈外面の美〉の知覚と連動するかのよう、

¹⁶ 前後の文脈から判断すると、この「寫し方」とは、写真の「撮られ方」のことだと思われる。

『婦人世界』の誌面では、より直接的にく外面の美について語られ始めている。その新たな語り方では、女性のく外面の美しさが、異性、つまり男性との関係のなかに、とりわけ結婚という配偶者選択の基準のなかに位置づけられるのである。

1926(昭和1)年の「配偶者選定の科学的標準」と題した記事では、現在の「我が國」では、「資産」の釣り合いが重視されているが、優生学の観点から考え、当事者の資質を重視する「同類選定」と「特異選定法」を勧めている(市川源三「配偶者選定の科学的標準」『婦人世界』1926[昭和1]・21・10)。「同類選定」とは、「似たもの夫婦」と呼ばれるような両者の性質が類似していることを重視する選定方法である。この同類選定法は優生学の観点からも推奨されるが、ただ「劣」と「劣」の結婚の場合は、結婚はともかく「繁殖を差し止め」なければならないともいわれている。そしてもう一つの配偶者選定方法である「特異性選定法」とは、結婚を動機づける顕著な資質をもとに選定する方法であり、とくに「女性の容貌の美」は優生学的にも価値が高いとされている。美醜と婚姻率の程度の関連性を示した米国の統計結果が紹介され、「容貌が八十点以上の女子は7割結婚し、五十点前後は五割」、「四十点以下になれば、終生独身」をつらぬくことになるという¹⁷。(市川源三「配偶者選定の科学的標準」『婦人世界』1926[昭和1]・21・10)。

別の記事では、結婚の目的を「互いに慰め合ひ、励まし合ふ」こと、「子孫」を残すこと、そして「性愛」に親しむためと述べた上で、配偶者の選択法の基準を提示している(無署名「最もよき配偶者を選ぶには」『婦人世界』1926[昭和1]・21・10)。まず「教養」「趣味」「素行」「職業」が第一の目的において重要であり、「健康」「血統」「財産」「系累」が第二の目的、そして第三の「性愛」に関しては、「容姿」「感情」「言語」「動作」「年齢」が挙げられる。とりわけ「容姿」では、「體格は小、顔つきはやさしく、肩幅比較的狭く、腰部は大きく、手足は小さい。皮膚は非常に軟らかで……」という「女らしい女」を多くの男性は求めるとされている。また男性に関しては、「やさ男」でも「粗質」でもないような「所謂男性的の美」をもつ者を選ぶべきであるという(無署名「最もよき配偶者を選ぶには」『婦人世界』1926[昭和1]・21・10)。

医学博士の高田義一郎による「美人は人妻の最大要件か?」という記事では、「美人」について以下のように論じられている。

男子としては結婚に際して美人を求めるのが普通であります。それはあながち慾の深い不都合な心でも無いと見えて、……美を好んで醜を忌むのは人間の通有性でありますし、況して結婚は百年の苦樂を左右する大事な一生の生涯の仕事であつて見れば、美人を配偶者として求めたがることは支那の聖賢を待たないまでも、尤も千萬な次第だと思はれます。(高田義一郎「美人は人妻の最大要件か?」『婦人世界』1927(昭和2)・22・3)

高田は、「百年の苦樂」をともにする結婚相手に最適なのは、まぎれもなく「美人」だといっているのである。ここでは「美人」の「内面」は一切排除されており、極端ともいえるほど

¹⁷ さらに、婚姻率との関連が見出されるのが学校の成績であり、「頭腦の良し」ことも結婚を促進する要素となるとされている(市川源三「配偶者選定の科学的標準」『婦人世界』1926[昭和1]・21・10)。

の語り口ではある。

ただし、一口に「美人」といえども、結婚相手として「絶対的な美人の標準」があるというわけではなく、「結婚すべき美人の理想は、配偶者唯一人丈に美人に」みえる、つまり「万人向きの美人では無く、ある特殊の美人として」「配偶者の愛着を^{ほしいまま}恣にする人の方が、結婚相手の美人としては理想に近い」という。なぜなら「若しそんな人があれば自分以外の他の人々の注意を^そ牽かないので、安心してその愛を独占することが出来る」からだ。つまり、「玉の輿に乗る式の美人で無いといふ事は決して悲しむべき事でも無い」というわけなのである（高田義一朗「美人は人妻の最大要件か？」『婦人世界』1927（昭和2）・22・3）。ここでいわれていることは、男性側の視点を中心としたものである。だが、この「美人」の「外面」に対する見方は、各々の、いわば個人の「好み」に委ねられており、決して画一・固定化されたものではない。

また医学博士の羽太鋭治による「男子を悩殺する婦人美」と題された記事では、一人の女性における流動的なく美しさについて論じている（羽太鋭治「男子を悩殺する婦人美」『婦人世界』1926〔大正15〕・21・1）。「男性が、女性の何う云ふ點に、最も多く惹き付けられるか」というと、それは「女の優しい姿、肉體の美」であるという。とりわけ「肉體の美」に関しては、以下のように言及される。

女が美しさを保つて、男を惹きつけると云ふことは、「性」の要求に根ざしたものであつて、女が女らしく美しくなるのは、性的機關が充分發育を遂げたと云ふ象徴である。故に男が女の肉體美に惹き付けられるのは、極めて當然な事であつて、ショペンハウワールなどの言葉を借りて言へば、「宇宙意思」の働きなのである。

（羽太鋭治「男子を悩殺する婦人美」『婦人世界』1926〔大正15〕・21・1）

1910年代以降、性的知識の啓蒙を目的とする通俗的な性科学が一つのジャンルとして成立したが、この羽太鋭治は、それを牽引した者の一人として位置づけられている（成田1994；赤川1999）。彼にとって女性のく美しさとは、まさに性科学のなかで分節化された「性欲」を誘発するものとして捉えられるのである。ただし、それは「トルバドール」の詩や「ロマンチックな」「戀物語」にも現れているように、「人生の歡喜と藝術の躍動」を展開させるものでもある¹⁸。

先にも述べたように羽太は、女性の「美しい如何なる點が、男の心を捕ふるか」という特徴を明確にすることは困難であるといい、「婦人美」を固定化された何かとしては捉えていない。たとえば「處女的美」は「自然の美」であるが、「年増女的美」は「精練された」「技巧的美」だというように。「皮膚の色や艶やかさ加減や、皮下脂肪の工合で出来る身體の線の如何にも軟らかで滑らかな鹽梅^{あんぽい}」という「自然の艶やかさ美しさ」は「處女」に特有であるが、しかし「年増女的美」の「自然の美が凋落し掛ける以前から、次第に芽ぐまれて」「特別な味ひ」をみせる「蘭熟した美しさ」は、それとともに「動作」や

¹⁸ この通俗的な性欲学（性科学）は、「性欲」という概念を生成したが、それがより人間的で文明的な対他関係のなかに位置づけられるとき、「恋愛」が主題化されるということを拙稿（2016近刊）にて論じた。つまり、性欲学（性科学）でも、「性欲」と「恋愛」を完全に独立したものとしては捉えられてはいないのである。

「對者の心の機微を掴む」技巧によって「精練」された「美」を「發輝」する。そして「處女の美は、美しいとして見るに過ぎないもので、其の中には心に倦怠を」生じさせるが、「年増女」は、「絶へず新しい刺激と衝動を男の脳裡に」与えるという（羽太銳治「男子を悩殺する婦人美」『婦人世界』1926[大正15]・21・1）。ここにおけるく美は、年齢に応じて区分されているとはいえ、それが「内面」と「外面」のいずれに属するのかといえば、明確に分節化されたものとして捉えきれものではない¹⁹。

上記の羽太の記事は、「如何なる女性美が最も異性をひきつけるか」という特集記事のなかに掲載されたものだが、やはり同特集の他の記事では多様な意見が提示されている。たとえば岩田裕吉は、「そばかすの女は」「白粉で塗り」つぶすより「そばかすのまゝをむきだしにして」居るときにはるかに美しくみえ、また偽りなき純情の人の「瞳」に強く惹きつけられるという（傍点引用元、岩田裕吉「美しき純情の瞳の輝き」『婦人世界』1926[大正15]・21・1）。また岡田三朗助は、「顔」「目」「髪」「襟足」「乳房のふくらみ」「脚の線」（着物の着こなしや裾さばきのこと：引用者注）、「白い女の素足」を挙げ（岡田三朗助「異性の感覚に觸れる女」『婦人世界』1926[大正15]・21・1）、あるいは竹久夢二は、「窮屈な」「きっちりとした襟の合わせ方や、帯の締めやう」という「慎み」が「ほんのちょつと忘れられた瞬間の美しさ」であると述べている（竹久夢二「慎みを少し忘れた美しさ」『婦人世界』1926[大正15]・21・1）²⁰。ここで述べられていることは、単なる執筆者各々の「好み」に過ぎない。つまり、このことから異性をひきつける女性のく美しさ」というものが一様ではないことが示されている。第1章第4節では、「美人」の標準と偏差の言語化の試みがみられたことを確認したが、以上で言及された様々なく美しさ」とは、そのような画一的な基準には決して回収されるものではない。

かくして、『婦人世界』では、「内面」のく美」だけでなく、「外面」のく美」というものが無数の視線によって立ち上がるわけだが、それに伴い表現も多様化している。たとえば「發育的に成熟して來た」「丸くふくらみを持って青春の色艶」を帯びる「處女の美」、また「處女」が性的生活を営むようになり「卵巢の内分泌のはたらき」によって

¹⁹ 他方で、通俗的な性科学を牽引した青柳有美は、「色慾（性欲）」と「視覚」に深い結び付きについて以下のように論じている。「人類の文明と智能との進歩せざる原始時代に於て、視覚は今日の如く人に色慾を刺激する有力の官能では無かつたのである。嗅覺とか觸覺とか聴覺とか味覺とかいふものに、寧ろ勢力があつたのだが人類の進歩は、有らゆる方面に亘り視覚の勢力範圍を拡張すると共に人は最も多く視覚を介して色慾を刺激せらるゝやうになつたのである。……人の色慾を直接或は間接に刺激する處に、其美があるのだ。……人智の發達は、想像力の發達である。是に於てか、人智が發達して來ると敢て異性の注意を生殖器に惹くまでにせずとも、たゞ我が肉身に視力を注がせさへすれば、其の異性の人の色慾を刺激することが出来るやうになる。しかして、身體のうちで、最も他人の視覚を早く且つ容易に刺激し得る部分とは云へば、顔面から頸筋、續ては胸の邊にかけてである……」（1913[大正2]、『性慾哲学』、不二出版：23－29）。

²⁰ 竹久はまた「男が女を見るのもこの神経を通して見るのが普通の場合です。女性の美しさを見る男の視野には、つねに一定の角度が、那邊にあるかといふことは、敏感な女性はすぐにお氣づきのことで、詳細な説明はこれまた禮を失することになります」とも書いている（竹久夢二「慎みを少し忘れた美しさ」『婦人世界』1926[大正15]・21・1：77）。先の羽太の直接的な書き方とは大分異なっている。

「豊艶さ」が加わって完成する「肉體美」、さらに快い「肌ざはり」からえられる「觸覺美」、真っ直ぐで「漆黒な美しさ」を持った髪「自然美」、そしてそれを生かした「粉飾美」、「袂を垂れ裾をひき、巾廣の帯をしめて羽織を羽織った」「優雅で、日本独特の美しい服飾美」（小倉右一郎「女性の肉體美と粉飾美」『婦人世界』1927〔昭和2〕・22・4）。あるいは「着物の色合い」「柄」「髪結び方」からなる「容姿美」、それによって男子に「激烈な恋情を起さしむる」「感覺美（古宇田倣太郎「婦人服装の醫學的考察」『婦人世界』1927〔昭和2〕・22・5）、西洋でも日本でもスクリーンのスターに代表されるような、活き活きた表情に溢れ、官能的で「刺戟の強い」、「近代女性の美」（阿倍喜一郎「官能的な近代女性の美」『婦人世界』1926〔大正15〕・21・7）²¹……。

このように「外面の美しさ」が、女性身体のいたる所に拡散された形で発見されている。もちろん「心之美」や「精神之美」が言及されることもあるものの、どちらかといえば「外面」に比重が置かれている。『婦人世界』における語られ方は、先の『女学世界』の女学的な作法のように、「美人」を罪惡視するのでもなく、「美人」の「外面」だけを論じることを留保し、「内面」を讃えるようなやり方とも大きく違うのである。



図5-9. 妖艶なモダンガールが描かれた『婦人世界』の表紙
(1926〔大正15〕・21・8)

²¹ 先の羽太は、『應用醫學叢書 第壱編 性慾の話』（1918〔大正7〕羽太銳治ほか監修、一橋閣）のなかで、「快美」という言葉を用いている。それは、以下にあるように、「觸覺美」や「視覺美」によって「快感」を生じさせる「美」であるという。つまり、「異性の美貌は快感の要素であつて、美の同情がなければ、快感を得る事が少ない。音聲も亦同一の意味を有するものである。次に、異性の接觸は、生理的に快感を生ずるものであつて、身心相關の理に依つて、容貌の美なるものは美なるほど多く快感を惹き、醜きものはこれに反することは言ふ迄もない事である。これ美人の好かれ醜婦の嫌はるゝ所以であつて、異性の觸覺美は、畢竟視覺美に比例するものであるとも言ひ得るものである」（羽太銳治ほか監修 1918〔大正7〕『應用醫學叢書 第壱編 性慾の話』一橋閣：10-11）。

とくにそれは結婚という配偶者選択の条件として、またそれに密接に関連するセクシュアリティの領域における「誘因」として捉えられていたように、ここにおける〈外面の美〉は、とりわけ女性の運命を決定づけるものとして位置づけられている。先にも述べたように、その〈美〉のあり方は、確定的で、固定化されたものというよりかは、語る者による無数のまなざしによって存在していた。したがって、女性の側からすると、自らの〈美しさ〉は、運命を左右する可能性を備えたものでありながらも、偶然性と不確実性に満ちたそのまなざしのなかに委ねられることになる。

4-4. おわりに

本章では、女性の外面と内面の循環ともいうべき運動について、『女学世界』と『婦人世界』の「美人論」を取り上げながら検討してきた。冒頭で述べたようにこの循環は、第1章で詳述した「芸妓」の「美人写真」を契機とする「美しい顔の可視化」から、「女性」の「外貌」のみを「美人」と表現するやり方に対する批判とともにそこに「内心の美」をも加えようとするものと、同時に外面のみの「美人」の標準と偏差を言語化する試みから始まっていた。それは「美人」という言葉の混乱を伴う「美人論」の系譜でもあった。

まず「女学生」年代向けの雑誌メディアである『女学世界』においては、「美人論」が「美人罪惡論」として展開された。「美人罪惡論」とは、「美人」と「醜婦」が顔ではなく、それぞれの内面、それも良妻賢母としての規範である「徳」を備えているか否かによって線引きするという奇妙な位置づけがなされていた。逆にそうせざるを得ないほどに、このとき、「美人」が「芸妓」という身分・職業の女性を指し示す言葉であったと捉えることができる。ゆえに『女学世界』では、女徳や豊富な学識を備えた者こそが「眞の美人」であるとする言い方や、「精神」や「心」が筋肉へ作用し、外側へ表出すると考えられた「表情論」のように、「内心の美」を経由する形でしか、「外貌」を語るができなかったのである。『女学世界』のこうした「美人論」は、〈内面の美〉を強調し、自律した形における〈外面の美〉をないものとする、いわば女学的作法なのであった。

しかし、本論でみてきたように、それは近代における〈女性美〉に関する語られ方の全域を覆うほどの厚みはなかった。『女学世界』とほぼ同時期に刊行されていた『婦人世界』では、やはり「美人」に関する記事は多いが、そこではもう「美人」＝「芸妓」とする見方や、当然「美人」を罪惡視する『女学世界』的な語られ方はなされていない。『婦人世界』で「美人」として位置づけられたのは、芸妓、皇族の女性、華族や実業家の夫人や令嬢、無名の女学生……という多様な女性たちであった。「美人」であるか否かは、身分や職業という属性によってではなく、おおよそ現代に近い意味で、ごくシンプルに「美しい顔の形態」を備えているかによって決まっている。さらに『婦人世界』では、〈外面の美〉が配偶者選択の基準において重視されること、そしてそれと関連してセクシュアルな魅力なり得るとも言及されていた。

『婦人世界』の「美人論」では、『女学世界』にみられた「内面／外面」という明らかな対立項もだいぶ見出し難くなっており、「外面の美しさ」そのものを論じるものへと変貌を遂げていた。（ただし〈内面の美〉を重視する声が全く無くなったというわけではな

い)。こうした過程から読み取れるのは、〈美しさ〉が資本として成立しつつあったからこそ、先の『女学世界』の「美人罪惡論」が、それをあえて否定し、「見ないふりをする」論理であったということだ。

『女学世界』のなかで意図的に無いものとされたく女性美の魅力と、それに対する多様で拡散されたまなざしは、『婦人世界』などに掲載された女性の「見合い写真」において鮮鋭に現れていた。その被写体である「見られる存在」の女性たちも、それに対して様々な工夫を凝らすことを通して、結婚という不確定な可能性に挑むが、それは何よりも「写真」に切り取られた「外面の美しさ」というものが、やはり女性の運命を切り開く可能性を備えた資本と化しているからなのである。

第5章 衣服の流行の語られ方

5-1. はじめに

本章では、雑誌メディアに記述された「衣服の流行」を追うことにしたい。具体的には前章と同様に、1900年代においてほぼ同時期に創刊された『女学世界』（1901[明治 34] 年創刊、博文館）と『婦人世界』（1906[明治 39] 年創刊、実業之日本社）の二誌を資料とする。いうまでもなく本論は、いかなる衣服が流行したのかについての変遷を追うものではなく、先の二誌間において、いかに衣服の流行の語られ方に違いがあるのかを検討するものである。

『女学世界』と『婦人世界』が創刊された明治後期は、消費文化の形成に重要な役割を果たしたといわれるデパート（百貨店）が登場し始めた時期であり、戦前期の「大衆消費社会」に関する実証研究では、多くの場合、この百貨店の登場を起点にして展開される。1904（明治 37）年には三越呉服店が「デパートメントストア宣言」を行い¹、次いで1907（明治 40）年には白木屋や高島屋、そごうなどが呉服店から百貨店へと移行を遂げた。吉見俊哉(1992)によれば、こうした百貨店は、個々の商品を販売するというだけでなく、商品の博覧会的な展示を採用し、また様々な演出やイベント企画を催すことで、スペクタクル空間として機能した。また神野由紀(1994)が明らかにしたように、三越呉服店では「流行会」なるものが形成され、機関雑誌などで積極的に流行戦略を練っていたのである²。ただ、それにもかかわらず、三越呉服店などの戦略によって生じた流行現象が具体的にどのようなものであったのかについては、これまで意外なほど論じられてこなかった。

対してよく言及されるのが、大正後期から昭和初期における「モダンガール」の流行である。序章でも指摘したように「モダンガール」の出現は、これまで「大衆消費社会」の最も先鋭化した現象として捉えられてきた。しかし、呉服店などが「デパートメントストア化」した明治後期と、「モダンガール」が流行した大正後期とでは、時間的な隔たりがあることも確かである。ここに明らかに意図的な切断がみられるのだが、それは日本における「衣服の近代化」が、1920年代後半以降の「モダンガール」の登場に、つまり「洋装」の普及のなかに見出されることに起因している。またこの「モダンガール」の出現においてみられた「女性性」の変容は、消費を通しての現代的な女性身体とく美しさの結び付きの起源としても位置づけられている（足立 2010；小檜山 2010；前島 2012 など）。あるいは、戦前の女性雑誌が「洋装化」において果たした役割について考察した坂本佳鶴恵(2010)によれば、「洋装化」という服装の変化とは、つまり「西洋化」と密接に関連している。またそれだけでなく機能性や合理性の重視という近代化、そして旧来の思想や制度からの解放という女性の人権や平等という視点とも深く関わっている（坂本 2010）。

¹ 1904（明治 37）年に三井呉服店は、西洋の百貨店を参考に長暖簾座売から陳列販売方式に改め、百貨店「三越呉服店」となった。その経緯については初田（1993）及び神野（1994）に詳しい。

² 百貨店が発行した機関雑誌については、土屋（1999a，1999b）を参照。

しかし本論で考察されるのは、「衣服の近代化」を洋装化のプロセスではなく、明治30年代以降の「和装」中心の流行現象である。そこでは、すでに G. ジンメル (1911=1994) が指摘したようなある集団への模倣とともに差異化あるいは個性化への衝動を確認し得る。それゆえに先のモダンガールという流行や洋装化の現象は、大正後期において突如現れたのではなく、むしろ明治半ば以降の延長線上に位置するものとして捉えるべきであろう。

ただ、明治期においてこうした流行現象を誰もがすぐに受け入れたわけではなく、本章で着目する『女学世界』と『婦人世界』における記述からは、衣服の流行をめぐって多様なせめぎ合いが見出された。本章では、こうした記述に着目しながら、「流行の衣服」の意味と、またそれとく女性美との関わりに焦点を当てたい。

5-2. 「女学生」という身分とスタイル：『女学世界』

本節では、まず『女学世界』において記述された明治半ばから後期にかけての衣服の流行について検討する。『女学世界』という雑誌の特性についてはすでに第3章（第1節）で述べた通りであるが、同誌の読者層をいま一度確認しておく。「女学生」年代が中心となる。1899（明治32）年に高等女学校令が公布された後、新学問を学ぶため女学校へ通う、いわゆる「女学生」が急増したことを受けてのことであった。『女学世界』では、この新しい身分の「女学生」の装いについて言及する記事が多くみられた。

5-2-1. 束髪と袴による身分の提示

他の庶民の女性と区別させるために、「女学生」という身分に応じた装いとして選ばれたのが、袴である。本田和子(1990)によれば、袴は、東京の華族女学校で最初に正規の服装となった。華族女学校で袴が採用されたのは、着流しの和服が「庶民風」として退けられ、「御所風」とと考案されたという経緯による（本田 1990：85-87）³。「女学生」という新たな身分の登場に際して、衣服が密接していた身分別の可視化という近世的な価値観を継承させる形で、それに見合う装いが生まれたのである。女学生が袴を着用することに対しては経済上、あるいは美術上の点から批判があったものの、この装いが学校側の提案として取り入れられたように、活動的で、また身体の発育を妨げないという点において（野中千代子「女子服装の改良」『女学世界』1901[明治34]・1・11）、女性の古い風俗や衣服の改良を訴えた教育家と医師らとの意見がおおむね一致したところで受け入れられたといえよう。

『女学世界』の記事によれば、袴の伝播はとても速く、華族女学校で取り入れられてからわずか2、3年で「あらゆる都會の女学校を風靡し」、「片田舎の地」にも広まり、「高等小學の女性徒」から「裁縫専修科の婦人」にまで着用されるに至った（塚本はま子

³ 大学や専門学校の卒業式では、「袴」を着用する女性の姿が多くみられるように、現代でも袴は、学校行事の礼装であるとともに、女性と学問の結び付きを示す装いとなっている。

「婦人の風俗改良」『女学世界』1902[明治35]・2・6)。「都市」では、1902(明治35)年の時点で、袴を着た女性を見ても振り返る者も少なくなり、女性の袴姿が珍しい時代は過ぎ去ったという。男性用の二股に分かれたズボン式の袴を、スカート状に改良されたのが「行燈袴」である。袴を着用することは、下記の記述にあるように旧習からの解放を意味した。

歩むごとに露はれし醜るしき姿は隠れぬ、幅廣く重き帯は取り去られ、馬背のごとく脊負ひあけたる帯揚げは不要となりぬ、重き裾、幾枚かを重ねて、蹴返へす苦しみもあらねば、歩行の自由を得たることいふべくもあらず、腰帶も緊しくしむべき必要なく、前をかたく合はすべき苦心もいらす、その氣樂なる事たとへんにもなし。こをか風の吹きあるゝ日に、右手に包物をかゝへながら、洋傘をかざし、左手に辨當箱さげつゝ、襟の風にふき返へされぬ要心する、憐れなる妙齡婦人の様子に比ぶれば、これのみても一生の中に、五年十年の壽命は延びつべくぞ見らるゝ。

(塚本はま子「婦人の風俗改良」『女学世界』1902[明治35]・2・6)

袴を着用することにより、幅広く重い帯と腰帶によってきつく締めあげられる苦心、幾枚も重ねられた「重き裾」を「蹴返へす苦しみ」、「長襦袢、長胴着、下着、上着の裾なほし」をする苦勞から解放され、「氣樂さ」と、前を向いて足を真直ぐ踏み出して歩くという「歩行の自由」を得たという。袴の着用とともに振る舞いや身体技法も変わっていったのである。この記事の執筆者である塚本はま子は、『家事教本』(1900[明治33]、金港堂)や『實踐家政学講義』(1906[明治39]、参文舎ほか)などの著作がある新しい女子教育を推進する立場にあったが、この塚本は、以上の変化を「婦人服改良の第一歩」が成功したと賞賛している(塚本はま子「婦人の風俗改良」『女学世界』1902[明治35]・2・6)⁴。

先の袴に加えて、明治期の女学生の装いとして現在でもよく知られているのが「束髪」であろう。束髪は、西欧より伝わり、鹿鳴館時代には上流階級の女性のあいだで洋装とともに流行したが、その後一度廃れた(無署名「東京婦人風俗一斑」『女学世界』1901[明治34]・1・13)。今度は、洋装ではなく、着物に袴という和装と組み合わせることで「新しさ」を帯び、女学生を中心に復活したのである。束髪と袴は、「女学生」という身分を強烈に印象づけるものだが、束髪も、やはりたんに結髪(日本髪)からの変容であるというだけでなく、先の袴と同様に女性の習慣をも変えた。束髪は、リボン等で装飾されるもののピンで留めるだけで完成し、結髪のように高価な「玳瑁の櫛」や「金脚のかんざし」は不要であり、また鏡台の前に長時間拘束されることもなく、鬢付油を使わないので洗髪がしやすく、「二百年來、我國婦人の頭髮を支配せる不便なる壓制」と表現された結髪との決別を意味した(塚本はま子「婦人の風俗改良」『女学世界』1902[明治35]・2・6)。新しい「良妻賢母」という女性像を掲げた女子教育推進論者にとって、旧来の女性像を打破しようとする試みは、まずはその身なりによって達成されたといえる。

ただし、『女学世界』では、旧習から解き放たれたこの装いとそれに伴う振る舞いが

⁴ 明治後期における和服の改良案に関する議論については、小山(2009)を参照。

「怪げなる束髪を蓬々^{ぼうぼう}と亂し、袴しだらく穿ち、衆人の前をも憚りなく横行闊歩」するさまとして、批判的に捉える記事も掲載されている（十八世紀の翁「現代婦女雜觀」『女学世界』1905[明治38]・5・9）。さらに以下の記事にあるように、束髪と袴は、襟筋の整え方や腰部の帯、そして脚部の裾^{つま}から成る「後姿の美」を消失させたとの指摘もなされている。

取別^{とりわけ} 日本婦人の美は襟脚の通りたる、漆の如き眞黒き髪が生えぎわのクツキリとせるにありて、その艶なる風情は西洋婦人に絶えてなき所なり古來風俗畫工の佳人を繪けるさまを見よ、如何に此點の描寫に入神せるかを、故に或る場合には襟元を以て女性美の焦點と云ふも敢て不可なきことなり、又曰の如く太れる臀部は帯にて美化せられ、脚部にて引きしまり、裾もチヤンと底基^{きてい}の出来てゐるさま、即ち物腰の女子らしき所に婦人の美はあるなり、さるに今日大流行の結髪（ここでは束髪を指している：引用者注）を見るに、前面は十二分に底を築き出し、後方は蓬々^{ぼうぼう}と迷毛^{おくれげ}を亂生に任せ、……後姿の美の焦點とも云ふべき帯を廃して、ダラシなく行燈袴を引きづり歩く姿は、何とか言はん、形容に言葉なきを覚ゆるなり。

（無署名「女性美に付いて」『女学世界』1906[明治39]・6・3）

束髪や袴からなる女学生特有の装いは、上記のように伝統的なく女性美と対比され、批判を受けたのである。この記事は無署名である為、書いた者の性別を知ることはできない。しかし、女性自身では決してみることでできない「後姿の美」が重視されているのは、明らかに「見る者」としての男性的な視線に依拠したものであろう。こうした視線は、先の記事にあったように、衣服改良の視点から評価された束髪や袴によって得られる自らの身体性の回復ともいえる新たな身体感覚とあまりにかけ離れている。

またこの女学生の装いは、医学的観点から体格の改良を目指す試みとも合致していた。双方から布を重ね合わせるという着物の構造は、「両脚に輪を嵌めて」いる状態であり、裾が乱れて脛の露出を防ぐためには内輪に歩かなければならず、運動が妨げられる（高木医学博士談「衣食住の改良」『女学世界』1905[明治38]・5・5）。さらに日本人の体格の悪さは、「帯」が胸部や内臓を圧迫し、全身の發育を妨げることにより要因があり、「外國人のコールゼット」のよりもその害は大きいとも指摘されている（高木兼寛（醫學博士）「女子服装改良意見」『女学世界』1901[明治34]・1・5）。このような意見は、衣服の改良のために袴の着用を推奨した先の塚本のものと一致していよう⁵。

ただ、衣服や体格の改良を目指した教育家や医師たちの意図と、当の「女学生」自身の思惑は、そのまま重なっていたのだろうか。

⁵ またヨーロッパにおいて女性のコールゼットが批判されたのもほぼ同時期のことであり、コールゼットから解放するための衣服がデザイナーたちによって考案され始めていた（北山1999）。それゆえに日本の改良服においては、「亜米利加あたりの處女の服」が参考とされている（野中千代子「女子服装の改良」『女学世界』1901[明治34]・1・11）。

5-2-2. 「女学生スタイル」のトリクルダウン

『女学世界』のある記事は、「女学生」という新しい身分に対して、それも「海老茶の袴姿」に憧れる者が出現していたことが指摘している。明治後期の女学生について書かれたその記事では「女學生は兎角浮華に流れて、何等目的とするところもなく、只隣の友達が高等女學校へ入ったから自分も入るとか、海老茶の袴を着けて歩くのが嬉しいので譯もなく女學生になるとか」、そういう「頗る真面目」を欠いた「浅薄な考え」から「女学生」になりたいとする者がみられたという（無署名「最近女學生の傾向」1912[大正1]12・8）。ここにおける「女学生」とは、やはり当時のそのイメージを決定づけている「海老茶の袴」によって表象されたものである。とはいえ、そのように望んだところでそれを実現できる者は一部の層に限られているのだろうが、こうした記述からは、かつて安定した位置にあった身分とそれに関連するコードの可動性を確認することができる。さらに「海老茶の袴を着けて歩くのが嬉しい」とあるように、それは通学時に外を出歩き、そこで他者の視線を獲得することによって完成されるのであり、「海老茶の袴」が確かに一つの「記号」と化している。

さらに注目すべきは、これまで服飾史などにおいて言及されてこなかった点であるが、この「女学生」特有の装いが、より広い層の女性に、つまり女学生以外の者によって模倣されたことだ。まさしく新しい種類の記号が生じていることがここからも確認できるのだが、『女学世界』では、他の身分・職業の者が女学生の装いを真似ることが批判的に捉えられている。

たとえば「^{ひし}廂髪」（束髪）は、「上流社会から女學生諸君の範圍内」から、「日露戦争頃からは一般に流行して、猫も杓子」も結び始め、「質素と復古を兼ねて折角歌子女子（下田歌子のこと；引用者注）が苦心された風を、^{てんでんぼらばら}点自離々に勝手に」崩して「花柳界の人達にも行はれるやうに」なったという（小泉迂外「女装いろへ草（四）」1913[大正2]・13・6）。別の記事でも、やはりこの「^{ひし}廂髪」が「十三歳の少女より五十の老婦に至るまで」広まり、「奥様も、お部屋様も、^{ごんさい}權妻も……炊爨婦も、……醜業婦も女學生の如く又令嬢の如く、^{よめ}嫁女も處女の如く、老婦も新婦の如く、新婦も處女の如く、……母子なお姉妹の如く、下婢令嬢朋友の如し……」と、「婦人界」が「混沌たる」「無秩序」状態を呈したと指摘されている（十八世紀の翁「現代婦女雜觀」『女学世界』1905[明治38]・5・9）。こうした状態が「無秩序」にみえるのは、結髪では、十四、五歳では「桃割れ」、未婚の妙齡の娘は「島田」、若妻は「丸髻」というように年齢や身分に応じて結ぶ型があらかじめ決まっていたからである（無署名「東京婦人風俗一斑」『女学世界』1901[明治34]・1・13）。

さらに別の記事では「女學生風を模した下婢や職工」（觀風子「東京女學生のスタイル」『女学世界』1907[明治40]・7・10）が現れたとあるように、やはり「袴」も模倣の対象となっていた。

變り色の袴を着け、底髪に花束の簪と云ふ扮装の女子さへ見れば皆女學生なりと思へど、電話公換局、印刷局乃至は停車場の切符賣子、銀行、會社、郵便局の雇れ人も、又女學

生にあらざる只の女子も自から嗜みて袴を穿つものあり。中には世間を騙かる手段として、如何にも女學生に見え、令嬢と思はるゝ風を爲る者もあり。……屡々世間の眼に觸れたる者は、多くはこ是等學校以外の似非女學生なりしならんと思へり。

(戸坂關子「女學生問題の一轉化」『女学世界』1907[明治40]・7・4)

ゆえに「世人が認めて女學生と爲すものゝ中には、往々如何はしき婦人も混じり、殊に海老茶袴の流行は、如何なる階級の女子にも及ぼし居ること故、其服装のみを見て直ちに女學生と断定するは」「早計」で(無署名「女學生の風俗」『女学世界』1905[明治36]・5・5)、もはや「一概に東京の女學生と謂つても、見たばかりでは電話交換手か、看護婦か、印刷局の女工か、見判けが」つかなくなるほどであったという(觀風子「東京女學生のスタイル」『女学世界』1907[明治40]・7・10)⁶。

「女學生スタイル」の「女學生」以外の者(上記の引用文では、それを「似非女學生」と称している)による追隨は、装いにおける新たなコードが生み出されたことを示すものである。むろん束髪と袴は、確かに結髪や着物に比べて動きやすく利便性もあり、運動や労働には適している。だが、こうした使用価値だけでは階層や職業、年齢の区別なく模倣された理由を十分に説明することができない。やはり多くの女性を惹きつけたのは、この装いの「新しさ」にあるのだろう。先に挙げた衣服改良を唱えた塚本はま子は、このスタイルが花柳界から発する装いとは一線を画し、「なまめかしからず、墮弱ならず、凛々しげにも、活發にも」みえたと指摘するように(塚本はま子「婦人の風俗改良」『女学世界』1902[明治35]・2・6)、ここでモデルとなるは、いうまでもなく新教育制度とともに誕生し、凛々しく颯爽とした姿で歩く(ときには自転車に乗る)「女學生」たちである。凛々しく活發なイメージは、着物という装いではなく、束髪と袴によってこそ表現されるのであり、「ハイカラ」という新しい装いやライフスタイルを揶揄する言葉が生まれたのも、おそらくこうした衣服における新たなコードとその変動と関連している。さらに、束髪を結び、袴を身にまとうということが、結髪や着物に比べて簡便で安価であったという点が重要である。新しい身分に付随するこれらの記号は、たとえ女學校に通うことのできない者であっても、それを比較的容易に手に入れることができるからだ。

ただし、束髪に袴という身なりが職業婦人や下層の労働者、娼妓にまで模倣されたとなると、それは女學生という身分を必ずしも保障するものではなくなってしまう。先の記事のように、外見のみから女學生と断定することはできなくなったと嘆く声が数多く確認されるのも(無署名「女學生の風俗」『女学世界』1905[明治38]・5・5など)、考えてみれば当然のことであるのかもしれない。それまでは外見や身なりが、個人・社会的属性と密接に関連していたのだから。それを批難する者たちは、外見や身なりから判断し得る個々人の痕跡が喪失したことによって得体の知れぬ女性に対する戸惑いと不安に駆られているのである。ここからは、たとえば通りすがりの匿名性をまとうその人の素状を身なりから想像するというような余裕は、全く感じられない。そして、外見や装いの特徴による

⁶ また後に取り上げる『婦人世界』の記事でも、袴に関する興味深いエピソードが紹介されている。京都のある女學校では、「海老茶袴では、公換手や女工と間違へられる恐れ」があることから、「海老茶」の袴を「紫」に変更したという(川上文芽、「京都婦人の新傾向」『婦人世界』1912[明治45]・7・7)。

属性の区別・差異の消滅に対する社会的不安の高まりは、女性の装いに対する規制を強化するほうへと向かう。実にこれまでに取り上げてきた記事は、まさにそうした規制の一部なのである。ただ、先に紹介した塚本の記事のなかで、都市では「袴を着た婦人を見ても振り返る者が少なくなった」と書かれているように、雑多な立場にある無数の人々との絶え間ない外面的接触が重ねられるなかで、このような戸惑いや不安にもすぐに慣れていくのだろう。あるいは、内面では不安が高まりつつも、無関心を装う態度を都市の作法として身に付けるようになるのかもしれない。

ところで、この「女学生スタイル」の流行は、上流階級から下層階級へと「トリクルダウン」するという階級的な流行であった（Entwistle 1961=1964）。ただし、この女学生の装いは、当初、衣服や体格の改良を望む者との意向と合致して考案されたように、決して「流行すること」を目的として考えだされたスタイルではなく、また次節でみていく多様な流行戦略を練る百貨店の積極的な関与があったわけでもない。むしろ注目されたのは、「女学生」という新たな身分であろう。それが女性雑誌の口絵のイラスト（図5-1）や写真、絵画、小説の挿絵などにおいて「女学生」のイメージが多様なメディアを通じて複製・反復されるなかで、その意図せざる結果として追随者を生むことになっていったのだと考えられる。こうしたイメージの流通とともに、明治30年頃であれば「華族女学校」、明治34年頃からは「目白」の「女子大學」というように、学校ごとの「風姿^{フウサ}」として定着していく（曙女史「最近十五年間に於ける東京女學生風俗の変遷」『女学世界』1909〔明治42〕9・14）。一方で、絵葉書などの芸妓の「美人写真」では、「女学生スタイル」に扮装する姿が散見される（図5-2）。まさに「女学生スタイル」が一つの記号であったことを示すとともに、芸妓の美人写真が「女学生スタイル」のイメージの流通にも一役買ったことが推察される。



図5-1. 女学生スタイルの口絵
（『女学世界』1904〔明治37〕・4・15）



図5-2. 芸妓富田屋・八千代による
「女学生スタイル」の扮装（絵葉書）
（草柳・岩崎編〔1991：47〕より転載）

ただし、次節で取り上げる「芸妓」に始まる流行は、それとは異なる側面を持つ。つまりその流行は、階級的区別の所産ではなく、いわば階級外の「有名性」を備えた人物から発信されるという特徴があった。

5-3. 「芸妓発祥」の流行：『女学世界』

5-3-1. 流行戦略としての「芸妓の装い」

先の「女学生スタイル」のように、ふつう流行は上流から滴り落ちていくといわれる。だが、『女学世界』では、芸妓の服装が「四季を通して、流行の魁^{もきがいけ}」であり、逆に上流に向けて広がりをもせたと書かれている（三輪田元道「服装と處世」『女学世界』

1907[明治40]・7・13）。当然のことながら同誌では、芸妓から広まる流行に対する批判的な記事も度々掲載されていた。それは「玄人／素人」という二項対立図式を用いて「女性性」を規制しようとする近代的な欲望のなかで記述されたものであり、一方ではそれを「芸妓」に対する賤視の強化と捉えることもできよう。だが、それは事態の一面でしかなく、このような規制が記事のなかで多く語られるほどに、彼女たちに対する羨望もまた同時期に存在していたことを明確に示すものでもある。

むろん明治以前から、花柳界は流行の発祥地であったことはよく指摘されるが、それはごく狭い領域に限られていた。たとえ流行が生じたとしても、度々触書によってその装いが禁じられるため、それは制限付きの流行ということになる。厳重な身分的階層のある封建社会では、装いの身分別は近代のそれより遙かに厳しく絶対的なものであった。そして明治初年に服制が解けると、「階級的社會制度の打破によつて拘束を免がれ、金力だにあれば普通人にして高貴の人と同じ服装を用ゆるも、何等制裁を蒙ること」はなくなったのである（根本吐芳「婦女服装の変遷」『女学世界』1912[明治45]・12・8）。

ただ社会的な制裁はなくとも、『女学世界』では、芸妓の装いを「富豪の婦人令嬢」や「貴婦人連まで喜んで」真似ることに対する批判的な記事がとりわけ日露戦争以降から頻繁にみられるようになる（胡劔「黄金征伐の筆頭生活難の新福音」『女学世界』1908[明治41]・7・1）。

この芸妓の装いを真似た服装が、著しく「華奢に傾いて」いたのは、先の服制の解除とともに「各呉服店の誘惑的販賣法」に原因があるとも指摘されている（根本吐芳「婦女服装の変遷」『女学世界』1912[明治45]・12・8）。芸妓を真似た装いの流行は、やはり三越呉服店のような百貨店の意図的な関与を無視することはできない。ある記事では、

1905（明治38）年に三越呉服店が、「新柳二橋の美人」「先づ只今の處藝者^{ところ}」に「用ゐさせた」ことによって、「元祿模様」の呉服を勢力的に流行らせることに成功したと紹介される（傍点引用者、泊子「美人の勢力範圍」『女学世界』1906[明治39]・6・8）。神野（1994）によれば、当時の三越呉服店（現三越伊勢丹）は、1904（明治37）年に学者、有識者を集めた「元祿研究会」を組織化し、元祿模様の流行を創出させることを目論んでいたという（神野 1994:128）。そして図5-3にあるように、三越呉服店のPR誌や広告では、「芸妓」に「元祿模様」の衣装を着せ、また元祿舞を躍らせるというイベントが行

われた（小平 2008：44）。つまり、先の記事のなかで「新柳二橋の美人」に「用ゐさせ
た」とあるのは、百貨店という文化装置の広告やイベントの「モデル」として、「芸妓」
が起用されたことを指している。



図5-3.「葭町伊達姿（吾妻振昔人形）」

『時好』1905[明治38]年5月

（小平[2008：43]より転載）



図5-4.「元禄模様」の宣伝用の

ポスター

（草柳・岩崎編[1991：59]より転載）

「富豪の婦人令嬢」や「貴婦人連まで喜んで」真似たといわれた「芸妓の装い」とは、当然のことながら「花街の芸妓」そのものではなく、百貨店の広告等によって流通した「芸妓のイメージ」のことである。したがって、この「芸妓の装い」の模倣とは、先の『女学世界』に記事で指摘されていたように、下流から上流に広がる流行であったとは必ずしもいえない。おそらく百貨店側としては、広告や「モデル」として起用する女性が「芸妓」でなくても構わなかったはずである。たとえば西欧では、こうした場合、上流層の女性や女優が起用されたのだが、日本では江戸期から女性が舞台に立つこと（女歌舞伎・遊女歌舞伎・女踊り子）が禁じられていたために、「女優」と呼ばれる存在はごく少数であった。こうした事情から1章で論じたように「美人写真」としてそのイメージがすでに流通し、かつ料亭などの小さな舞台に立つ経験のある存在であった「芸妓」を採用することになったのだと考えられる。

芸妓を用いた百貨店側の戦略は、功を奏し、「元禄模様」の次には「桃山式模様」を流行らせることを成功させたという（泊子「美人の勢力範囲」『女学世界』1906[明治39]・6・8）。これは着物の生地ではなく「柄」を本位とする流行現象であり、それ以降新しい「柄」を求めて、以後色彩も模様も急速に派手になっていく。実は、明治も半ば頃まではさほど華豪が求められたわけではなかったという（柳田1979）。「元禄模様」の流行をきっかけにして装いが「華美」なほうへ流れていったこの派手好みの傾向を『女学

世界』では、「呉服屋か小間物屋の奴隷」であると批判し（胡劔「黄金征伐の筆頭生活難の新福音」1908[明治41]・7・1）、その要因を「婦人の虚栄心」に求めている。ただ、このように流行を解釈する試みが、それほど意味のあるものとは思えない。というのも、この「華美」な装いとは、模倣する者と新しい装いを着る者とのあいだにおける「均等化」と「差異化（個性化）」の衝動のせめぎ合いによって生じたものであり（Simmel 1900=1999）、それがたんに「華美な柄」という方向へ加速したという、ある特定の時期にみられた流行現象のヴァリエーションの一つに過ぎないからだ。

前節で取り上げた「女学生」の装いもまた同様の動きをみせている。模倣する者との差異化を図るかのように、通学時の女学生の姿は金の指輪や時計、金縁の眼鏡等の装飾が加えられ、よりいっそう華美なものになったという（十八世紀の翁「現代婦女雜観」『女学世界』1905[明治38]・5・9）。ある女学校では、華美な服装の着用を禁じたが、「着物に派出な物を禁ずれば、派手な帯を締める、帯も派手な物を禁ずれば羽織を派手にする。それをも禁ずると、今度は襟とか空気草履の鼻緒とか、或は風呂敷を派手にすると言ふ始末で、却々華美に流れるのを禁ずることは出来ない」とある（澤田撫松「最近女學生の傾向」『女学世界』1912[明治45]・12・8）。このように装いの規制が強化されなければならないほどに、その流行が強い運動であったことがわかる。

5 - 3 - 2 . 装いのコードの転倒

こうしたなかで、綿入のお召縮緬を「ぞろりと着流」し、田舎で流行ったという米澤の着物を普段着として用い、外出時にはわざわざ「瓦斯の矢絣」に着替えるというようなことが起こってくる（観風子「東京女學生のスタイル」『女学世界』1907[明治40]・7・10）。つまり、常に「新しいもの」が優先されるこの現象では、装いにおける従来の慣習から離脱させる作用を併せ持っており、種類、色、生地、着方というかつて多くの者に共有され伝統的に固定されていたコードの転倒を招いたのである。さらには、衣服の布地という物質性にも影響を与えており、たとえば稀少で高価な絹物を買えない者は「鳥渡見れば絹と見える様な瓦斯や紡績の擬かし物」によって代替させたという（観風子「東京女學生のスタイル」『女学世界』1907[明治40]・7・10）。均等化を助長させ、より多くの者を巻き込んでいくことを可能にさせたのは、高級生地の「擬かし物」、つまりイミテーションを大量生産する産業技術と、それによる価格の低下が大きく寄与したのであろう。

外見を華奢に飾る風習が「下等社會」にも広く行き渡ったとされる所以である（吉川曾水「現代淑女の生活」『女学世界』1906[明治39]・6・6）。さらに「公園を散歩するも學校寺院を訪ふも、一般に此弊風の存在するに氣附く」とあるように（吉川曾水「現代淑女の生活」『女学世界』1906[明治39]・6・6）、本来在るはずのない場所で出会う、「芸妓」を真似た「華美な装い」は、先の「女学生スタイル」のように、それをみる者に対し戸惑いを生じさせることになる。1章でも述べたように「花街」や「遊里」という、これまで「悪所」という名で一括され他の場から慎重に隔離されてきた空間においては（広末 1973）、それ以外の女性と異なる装いこそが、その場に属し、「玄人女性」であることを特徴づけていた。つまり、「芸妓」を真似た華美な装いの流行は、日常のすぐ傍にある「非日常」を境界づける要素の一つを消失させたことになるのである。

こうして「玄人／素人」の女性間における装いの区別がなくなると、素人の女性は「墮落書生」の目に付きやすく、終生拭えない汚点を残すことになり得ると指摘される（無署名「女學生の風俗」『女学世界』1905[明治38]・5・5）。そこで素人の女性に対しては、その貞操を守るために「清楚な風^{ふう}豊^{ほう}」たることが望まれたのである（吉川曾水「現代淑女の生活」『女学世界』1906[明治39]・6・6）。

だが、ここでもう一度確認しておくと、流行現象となった芸妓のような華美な装いとは、花街の芸妓ではなく、百貨店などの広告などを通じて流通した、作られた「イメージとしての芸妓」の装いであった。それが先の記事のように、空間や場に関係なく広まっていたとするならば、やはり当の花街の芸妓も、それを真似たということになるのであろう。しかし、「玄人女性」である「芸妓のイメージ」が広告などを通じて流通したために、それをまなざす者にとっては、「花街の芸妓」も、そして「素人女性」も一様に、「芸妓」のような華美な装いであるようにみえてくる。それゆえに、この「玄人女性」と「素人女性」の外見上の差異の消失は、「素人女性」の貞操をおびやかすものとして捉えられたのである。本当は、広告の「芸妓」の華美な装いとは、「花街の芸妓の装い」ではなかったのにもかかわらず。それは、まさしく「芸妓」という身分の者たちを広告のモデルに起用したことによって生じた混乱であるのだろう。もしそのモデルが「芸妓」ではなく、「令嬢」のような別の身分の女性であったならば、それとはまた異なる結果、つまり装いの規制を強化しようとする声は挙がらなかったのかもしれない。

以上では、『女学世界』で記述された流行現象をみてきた。だが、かくも豊かな流行現象は、実にその多くが批判的なまなざしのなかで捉えられたものであった。もっとも同誌には、創刊年より「流行のしほり」と題する流行案内も散見されるのだが、それも衣服や流行に関する規制が強化されるなかで、徐々にみられなくなっていくのである。この『女学世界』のメディアの特性について言及するならば、たとえば現代における流行の生成に密接に関与している「ファッション雑誌」としての役割は、かなり希薄だといえよう。

5-4. 「個性」という共振：『婦人世界』

本節では、同時期において『女学世界』とは対照的に「流行」を肯定的、かつ積極的に取り上げている雑誌である『婦人世界』（実業之日本社、1906[明治39]年～1933[昭和8]年）に着目する⁷。ただし、衣服の流行に関する記事が散見されるとはいえ、やはり『婦人世界』も、現代の「ファッション雑誌」の類とはまた違っている。『婦人世界』に掲載された「流行案内」や「商品案内」に関する記事は、『婦人世界』の創刊号にて宣言された「新しい趣味と智識の提供」（高信峽水「婦人と雑誌」『婦人世界』1906[明治39]・1・1）という同誌の目的のうちに位置づけられる。

⁷ 『婦人世界』の概要については、第4章3節を参照。

5-4-1. 『婦人世界』における流行案内

『婦人世界』では、図5-5にあるように、衣服や装飾品の「流行」を紹介する記事が独立した状態で提示されている。商品の写真も掲載されており、華やかな印象がある（三越呉服店員談「流行」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・4）。この記事で流行の「肩掛と手套」について紹介しているのは、三越呉服店の店員である。「レース製」の「肩掛」は、レースが「窓掛け用の模様ではなく、種々高尚なる模様にて」多様な形や長さのものが展開されており、「婦人の肩に甘く適合する様に特別に仕立て」、「其製品の新しい丈け、其丈け趣向を凝した後」があるという。三越呉服店の店員が「流行」の商品についてよく知っており、一番近いところにいる者として位置づけられている。さらにこの記事では各商品の価格も記されており、それが三越呉服店の商品であることは明らかだ。また『婦人世界』では他にも「伊勢丹呉服店員」（「流行」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・6）や「松屋呉服店員」による記事も散見される（「流行」『婦人世界』1906〔明治39〕・4・6）。



図5-5. 三越呉服店員による「流行案内」の記事

写真上は、米国で流行した形の「シホン製」の襟巻)

(「流行」『婦人世界』1906〔明治39〕・1・4：120-121)

ある記事では、「婦人の間で『流行』といへば」「衣服」や「身のまはりの装飾品」の流行を指す言葉となっていると書かれている（島幸子「流行の逆戻り」『婦人世界』1912〔大正1〕7・14）。まさに先の三越呉服店店員による記事のタイトル（「流行」）と内容がそれを示していよう⁸。そして、この記事の冒頭では「主なデパートメントストアに出入する多くの婦人連は、勿論貸家に住んでゐる人の娘でも、流行のミユウゼンヨオルぐらゐ頸に巻いてをります。結婚指輪のない奥様でも、お召縮緬のコオトぐらゐは着ております」と、社会的な階層に応じた流行の品を勧めている。さらに流行の品として、お召縮緬に飽きたという声に応えるために三越呉服店が織屋とともに製造したという「三越鶉縮緬」、または「チョツとも呉服屋の店に止まつてをらず、注文の口があちこちからあるので、皆その方へ廻つてしまう」という「天鷲絨の帯」、「縞」の模様、「黒の羽織」が紹介されている。この「縞模様」や「黒の羽織」は、かつて流行った「流行の後戻り」ではあるものの、同じ「縞」でも、以前のように軟らかで丸い線ではなく、直線のものが主流であり、また「黒の羽織」も「四、五年前に流行つた時のやうに……一寸に近い大紋のついたのでは、そのまま着るわけにはまゐりませぬ」というように、商品の希少性や、新しさが強調される（島幸子「流行の逆戻り」『婦人世界』1912〔大正1〕7・14）。

この後の流行案内の記事内容については、後の3項で記述するが、ビジュアル上の変化を先に示しておこう。昭和初期のものでは、巻頭の口絵部分において流行の衣服が紹介されている（図5-6・5-7）。それは、もはや流行案内の記事ではなく、現代のファッション誌のグラビアのような体裁となっている。

図5-6のキャプションには、「お馴染みの水谷八重子さんが春風に翻へす衣装の模様は、今春の流行を代表するオリーゴ模様です。生地はリオネーズで、美しい京染めです。此の模様は、遠目にもよく、動いている場合にも美しさを失はず、近代的服装の要件に相應しいもので新宿ほていや圖案部の考案。髪はマリールウキズ先生考案のハピヨンで同院主任石原操女子結上、着付けは同院千葉益子女史、帯は銀華結び、令嬢、若夫人向け、モデルは濱口芳枝さんです」（下線引用者、口絵「春にふさはしい粧」『婦人世界』

1927〔昭和2〕・22・4）とある。ここで注目すべき点は、この写真のモデルが「お馴染みの水谷八重子さん……」とあるように、「芸妓」ではなく、ある程度有名な『婦人世界』の読者であるということだ。

図5-7では、「^{（あわせ）}裕」は新味のローズ系統に春山に薄雲の雄大な景色を現はしたシャルムーズの訪問着、帯は藍瀬に櫻花を派手に現した令嬢向に相應しいもので新宿ほていや圖案部の考案。髪はマリールウキズ先生考案のハピヨンで同院主任石原操女子結上、着付けは同院千葉益子女史、帯は銀華結び、令嬢、若夫人向け、モデルは濱口芳枝さんです」（下線引用者、口絵「春にふさはしい粧」『婦人世界』1927〔昭和2〕・22・4）と記されている。衣服だけでなく結上、着付け、そしてモデルの名が記されるクレジットが付いているところも、現代のものとよく似ていよう。なお引用文に加えた下線部に関しては、後の3項で言及する。

⁸ 現代においても、多くの場合、「ファッション」は流行の衣服あるいは衣服そのものを指す言葉として使用されている。



図5-6. 口絵「春」

(『婦人世界』1927[昭和2]・22・4:4)



図5-7. 口絵「春にふさはしい粧」

(『婦人世界』1927[昭和2]・22・4)

5-3-2. 『婦人世界』における流行批判

『婦人世界』では、上記のように衣服の「流行」を積極的に取り上げる記事が多くみられたものの、しかし、やはり『婦人世界』でも、先の『女学世界』のように女性が流行現象に巻き込まれていくことを戒める類の記事が全く無かったというわけではない。

たとえば「現代婦人の贅澤調べ」(婦人記者『婦人世界』1912[大正1]・7・11)という記事では、以下のように流行現象を批判的に評している。

去年は如何にも人の目に立った模様やスタイルも、今年はもう人の刺撃^(ツツ)から遠ざかったものになつて、更に新しい模様、新しいスタイルができて来るといふ有様、斯うして流行が目まぐるしく變遷して、ケバケバしさを年年に加わつて行くのではないかと思います。(婦人記者「現代婦人の贅澤調べ」『婦人世界』1912[大正1]・7・11)

上記の「ケバケバしさ」というのは、おそらく先の2節で述べた「元禄模様」や「桃山式模様」などの派手好みの傾向を指しているであろう。さらにこの「ケバケバしさ」は、「人の眼を惹かうとする」ための「^(マツ)刺撃の強い」「色彩」であり、「ちょっと眼にふれて、これは奇麗だ、これは新しいと直ぐ感じさせる」ための「表面ばかりピカピカする服装」であるという。元禄模様や桃山式模様の「柄」は、確かに「表面ばかりピカピカする服装」だ。では、なぜこれが批判の対象となるのか。それはその服装が、かつての「表面にちょっと見えなくても、よくよく見れば底光のするやうな」、つまり禁令によってもたらされた近世的な工夫や着こなしと明らかに異なっているからだ。流行現象による生じた装いのコードの転倒については、前節で指摘した通りだが、この記事から確認されるのは、装いにおける「見る／見られる」方法の相違である。先に述べたように元禄模様や桃山式模様の流行は、単にそのヴァリエーションの一つに過ぎないが、それでも確かに一瞬にして人を惹きつけ得る刺激の強い派手な柄である必然性がそこにはあったのかもしれない。

この記事を書いた婦人記者は、一部の婦人においてみられる「贅沢さ」についても批判している。たとえば「日に何度牛乳で顔を洗ふとか、西洋風の風呂を当てて、風呂のなかには、高価な香料や美顔料などを入れて、一度きりその湯を捨ててしまふとか、また着物ならば肌着などは一度袖を通したものは二度と着ずに、召使のものにでも呉れてしまふとか、浴衣などは、洗濯したものは二度と着ずに何時も新しいものを着るとか」、そういう贅沢な行動のことである（婦人記者「現代婦人の贅澤調べ」『婦人世界』1912[大正1]・7・11）。むろん、このようなことができる者とは、やはりごく一部の上流の層に限られていると推測されるが、ただ、ここからは「使い捨て」の形をとる商品が登場していることともに以下のように購買行動のパターンの変化が示唆される。さらに購買行動に関しては、「安ものでもチョイチョイ買ふ」というのが、東京の人にみられる特徴だとも指摘されている（婦人記者「現代婦人の贅澤調べ」『婦人世界』1912[大正1]・7・13）。京都・大阪などの関西地方の人は、柄は良くなくとも、品質の良い、持ちのよいものを好むが、東京人は「(布)地の善悪は第二として、柄のよい、流行物を好む」という。「流行していること」を重視すれば、必然と「去年」に流行った柄の着物はまだ着られる状態であっても、（先の記事の「縞模様」や「黒の羽織」のように）「流行遅れ」となるため着られなくなっていく。この意味で「流行物」とは、確かに「不経済」で、過剰な「消費」行動である。

一方、女子教育家の棚橋絢子は、流行に囚われて「やれ今年の流行はどうの、昨年拵へた羽織はもう流行遅れになつてしまつて今年は着られない」という人に対して、「はたから見ると、まるで氣^{きちがい}狂のやうになつてゐる」と嘆いている（傍点引用元、棚橋絢子「藝者のやうな服装をする奥様」『婦人世界』1913[大正2]・8・7）。「藝者」を真似て派手にしていると「藝者上りではないだらうかと、痛くもない腹を探られる」ことにもなるため、着る人の「年齢」、「身分」、「人柄」との釣り合いを重視した装いを要請する。ここにおける「人柄」というのは、その人自身の肌の色や背の高さのことを指している（棚橋絢子「藝者のやうな服装をする奥様」『婦人世界』1913[大正2]・8・7）。先の『女学世界』の記事にも同様の記述がみられたように、このような批判が浮上するところにこそ、まさに流行物が重視されることによって人々の服装から「年齢」、「身分」、

「人柄」に応じた特徴が消失したことを物語っている。棚橋のように、かつて「年齢」や「身分」により装いが明確に定められていた時代を知る者にとっては、装い上の身分別の消失は、ある種の脅威であり、不安を駆り立てるものになっていたはずである。

それゆえに前節でみたように写真などを用いて華やかに流行案内の記事が演出されるさなかでも、やはり流行に対する批難も相変わらず続いており、1925[大正14]年の第20巻3号では、「現代流行に對する批判」という特集が組まれた。その特集のなかの「美しき生命の表現形態」という記事では、流行に囚われる人だけではなく、流行の商品を売り出す「大呉服屋」と商品の質が批判されている。衣服の流行は、女優や有名な貴婦人の服装から生まれることは稀で、たいていは「大呉服店と染色業者及其専属の図案家等によって案出」されるというが、その「大呉服店などの目的とする所は、あるものを流行せしめて、大量に生産し、生産費を安値く上げて利潤を多く得やうと云ふ事に」あり、「現在よりより美しいものを必ずしも提供するとは限らない（傍点引用元、厨川蝶子「美しき生命の表現形態」『婦人世界』1925[大正14]・20・3）。流行物として、ある商品が広く行き渡ることを可能にするためには、その商品が「大量生産」される必要があり、かつ生産費を抑えて利益を上げるためには、「所謂『米国の資本主義生産』のように「藝術的価値などを無視した俗悪な」商品とならざるを得ない。ゆえに流行品は、それに囚われている者に「奢侈」という「優越感」をもたらすものの、商品そのものは、高価であっても、その値にはそぐわない俗悪品であると批判されるのである（厨川蝶子「美しき生命の表現形態」『婦人世界』1925[大正14]・20・3）。この記事を書く者も、おそらく多くの商品の価格がその商品の質とほぼイコールであった時代を知っているに違いなく、だからこそ、商品の質と価格のズレが批判の対象となるのであろう。

ただし、流行に巻き込まれていく人たちにとって、商品の価値とは、まさに「流行しているモノ」というところにあり、その商品の質が価格に見合ったものであるかどうかは、さほど重要ではない。結局、手に入れた「流行モノ」が「流行遅れ」になれば、それを着ることはできなくなってしまうのだから。

では、なぜ「流行モノ」がこれほどにも一つの価値として浮上したのか。同特集の別の記事では、いつの間にか追ってしまうというところに「流行心理」の特徴を見出している。

いやしくも、一つの集団の中に、共に生きてゆかうとするには、隣人が考ふる如く己も考へねばならぬ。己が考ふる如く隣人も考へねばならぬ。この共通の心が成り立たなかったならば、社会的な生活は成立しない。……自己は隣人の如く隣人は自己の如く、考へ且つ行ふところに最も力強い共同が成り立つ。流行はかやうな共同の生活の中に、最も有力に働く現象である。

（長谷川如是閑「流行の強みと其危険性」『婦人世界』1925[大正14]・20・3）

流行とは、社会的共同生活の営みと深く関わっており、集団として共同の生活をするなかで社会的生活を成立させ、かつその集団における共同性を強固にする強い作用を備える現象なのだと説明される。「人は、もともと他人と異なることを以て自分を誇らうとする心持ち」があるため、流行を追うこととは「一種の輕薄才子、根底のない人間」のようにも

思われるのだが、それでいて、いつの間にか巻き込まれてしまっているというのである。その結果、たとえば着物の丈と同じくらい長い「書生羽織」が流行れば、「豪傑も小學生も一様にそれを着て、短い羽織を着るものは、市中を歩いていても断じて見当たらない」、というような状況になるのだという（長谷川如是閑「流行の強みと其危険性」『婦人世界』1925[大正14]・20・3）。

5 - 3 - 3 . 流行批判と流行案内の共振

一方で、先の「流行モノ」における商品の質と価格とのズレを指摘した「美しき生命の表現形態」という記事では、流行に巻き込まれる要因として、どのような着物が自分に似合うのかを判断することができないために「呉服店の番頭がすゝめる流行品」を求めてしまうのではないかと指摘されている（厨川蝶子「美しき生命の表現形態」『婦人世界』1925[大正14]・20・3）。そして自分に合った美しい装いをするために、外国の家にあるような「全身の姿を寫す大型の」姿見鏡を用いて、「自分で自分を」「手落ちなく観察」することを勧めるのである。ここでは、先の棚橋絢子の記事にあったような着る人の「年齢」、「身分」は捨象され、その代わりに棚橋のいう「人柄」に該当する「外形」が大きく取り上げられている。流行に巻き込まれないためには、自分自身の「外形」をよく知った上で、それに見合う着物を着ることが重要だと説かれるのである。

別の記事では、生活改善の観点から同様の指摘がなされている。「今までの筆笥の中に積み重ねて置いた着物の枚数への誇りと見栄」を放棄し、「通當着と着換へと外出着と禮服の一通りもあれば、それで十分で、ありませう」と主張する者も、洋服を着る際には「西洋人の體格と私達の體格とは余程相異して居るのでありますから、よく御自分の顔や容姿によく似つくものを選択させられたい」と忠告する（吉田小豊「衣服の流行を追ふ見栄と虚榮」『婦人世界』1927[昭和2]・22・1）。

流行品だから選ぶのではなく、自分自身の「外形」に合った衣服を選ぶこと。ここで指摘される流行批判の、興味深いことに実に半分は、以下のような流行案内の類と共振し始めるのである。

美しさは常にその調和を得られた時に最もよく、光るものであります。いくら流行だからと云つても誰にでも一様に、よく調和すると云ふ譯ではありません。西洋の婦人の最近の流行で、よく黄色いドレスを着ます。それが近頃日本へ入って来て、よく黄色い服を着て居られる若い婦人を見受けます。黄色は色として非常にいゝ色です。……然し顔の色を黒く見せますから西洋人にはいゝかも知れませんが、……よほど色の白い方か、でなければ、黄色いものを着るときには、常より襟おしろいを濃くつけねばなりません。

（下線引用者、矢部李「今流行の縞柄模様の選び方」『婦人世界』1925[大正15]・20・1）

此の程流行してゐる新しい唐棧縞とうざんしほ龍縞りゆうしほが誰でも間違いなく、美しく見せるかと申しますのにそうでありません。……そばで見ると、柄の一本一本が見えますから、非常に細か

く、それで居て、遠くから離れてみますと、何寸かの一柄々々が棒縞のようにあらく見えます。……それ故皆さんがお選びになる時は、必ず遠く離れて一度は見るやうにしなければなりません。……時として思つたより華美に見えますから。そうしてどつちかと申しますと、痩せた方より肥つた方にいゝやうです。もし痩せた人であつたら、この反對に比較的柄のはつきりしないものを選んだ方がよろしい。

(傍点引用元・下線引用者、矢部李「今流行の縞柄模様の選び方」『婦人世界』

1925[大正 15]・20・1)

資生堂意匠部の矢部李によって書かれた上記の記事は、いかにして流行品のなかから自分に合ったものを選び取るかについて事細かに説明されている。色合いや柄、シルエットなどを遠く離れてみるということは、先の流行批判の記事のなかで言及されていたような「姿見鏡」に映してみるということを指しているのであろう。そして「調和よく選ばれればそれは流行を超越する美しさ」を持ち、「反對に巧みに選ばれなければ、流行のものであつても、何ら光を放ちません」(矢部李「今流行の縞柄模様の選び方」『婦人世界』

1925[大正 15]・20・1)というように、いずれにせよ自分自身との「調和」が重要になるのである。この「調和」というのは、当然、先の「女学生スタイル」のような固有の「身分」と結びつくものではなく、外形や人柄という「その人らしさ」と密接に関わるものだ。

以上のように流行案内と流行現象を批判する記事は、双方とも「その人らしさ」を重視することに帰結するわけだが、こうしたことは他の記事内容にも影響を与えている。たとえば図5-8は、それぞれの背の高さにふさわしい帯の結び方や柄を紹介する記事である。だが、ここでは、流行モノであるかはさほど問題にはなっていない。「いくら丸型の結び目が流行でも」、背の高い人は丸味をつくらず、背の低い人は輪を短く丸みをもたせるといようにむしろ「その人らしさ」のほうが重要だと説かれるのである(口絵「背の高さに相應した帯の結び方」『婦人世界』1925[大正 15]・20・3)。この記事は、写真入りで巻頭の口絵部分に掲載されているのだが、この写真は読者にとっての等身大の鏡を代替するものになるのだろう。ここで提示されるイメージと自分自身の外形とを重ね合わせ、他者からどう見られるのかということを配慮しながら、外形と衣服との調和が徐々に学習されていくのだと考えられる。

むろん、こうした自分自身との「調和」を重視する語り方は、衣服だけに限らず、下記のように宝石などの装飾品に関する記事のなかにもみられるようになる。

若い人々の指輪としては、ダイヤに次いでエメラルド、ルビー、サファイヤなどの少し大きなものがよいでせう。未婚の令嬢方のもとしては、ダイヤはあまりに理智的に過ぎて感ぜられますから、それよりももつとやわらかい感じを^{あた}興えるエメラルド、ルビーのやうなものゝ方がいゝやうです。若奥様などではダイヤの他の指輪としてサファイヤの指輪又は眞珠などがそれ程理智的でなく、又それ程感傷的でなく淑やかな、奥ゆかしい感じをあたへるものとしてすゝめます。

(婦人記者「婦人装身具の研究」1925[大正 15]・20・1)

この記事は、未婚の令嬢には「エメラルド」や「ルビー」、若奥様に対しては「サファイヤ」や「真珠」を勧められており、それは確かに身分による区別ではある。だが、その根拠となるところは必ずしも明確ではなく、「若奥様」には、「感傷的でなく淑やかな、奥ゆかしい感じをあたへる」「サファイヤ」や「真珠」のイメージが与えられている（現在でもとりわけ若い人は「ルビー」、既婚者は「真珠」というイメージは絶対ではないにせよ、どこことなく保持されていよう）。先の1項で取り上げたグラビアに付されたキャプションの下線部も、実にそれをよく示しているのである。



図5-8. 「背の高さに相應した帯の結び方」

(口絵「背の高さに相應した帯の結び方」『婦人世界』1925[大正15]・20・3)

髪型(図5-9)や化粧に関する記事でも、当然、「調和」を重視する語られ方がなされている。「個性を生かす美容の研究」という記事は、「個性をハッキリとだしたお化粧法」について伝授し、「純白のおしろひを用ひたら只白くなるばかりで、日本人としての

持味をぬりつぶして」しまうため、自分自身の「肌と顔色」によって化粧料を選ぶように勧めている（早見君子「個性を生かす美容の研究」『婦人世界』1931〔昭和6〕・26・1）。ここにおける「個性」というのは、その人自身の肌の色や身長、体型などといった「外見」上の特性と深く関わっている。かくして一つひとつのアイテムは、使用価値は二次的なものとなり、個々の人と「調和」する「個性的な」モノとして位置づけられ選びだされていくのである。

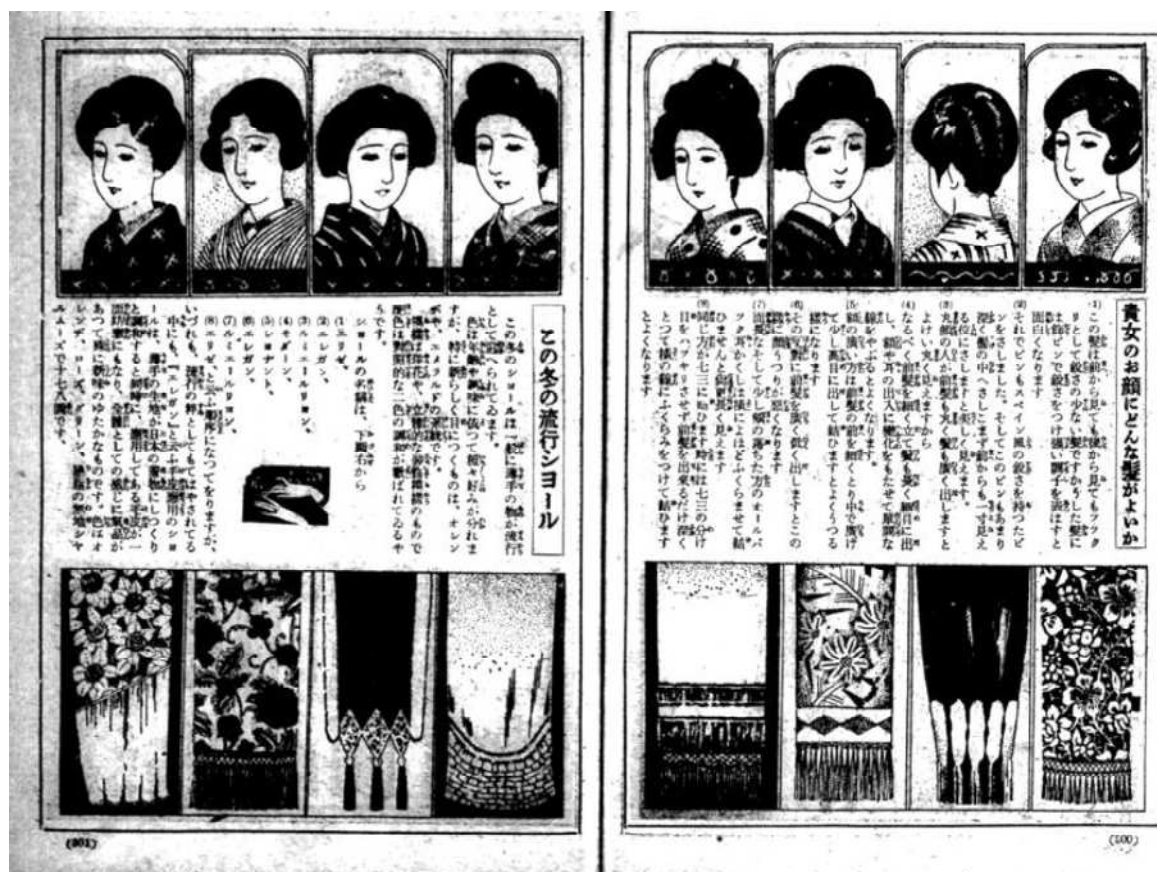


図5-9. 「流行のページ 貴方のお顔にどんな髪がよいか」

（『婦人世界』1927〔昭和2〕・2・1：300-301）

5-5. おわりに

本章では、『女学世界』と『婦人世界』における衣服の流行の記述のされ方の違いを比較してきた。まず『女学世界』で取り上げられた流行現象からは、「女学生スタイル」が「女学生」以外の者にまで伝播していく様相と、広告のイメージとして起用された「芸妓の装い」が模倣され広がっていくさまが確認された。これらの流行は、確かに衣服におけるコードの流動性を示すものであり、「モダンガール」のような「洋装化」とはまた異なる形の「衣服の近代化」だといえる。もちろん、この『女学世界』のなかで記述された衣服の流行現象は、規模的にはおそらく「モダンガール」と比べるとかなり小さなもので

あると推測される。しかし、ここにおける衣服は、使用価値だけでなく、まさに意図的に作り出された「新しさ」という価値によって消費され、それ以前にあった衣服のコードを塗り替えていった。この流行現象では、すでに「消費」が意味を創出する行為となっており、近世のそれと明らかに異なる資本主義的な消費文化、貨幣とモノとの間の奇妙な関係がすでに成立しつつあったことが示されるのである。

ただ、本論で論じてきたように、商品における「新しさ」という価値は、それまで密着していた個人・社会的属性と外見や身なりを切り離していった。だから、『女学世界』のなかで流行を批判する者の多くは、市中で目にする得体の知れぬ女性に対する戸惑いと不安に駆られ、装いに対する規制を強化することを試みたのである。ここからその外見や身なりによってその属性を把握することができず、混乱を生じさせたという程度には、それを取り巻く都市という空間は、無数の他者との距離を縮めつつも、匿名性を担保していたということになるのだろう。服制解除の後にみられたこのような身分に応じた服装の規制も、4章で指摘したように、いわば「女学生」向けの雑誌特有の「女学的な作法」であるのだろう。

一方、『婦人世界』では、三越呉服店の店員などによる流行案内とともに写真を駆使し華やかに演出された誌面によって積極的に衣服の流行現象が取り上げられていたものの、やはり流行現象に対する批判が誌面のなかに混在し、消失しつつあった年齢や身分に応じた装いが要請されていた。ただし、『婦人世界』におけるこの流行案内と流行批判は、それぞれが別の主張を行っているようでいて、いずれも衣服と自分自身の人柄や外形との調和を重視するという語られ方に収束し、両者はいつの間にか共振していた。

ジンメル(1911=1994)は、流行の衣服を身にまとうことの重要な役割について次のように指摘している。個人は、ある集団の「模倣」を通じて、自らの行為を自分で支えるという困難から解放され、安らぎを与えられる一方で、その模倣のなかでわずかな違いを演出することで、差異化の欲求をも満たすことができる(Simmel 1991=1994: 32-34)。流行は、この二つの対立する傾向の両方の充足をもたらすのである。さらに職業的地位を自然に獲得する男性と比べて、とりわけ女性において流行に対する強いこだわりがみられるのは、それが職業的な地位の代替物となり、衣服という比較的安全な領域で、個性化の衝動が発揮されるからだという(Simmel 1908=1999)。よく知られているように日本社会における「洋装化」は、女性よりも男性の間で早く浸透したが、それも、たとえば「スーツ」のように男性の洋装が職業と強い結び付きをみせていたからであろう。それに比べると、女性の装いにおいては、「個性化」の自由があったと捉えることができ、女性には流行現象における「均等化」と「差異化」という運動を稼働させる条件が十分にそろっていたといえよう。

他方で、『婦人世界』では、流行案内と流行批判という、同時期の誌面にみられた矛盾する記述は、装いのコードにおいて近世を知る者と知らぬ者、あるいは新たな運動を知る者と知らぬ者との間にみられるせめぎあいを明確に指し示している。こうしたことは、衣服が個人・社会的属性から切り離されつつあったこの時期特有のものであると考えられる。その後、この流行がより大きな運動となっていくとき、これらの配分は、圧倒的な量でも

って流行案内のほうが中心を占めていくに違いないのだけれど⁹、当時のこのせめぎあいこそが、その過程に位置づく重要な転換であったということに十分な注意を払っておく必要がある。

この衣服の流行とく女性美との関係では、そのまなざしが、「顔」だけでなく、衣服を通して「外見」と呼び得るところまで広がりをもせたといえる。昭和初期の『婦人世界』では、それがその人らしさと結び付く「個性」という言葉によって表現され、衣服だけでなく、装飾品や髪型、化粧法に至るまで「個性」が求められるようになっていた。すでにそこには流行品のなかから、自分自身と調和する商品を選びだすという購買行動そのものの、あるいは自分自身のイメージを膨らませ、演出するという楽しみが確かにあったようである。

ただし、それを現代的な「個性」と混同してはならない。北山晴一(1999)によれば、身分制社会が解体し、服装の自由が確立されると、服装などの身体表現を通じてアイデンティティを具体化していく意識が浮上するという。本章で照準してきた明治半ばから昭和初期にみられた流行現象に対して、こうした見方を当てはめて解釈することは、やや性急すぎるかもしれない。とはいえ、4章でみたように男性的なまなざしのなかに包括されていたく美とのあり方とは別に、「個性」という言葉によって女性自らの側へと引き寄せるようなそうした振る舞いがあったことは確かであろう。

⁹ 北田([2000]2008)によれば、『主婦之友』の冒頭の口絵部分でも1920年代後半から趣を変え、呉服店・百貨店による衣装、新作映画、展示会の紹介など多彩な内容と娯楽的な要素を提供し、あるいは広告も組み込みつつ、この「視覚欄」の誌面に占める位置価値は比重を増し、頁数も誌面全体の三分の一近くを占めるに至るという(北田 [2000]2008: 152)。

終章

本論は、「近代」と呼ばれる時期のなかでも、1880年から1930年までに焦点を当て、く女性美」と諸要素間の影響関係について、歴史社会学、とりわけ言説分析的手法を用いて接近することを試みてきた。序章でも述べたように、現在におけるく女性美」という意味的まとまりは、これまで歴史貫通的なものとして自明視される傾向にあった。本論では、近代においてそれがどのように成立したのかを明らかにするために、多様な言説を扱いながら制度や装置としてのく女性美」の歴史的な諸条件について考察したのである。

終章では、まず各章で明らかになった点について、提示しておきたい。

本論文の要約

第1章『東京百美人』という経験——19世紀末における『美人写真』と『芸妓』では、女性の写真を「見る」という経験の時代的文脈を扱った。本章で着目した芸妓100名の写真が展示された「東京百美人」展とは、1891[明治24]年に浅草の凌雲閣で開催されたもので、「美人」に対するある種の見方が成立する重要な契機であった。むろん「美人」という言葉そのものの歴史は古いものの、より現代に近似する「美人」の見方が、およそこの百美人展以降に成立したと考えることができる。百美人展の被写体が芸妓であったことは、もともと芸妓が容姿を高く評価される職業であり、かつ「美人」であったためだという風にこれまで解釈がなされてきた。しかし、このような解釈は、現代的な女性とく美しさ」、あるいはそれと写真との関係性を自明視したところから発生する（現代において、マスメディアのなかで映像化される女性は、多くの場合く美しさ」を備えている）。そうではなく、かつて芸妓評判記に記述されていたような花柳界という疑似親密空間のなかで生産・消費される多様かつ包括的な評価がそぎ落とされ、写真というメディアによってイメージとして切り取られたとき、（一部の）芸妓の容姿のみを高く評価することが、はじめて可能になったのである。そして芸妓を被写体とする写真が「美人写真」としてカテゴライズされ、それが広く出回ることによって、芸妓のイメージが「美人」と結び付けられていったと捉えることができよう。この「美人」とは、「芸妓」に限定されており、そのなかには、まだ芸妓以外の女性が含まれていなかったということも強調しておかねばならない。芸妓以外の女性が「美人写真」のなかに加わるためには、芸妓屋や源氏名とは異なる情報が別の形で付与される必要があった（この点については、第4章で考察した）。

この百美人展が開催されたのは、花柳界といういわばウラの世界に属す女性を「覗き見」し、彼女たちのイメージを所有したいという欲望が働いていたからだ、それを可能にしたのが写真という形態であった。そこに写し出された芸妓の姿は、本来芸妓を取り巻いていたはずの様々な文脈から切り離された、芸妓の表象＝再現であり、投票のために誰かを選ぶ際の基準は、芸妓という存在をただ、美しい「見た目」の女性として収斂させるスペクタクルの論理に基づいていた。さらにこの「美人写真」は、遊女などの「美人」を描いた近世の浮世絵における「美人」との意味的差異として成立している。すなわち、江戸期の浮世絵に描かれた「美人」は、豪華な装いや「蛇状」の身のこなしの全体に、そして

「場」によって表現される「風情」を表しており、顔それ自体は非個性的で、記号的なものですらあった。ところが百美人展では、統制された写真の構図が示す「美しい」「顔」に、関心が中枢化している。「美人写真」は、自律した「美しい外貌（顔）」というものを可視化させるきっかけを与えたのであり、そこからむしろ外貌に「内面」を読み取ろうとする試みと（ここで外側から読み取れない「内面性」が浮上した）、「美しい外貌の形態」そのもの、つまり「美人」の標準と偏差を言語化する試みという二つの様式を出現させた。ここから、後の第4章で論じる「美人論」の系譜とでもいべきものが展開していくことになった。

第2章「衛生学におけるく皮膚くへのまなざし」では、近世より続く日本社会における肌の「色の白さ」の価値とその変容に着目した。明治期において、西洋の科学的な価値観・考え方の影響が顕著に表れている領域の一つが衛生学であり、それに関連する身体的振る舞いや作法、身体に対するまなざしも大きく変わったといわれている。先の1章では、美人写真をきっかけにして「美人」を語る複数的な営みが出現したことを指摘したが、それらは主に「芸妓」という身分・職業の女性を取り巻く出来事であり、それ以外の女性は排除されていた。だが、本章で扱う衛生学という領域では、芸妓以外の、とりわけ「女学生」に向けてく美しさくについて語られ始めたという特徴がある。

江戸後期に出版された『都風俗化粧伝』にみられたように、「色の白さ」は、「化粧」あるいは「徳容」のなかに包摂されていたが、西洋の衛生学的知の流入によって、その知覚に決定的な変換がもたらされく皮膚くは分節化された。1900年前後の衛生思想の普及過程において一般の家庭向けの通俗的な衛生書では、く皮膚くの衛生が重視されたが、日露戦争を境に、それが美容法へと少しずつ移行していった。く皮膚くの衛生法が示す「美しい皮膚」では、「色の白さ」は必ずしも重視されておらず、有害な白色薬や白粉の使用を禁じ、その代わり「外面」に影響を与える健康な身体と気高く優美な「精神」を保つよう要請した。だが、く皮膚くの衛生法が女性向けの雑誌『女学世界』のなかで語られ始めると、衛生学的な「美しい皮膚」の見方に対し、読者は異議を申し立てたのである。そこでは確かに、女性たちの間に（衛生学が提示するものとは異なる）く美くに対する自意識が立ち上がっている。ここにおけるく美くとは、獲得するのが困難なものであると同時に、それでも化粧品などの商品を通じて獲得できると信じられていた。く美しさくそのものの価値の高まりとともに、く皮膚くは資本と化し、たとえば3章で着目する化粧品広告のように、おびただしい言葉が費やされ、言説は厚みを帯びていくのである。と同時に、「美顔術」のように衛生学・科学的知がく美しさくを体現する方法のなかへと組み込まれ、商品化されていった。一見すると「色の白さ」に伴う価値は、近世から継続しているようにみえるのだが、衛生学の知を経由したことで美容法、化粧法ともに、生身のく肌くへの志向が強まり、近世的な「化粧」からは確実に遠ざかっている。

第3章「化粧品広告からみる『女学世界』の変容」では、『女学世界』という「女学生」年代向けの雑誌メディアに着目した。同誌が発行されていた1901(明治34)年から1925(大正14)年6月までの化粧品広告に目を向けながら、雑誌そのものの変容を描いた。とりわけ注目すべきは、化粧品の広告において、明治後期に誌面の記事を装う形の「記事

風広告」が登場したことである。記事風広告は、誌面の読者投稿欄を真似て、消費者としての読者を主役に据えるストーリーを展開した。このようにして化粧品広告は、投稿文に綴られたく美に対する欲望を積極的に掬いあげながら『女学世界』の主な読者である「女学生」たちの生活へうまく滑りこんでいったのである。後の『主婦之友』などでよくみられた記事風広告の形式が、『女学世界』において比較的早い時期にみられたのは、同誌がたとえ編集側の方針とそぐわない内容であったとしても、読者の投稿文や手記を誌面で積極的に取り上げていたからだと思われる。

こうして、それまで啓蒙的な立場の者によって否定され、誌面に不在とされたく外貌の美が広告のなかで自律化したのである（第1章の美人写真のように）。と同時に、『女学世界』の記事は、記事風広告が出現したことによって、婦人記者や美容業従事者によってく外貌の美のための化粧法のハウツーが掲載され始めるなど、広告性を増し、誌面構成にも影響を与えた。つまり化粧品の記事風広告は、誌面にも侵食し、同誌を貫いていた女学的作法に代表される啓蒙の論理が、徐々に資本の論理に組み込まれつつあったのである。他方で化粧品とよく似た美容薬があったことも指摘したが、諸々の法律上の制約があったにせよ、この記事風広告の形式こそが、美容薬と比して化粧品がく女性美を構成する商品として優越していくきっかけを与えたといえる。

ただし、『女学世界』は、資本の論理に侵食されながらも、結局のところ、それが誌面の全面を覆うところまでには至らなかったのだが、この資本に媒介されたく美しさへの欲望と啓蒙主義的な女学的作法とのせめぎ合いこそが明治期から大正期にかけて出版された女性向けの雑誌の特徴である。

第4章「資本としてのく女性美」では、1章で焦点化した「美人」という言葉に再び立ち返ることとなった。芸妓の美人写真を契機とする「美しい顔の可視化」は、女性の外面と内面の循環とでもいうべき運動を作動させ、多様な「美人論」が展開された。4章では、それらを『女学世界』（1901[明治34]年創刊、博文館）と『婦人世界』（1906[明治39]年創刊、実業之日本社）の記述に着目しながら、その変容を辿ることを試みた。まず『女学世界』では、「美人」と「醜婦」を「顔」ではなく、それぞれの内面、それも良妻賢母としての規範である「徳」を備えているか否かによって線引きするという「美人罪惡論」が展開された。一方、女徳などを備えた者こそが「眞の美人」とであるとする言い方がなされ、同誌の「表情論」でも「精神」や「心」が筋肉へ作用し、外側へ表出すると考えられていた。このような美人罪惡論や表情論として展開された『女学世界』における「美人論」は、自律した形におけるく外面の美を否定し、それよりもく内面の美を強調することで成立していた。外面ではなく、く内面の美を優先させるという論理は、良妻賢母思想に基づく女子教育を推進する雑誌メディアにおける、いわば「女学的作法」であった。逆にそうせざるを得ないほどに、「美人」という言葉が、「芸妓」めいた「外貌」、あるいは「芸妓」という身分・職業の女性そのものを指し示すものであったことがわかる。つまり、この時点における「美人」とは、く女性美をめぐる現代的な語り方が全面的に依拠しているような厚みは、まだ獲得していないのである。

一方、『女学世界』とほぼ同時期に刊行されていた『婦人世界』では、「美人」＝「芸

妓」とする見方や、「美人」を罪惡視する見方もみられない。『婦人世界』では、「内面／外面」という明らかな対立項も曖昧である。芸妓以外にも多様な女性が「美人」として位置づけられており、おおよそ現代の「美人」にごく近い意味で使用されている。また配偶者選択の基準やセクシュアルな魅力としてのく美について言及されており、『婦人世界』の「美人論」では、く外面の美を論じるものへと変貌を遂げている。こうした違いは、『婦人世界』のタイトルにある「婦人」という言葉に込められたものが、年齢、学歴、階層を超えた包括的な「女性」であり、『女学世界』の読者層よりも広く設定されている（啓蒙の対象である「女学生」以外の読者も多く含んでいる）こととも深く関わっている。この二誌におけるズレから読み取れるのは、先の『女学世界』の女学的作法に基づく「美人（罪惡）論」が、成立しつつあった資本としてのく美をいけば「見ないふりをする」論理であったということだ。

一方、『婦人世界』に掲載された「見合い写真」は、同誌の「美人論」と同種のものであった。見合い写真に対するまなざしは、女性の釣り書きとく外面の美のみにそそがれるが、女性にとってはそれがそのままその後の人生や運命を切り開く資源となる。これらの写真が雑誌メディア等を通じて不特定多数の者へとさらされるという営みは、地縁・血縁から切り離された女性たちのイメージが時空を超えて流通するという点において芸妓の「美人写真」（第1章）と共通している。またこうしたく美へのまなざしが、画一的なものではなく多様性を有していたからこそ、女性が配偶者として選ばれる可能性も偶発性に委ねられていく。「見られる存在」、「選ばれる存在」として、女性たちが自分自身のく外面の美と格闘し始めたことを、誌上の「見合い写真」は伝えているのである。ただ、やはり「見合い写真」をまなざすのは、主に男性であり、同時期の誌面で語られた多様なく女性美は、男性の視点によってカテゴライズされたものにほかならない。ここでは、女性たちの「内面」に対する関心もかなり薄く、く外面の美の受容をめぐる明らかなジェンダー的非対称性を確認し得る。ただし、それも事態の半面でしかないことが次の5章を通じて明らかとなった。

第5章「衣服の流行の語られ方」では、先の4章と同様に『女学世界』と『婦人世界』における衣服の流行の記述のされ方の違いを比較した。ここで、衣服を通しての「外見」が、再び「内面」に近似するものとの結び付きをみせたのである。

まず『女学世界』に記述された流行では、「女学生スタイル」と「芸妓の装い」が模倣され広がっていくさまが確認された。衣服におけるコードの流動化によって生じたこれらの流行は、「和装」の流行であるとはいえ、大正末期以降の「モダンガール」のような「洋装化」に先行する「衣服の近代化」の様相を呈している。ただ、個人・社会的属性と装いの切断を招いた流行は、それに対する批判を招き、身分に応じた服装の規制が強化されていった。こうした規制も、やはり女学的な作法のうちにある。

一方、『婦人世界』では、三越呉服店の店員などによる流行案内の記事のように積極的に衣服の流行現象が取り上げられていた。しかし誌面には流行に対する批判も混在しており、こうした記事ではやはり消失しつつあった属性に応じた装いを要請する。同一の雑誌において流行への随順と批判が並存していたのは、装いのコードにおいて近世を知る者と知らぬ者、あるいは新たな運動を知る者と知らぬ者との間のせめぎ合いを示しており、衣

服が属性から切り離されつつあったこの時期特有のものである。

ただし『婦人世界』におけるこの流行案内と流行批判は、それぞれが別の主張を行っているようでいて、両者はいつの間にか共振している。いずれも衣服と自分自身の人柄や外形との調和の重要性が主張され、流行現象における「均等化」と「差異化」という運動を稼働させるきっかけを与えたのである。昭和初期になると、それが「その人らしさ」と結び付く「個性」という言葉によって表現され、衣服だけでなく、装飾品や髪型、化粧法に至るまで「個性」を通して語られるようになっていく。そこには流行品のなかから、自分自身と調和する商品を選びだすという購買行動そのものにおける、あるいは自分自身のイメージを膨らませ、演出するという楽しみが確かに生じている。4章でみたように男性的なまなざしのなかに包括されていたく女性美のあり方とは別に、「個性」という言葉によって自分自身の側へと引き寄せるようなそういう振る舞いがここにはあったのである。

以上のように、配偶者選択の基準、あるいはセクシュアルな魅力としてのく女性美、そして衣服などにおける「個性」がく女性美へと接続し始めたところまでを本論は見届けてきた。これらが現代のく女性美と重なっているとまではいえないけれど、かなりの程度、現代的なく女性美に近似するしくみがここに成立していたといえよう。

「内面」と「外面」をめぐるく女性美の位相

本論が照準してきた近代におけるく女性美を制度として成立せしめる諸条件について、別の角度からみてみたい。

それは大まかにいって、自律化した「外面」の出現とともに、何らかの形で「内面」が付随したり、外されたりという流れのなかに捉えることができる。ただし、このようにみえるのはあくまで現在の地平からなのであり、19世紀末のある時点までは、「外面」と「内面」は明確に分節化されたものではなかった。近世において浮世絵に描かれた遊女の「美人」とは、場に応じたしぐさや衣服という「風情」を表現するものであったように（第1章）、あるいは『都風俗化粧伝』（佐山＝高橋 [1813] 1982）における「徳容」が「化粧容儀」と正しい「徳」（心）の一体として存在していたように（第2章）、これらは「外面」と「内面」のいずれにも位置づけられるものではない。

しかし、1章で取り上げた芸妓らの美人写真は、ただ「外面」というものを自律した形で切り取ってみせた。「外面」が分節化されたのは、写真という新たな技術によって、とまではいわないけれど、いささか大げさにいえば、それをきっかけにして「外面」は自律化していった。さらに、「外面」からは容易に知ることのできない「内面」が発見されたことによって、「外面」を通して注視され始めたといえるのではないだろうか。「内面」への注視は、先の『女学世界』の「美人罪惡論」のように、「外面」について沈黙したり、あるいは「外面」を語るときも常に「内面」を呼び起こしてしまうような、そういう振る舞い（女学的作法）のなかにも確認された。

ただし、『婦人世界』では、その語られ方に相違がみられたように、「外面」と「内面」の位置づけや、あるいはその優劣は、語られる場や人によって容易に変更され得るもので

あった。この違いは、確かにそれぞれの雑誌の読者層の違いなどに起因しているのだろうが、むしろそれが可能であったのは「内面」と「外面」との関係が、ある種の「浅さ」をもって転態していたからだ。

たとえばヨーロッパにおいては、初期近代以降、観相学的実践を経てもなお、人格と外面を深く結びつける思考の系譜がみられた（遠藤 2016）。しかし、日本社会では、19世紀末に至るまで、そもそも「内面」あるいは「外面」というものを明確に分節化する思考がかなり希薄であった。そうであるからこそ、「美人写真」によって切り取られ、自律化したく外面の美の衝撃は、日本独自のものであり、そこから始まる「美人（罪惡）論」は、当初「外面」よりも「内面」を問題にせざるを得なかったのである。

また現代では、く外面の美とく内面の美が錯綜する事態が全くみられなくなったかというところではない。序章の冒頭で述べたように、く女性美の現代的な風景においては、様々なく美のあり方とともにそれに密着するパーツ化された身体へのまなざしというものが社会のなかで自明のものとして分散している。実は、これらの多くが表層的な「外面」の要素でありながら、どこか自分自身と深く関わっているような「内面」に属すものでもある（たとえば「美容整形」手術のために用いられる動機の語彙などにおいて）。つまりは、現代的なく女性美も、「外面」あるいは「内面」のいずれかのみに属しているとはいいがたく、本論が対象とした1880年から1930年までと同じ程度に、ごく簡単に転態するほど「浅い」のである。こうした点から、現代的なく女性美のある側面は、近代と明確に切断されているようにみえながらも、近代から続く「浅さ」を伴う「外面」と「内面」の循環運動の先に位置づけることができる。

今後の課題

身分や職業によって女性をカテゴリー化して把握する場合、本論で詳述してきたのは、「芸妓」、「女学生」、「婦人」（『婦人世界』の読者）であった。いいかえると、各章で論じたく女性美と関連する諸要素は、それが語られる領域と女性たちの属性によって区分されていたのである。ただ、明治・大正期は、「モダンガール」や、小学校教師や電話交換手などの多様な職種の「職業婦人」（村上 1983）、『青鞥』や『婦人公論』といった教養派の読者層である上流・知識人階級の女性、そして雑誌『主婦之友』が読者層として想定した都市・新中間層におけるサラリーマン家庭の「主婦」（木村 2010）というカテゴリーが浮上した時期でもある。本論では、これらの女性カテゴリーとく女性美との関係について詳述することができなかったが、多様なカテゴリーに目を向けることにより、明治・大正期のく女性美をめぐる言説空間は完成に近づくものと想定される。ただし、とくに明治・大正期では、本論が焦点を当てたように「芸妓」という身分・職業の女性と、それ以外の女性との関係のなかでく女性美が位置づけられていたことは確かであり、この二項対立図式のなかに上記の他の女性カテゴリーも包摂される可能性がおおいに考えられる。別途検討することにした。

そして本論が明らかにした近代におけるく女性美の様相は、現代のそれとかなりの近さを見出すことができるものであるが、それでも、やはり現代との明らかな違いもある。

1930年までを本論は対象としてきたが、近代の〈女性美〉における諸事象が、戦後、そして現代へといかに接続されていくのかを検討することは、今後の大きな課題として設定される。その際、本論では、大きく取り扱わなかったモダンガールの「洋装化」は、確かに戦後以降に連なる重要な現象である。時間の都合上、詳述することがかなわなかったが『婦人世界』の誌面では、大正末期以降、「美容整形」や「美容体操」など、「顔」だけでなく「肉体」への関心が明らかに強くなっていた。それも洋装化を準備する（もちろんそれだけに限らないが）「現代性」の位相における興味深い論点として位置づけられよう。

また取り扱う資料の情報様式に関しても課題は残る。本論第4章・5章では、『女学世界』と『婦人世界』を取り上げたが、それらは当然、現代的な「ファッション雑誌」の類と同等に位置づけることはできない。女性向けの雑誌が、ファッションに関する記事やグラビアがその誌面の大半を占める「ファッション雑誌」へと変化をみせるのは、戦後の、とりわけ1970年以降のことだといわれている。これらがいかにしてその結び付きを強めていったのかを明らかにすることも重要な課題であろう。そもそも現代の若年女性向けの雑誌の大半がファッション雑誌を占めているということも、考えてみれば不思議な事態である。こうした事態は、現代的なく女性美が、一見すると「外面」的な要素に集約されているようにみえる要因であるのかもしれない。

以上を課題として、本論を結ぶことにしたい。

引用・参考文献

- 足立真理子, 2010, 「奢侈と資本とモダンガール——資生堂と香料石鹸」伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・E・バーロウ編『モダンガールと植民地的近代』岩波書店.
- 我妻直美, 2015, 「浮世絵と写真」岡塚章子・我妻直美編『浮世絵から写真へ——視覚の文明開化』青幻舎:162-167.
- 赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
- , 2006, 『構築主義を再構築する』勁草書房.
- 青柳有美, 1913, 『性慾哲学』不二出版.
- 浅野千恵, 「潜在的商品としての身体と摂食障害」江原由美子編『性の商品化』勁草書房.
- 浅野智彦, 『「若者」とは誰か——アイデンティティの 30 年』河出書房.
- 浅岡邦雄, 2002, 「明治博文館の主要雑誌発行部数」国文学研究資料館・松野陽一編『明治の出版文化』臨川書店 141-177.
- 安保則夫, 1989, 『ミナト神戸——コレラ・ペスト・スラム』学芸出版社.
- Anderson, B., 1983, *Imagined communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (=1987, 白石隆・白石さや訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』リブポート→2007, 白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山)
- 有本芳水, 1969, 「明治時代の文芸雑誌」明治文化研究会編集・木村毅編集代表者『明治文化研究 第四集』日本評論社:165-189.
- 馬場信彦・池田太臣編, 2012, 『「女子」の時代!』青弓社.
- Barbara, D., 1987, *Geschichte unter der Haut : Ein Eisenacher Arzt und seine Patientinnen um 1730*, Stuttgart (Klett-Cotta). (=1994→2001, 井上茂子訳『女の皮膚の下 : 18 世紀のある医師とその患者たち』藤原書店)
- Barthes, R., 1961, “Le message photographique”, *Communication* no.1, (=1980, 「写真のメッセージ」蓮實重彦・杉本紀子訳『映像の修辞学』朝日出版社)
- , 1964, “Rhétorique de l’image”, *Communication* no.4, (=1980, 「イメージの修辞学」蓮實重彦・杉本紀子訳『映像の修辞学』朝日出版社)
- , 1967, *Système de La Mode*, Éditions du Seuil. (=1972, 佐藤信夫訳『モードの体系』みすず書房.)
- , 1975, “La troisième sens”, *Communication*. (=1984, 沢崎浩平訳『第三の意味——映像と演劇と音楽と』みすず書房)
- , 1980, *La Chambre Claire : Note sur la photographie*, Gallimard. (=1985, 花輪光訳『明るい部屋——写真についての覚書』みすず書房)
- Bauman, Z., 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press. (=2001 森田典正訳『リキッド・モダニティ』大月書店)
- , 2004, *Identity*, Polity Press. (=2007 伊藤茂訳『アイデンティティ』日本経済評論社)
- Baudrillard, J., 1970, *La Société de Consommation Ses Muthes, Ses Structures*, Édition Planète. (=1979→1995→2015 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店)
- , 1976, *L’Échange Symbolique et La Mort*, Editoins Gallimard. (=1992, 今村仁司・塚原

- 史訳『象徴交換と死』筑摩書房)
- Benjamin, W., [1931] 1977, “Kleine Geschichte der Photographie”, *Gesammelte Schriften II・I*, Suhrkamp. (=1998→2013, 久保田司編訳『図説 写真小史』筑摩書房)
- , [1936] 1977, *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*, Suhrkamp. (=1995, 久保田司訳「複製芸術時代の芸術作品」浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』筑摩書房)
- , 1974, “Über den Begriff der Geschichte”, *Gesammelte Schriften*, I-2, Suhrkamp. (=1995, 久保田司訳「歴史の概念について」浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』筑摩書房)
- Benthien, C., 1999, *Haut. Literaturgeschichte-Körperbilder-Grenzdiskurse*, Rowohlt. (=2014, 田邊玲子訳『皮膚——文学史・身体イメージ・協会のディスコース』法政大学出版局)
- Bordo, S., 1997, *Twilight Zones: The Hidden Life of Cultural Image from Plato to O.J.*, University of California Press.
- Bourdieu, P. et al., 1965, *Un art moyen : essai sur les usage sociaux de la photographie*, Minuit. (=1990, 山縣熙・山縣直子訳『写真論——その社会的効用』法制大学出版局)
- 大日本私立婦人衛生会, 1990, 『婦人衛生會雑誌(婦人衛生雑誌)』(復刻版)大空社.
- Davis, K., 1995, *Reshaping the Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery*, Routledge.
- Debord, G., [1971]1992, *La société*, Gallimard. (=1993, 木下誠訳『スペクタクルの社会——情報資本主義批判』平凡社)
- 衛生新報社編輯局編・田中友治監修, 1906, 『實用問答 皮膚病編』丸山舎書籍部.
- , 1907, 『實用問答 男女美容篇』丸山舎書籍部.
- 江馬務, 1976, 『服装の歴史』中央公論社.
- , 1988, 『装身と化粧 江馬務著作集第4巻』中央公論社.
- Elaine, S. A., 1990, *When Ladies Go A-Thieving: Middle-Class Shoplifters in the Victorian Department Store*, Oxford University Press. (=1992, 椎名実智・吉田俊実『淑女が盗みに走るとき——ヴィクトリア朝期アメリカのデパートと中流階級の万引き犯』国文社)
- 遠藤知己, 1996, 「顔」の上に書く——デュシエンヌ・ド・ブローニュの電気生理学」『思想』岩波書店 861:84-107.
- , 1998, 「顔の写真／写真の顔——〈無表情〉の系譜」『情報社会の文化2 イメージのなかの社会』東京大学出版会:147-182.
- , 2000a, 「現代社会はいかにして近代であるのか？」大澤真幸編『社会学の知 33』新書館.
- , 2000b, 「言説の経験的起源(上)」『思想』岩波書店 912:53-72.
- , 2000c, 「言説の経験的起源(下)」『思想』岩波書店 913:135-160.
- , 2006, 「言説分析とその困難(改訂版)」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から シリーズ 社会学のアクチュアリティ:批判と創造5』:27-58(初出:2000, 「言説分析とその困難」『理論と方法』数理社会学会 27:49-60).
- , 2010a, 「フラット・カルチャーを考える」遠藤知己編『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』せりか書房:8-49.
- , 2010b, 「観相学と近代社会——ラファターからバルザックへ」『日本女子大学総合研究

- 所紀要』日本女子大学 13:271-292.
- , 2016, 『情念・感情・顔——「コミュニケーション」のメタヒストリー』以文社.
- Entwistle, J., 2000, *The Fashioned Body*, Cambridge. (=2005, 鈴木信雄監訳『ファッションと身体』日本経済評論社)
- Foster, H ed., 1988, *Vision and Visuality*, Dis Art Fondation. (=2000, 樽沼範久訳『視覚論』平凡社)
- Foucault, M., 1963, *Naissance de la Clinique : Une archeology du regard medical*, Press Universitaires de France. (=1969→2011 神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』みすず書房)
- , 1966, *Les mots et choses: une archeology des sciences humaines*, Éditions Gallimard. (=1974, 渡邊一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社)
- , 1969, *L'archéologie du savoir*, Gallimard. (=1970→1981, 中村雄二郎訳『知の考古学(改訂新版)』河出書房新社)
- , 1975, *Surveiller et Punir: Naissance de la Prison*, Gallimard. (=1977, 田村淑訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社)
- , 1976, *La Volonté de Savoir: Volume I de Histoire de la Sexualité*, Gallimard (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社)
- , 1994, *Dits et Ecrits 1954-1988*, Edition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald, Ed. Gallimard, Bibliothèque des sciences humaines, 4volumes. (=2006, 小林康夫・石田英俊・松浦寿輝編『フーコー・コレクション3 言説・表象』筑摩書房)
- Freedman, R., 1986, *Beauty Bound*, D.C. Heath and Company. (=1994, 富田景子訳『美しさという神話』新宿書房)
- 富士川游, 1985, 『迷信の研究』第一書房.
- 藤波芙蓉, 1916, 『美粧』東京社.
- 藤沢衛彦, 1929, 『明治文化史』春陽堂.
- 深谷昌志, 1966, 『良妻賢母主義の教育』黎明書房(→1990, 『良妻賢母主義の教育 増補版』黎明書房).
- 覆面野史, 1909, 『現代男女の研究』現代社.
- Galbraith, J. K., 1958, *The Affluent Society*, Houghton Mifflin Co. (=2006, 鈴木哲太郎『ゆたかな社会』岩波書店)
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity. (=2005, 秋吉美都他訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社)
- Gilman, L.S., 1995, *Picturing Health and Illness: Images of Identity and Difference*. Johns Hopkins University Press. (=1996, 高山宏訳, 『健康と病——差異のイメージ』ありな書房)
- , 1999, *Making the Body Beautiful: A Cultural History of Aesthetic Surgery*, Princeton University Press.
- Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Every Life*, Doubleday Anchor. (=1974, 石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房)
- 後藤吉彦, 2007, 『身体社会学のブレイクスルー——差異の政治から普遍性の政治へ』生活書院.

- 羽太鋭治ほか監修, 1918『應用醫學叢書 第壱編 性慾の話』一橋閣.
- 箱崎孝平, 1914, 『実用美容術指針』芝山本店.
- Hakim, K., 2011, *Honey Money: The Power of Erotic Capital*, Allen Lane. (=2012, 田口美和訳『エロティックキャピタル——すべてが手に入る自分磨き』共同通信社)
- 浜日出夫, 2007, 「歴史と記憶」 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・野村敬志編『社会学』有斐閣: 172-199.
- 長谷川時雨, [1918]1986, 『美人伝(復刻版) 叢書『青路』の女たち 第9巻』不二出版.
- 橋本求, 1964, 『日本出版販売史』講談社.
- 橋爪大三郎, 1995, 『性愛論』岩波書店.
- 旗手勲, 1971, 「幕末・明治初期の写真撮影料」「明治中・後期の写真撮影料」日本写真家協会編『日本写真史 1840-1945』平凡社: 371, 378.
- 服部誠一, 1874, 『東京新繁昌記 初編』山城屋政吉.
- 初田亨, 1981, 『都市の明治——路上からの建築史』筑摩書房(→1994『東京 都市の明治』).
- , 1993, 『百貨店の誕生——明治大正昭和の都市文化を演出した百貨店と勤工場の研究』三省堂.
- , 2004, 『繁華街の近代——都市・東京の消費空間』東京大学出版会.
- 日野龍夫, 1989, 『江戸繁昌記 柳橋新誌 (新日本古典文学大系 100)』岩波書店.
- 平松隆円, 2009, 『化粧にみる日本文化——だれのためによそおうのか?』水曜社.
- 平尾太郎, 1929, 『平尾賛平商店五十年史』平尾賛平商店.
- 平田由美, [1999]2011, 『女性表現の明治史——樋口一葉以前』岩波書店.
- 広末保, 1973, 『境界の悪所』平凡社.
- ひろたまさき, 1990, 「日本近代社会の差別構造」『日本近代思想大系 22 差別の諸相』: 436-516 岩波書店.
- , 1998, 『差別の視線——近代日本の意識構造』吉川弘文館.
- Hisamura Keizirô, 1904, *Collection of pretty girls in Japan*, Keizirô Hisamura
- 宝月理恵, 2010, 『近代日本における衛生の展開と受容』東信堂.
- 本田和子, 1990, 『女学生の系譜——彩色される明治』青土社.
- , 1992, 『江戸の娘がたり』朝日新聞社.
- 細馬宏通, [2001]2011, 『浅草十二階——塔の眺めと〈近代〉のまなざし』青土社.
- 飯沢耕太郎, 1982, 「モダニズムとしての『新興写真』」南博編『日本モダニズムの研究——思想・生活・文化』ブレーン出版: 207-229.
- 今田絵里香, 2007, 『「少女」の社会史』勁草書房.
- 稲葉益巳, 1998, 「美容外科の歩み」『財団法人 日本美容医学研究会 五十年の歩み』, 財団法人日本美容医学研究会: 16-23.
- 井上章一, 1991, 『美人論』リプロポート.
- , 1992, 『美人コンテスト百年史——芸妓の時代から美少女まで』新潮社.
- , [1999]2005, 『愛の空間』角川書店.
- 編, 2007, 『近代日本のセクシュアリティ 23 風俗からみるセクシュアリティ アンソロジー「美人論」の変遷』ゆまに書房.
- 井上道甫編, 1875, 『東京一覧 上』須原屋茂兵衛.

- 井上輝子・女性雑誌研究会編, 1989, 『女性雑誌を解読する』垣内出版.
- 石田あゆ, 2001, 「大正期夫婦人雑誌における女性・消費イメージの変遷:『婦人世界』を中心に」『京都社会学年報』京都大学:55-74.
- , 2004, 「近代日本における女性と消費文化の歴史社会学——明治・大正・昭和の婦人雑誌メディアの分析を通じて」京都大学博士論文.
- , 2015, 『戦時婦人雑誌の広告メディア論——越境する近代』青弓社.
- 石田かおり, 2009, 『化粧と人間——規格化された身体からの脱出』法政大学出版局
- 石橋武彦, 1971, 『修身教科書に現れた保健体育思想の研究』不昧堂出版.
- 石川淳, 2007, 「江戸人の発想法について」, 菅野昭正編『石川淳評論選 (石川淳コレクション3)』筑摩書房:88-102(初出:『思想』1943年3月号).
- 石川松太郎編, 1977, 『女大学集(東洋文庫 302)』平凡社.
- 石井寛治, 1970, 「日本資本主義の確立」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史 第6巻 日本帝国主義の形成』東京大学出版会:171-210.
- 今田高俊, 2001, 『意味の文明学序説——その先の近代』東京大学出版会.
- 伊藤俊治, 1987, 『〈写真と絵画〉のアルケオロジー』白水社.
- , 1992, 『寫眞史』朝日出版社.
- 伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ編, 2010, 『モダンガールと植民地的近代——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店.
- 井桜直美, 2012, 「東京百美人——凌雲閣で始まった日本の美人コンテスト」小沢健志監修『レンズが撮らえた幕末明治の女たち』山川出版社:82-119.
- 和泉あき, 1986, 「長谷川時雨著『美人伝』解説」長谷川時雨 1918=1986『美人伝(復刻版) 叢書『青踏』の女たち 第9巻』不二出版:1-12.
- 神野由紀, 1994, 『趣味の誕生—百貨店がつくったテイスト』勁草書房.
- , 2002, 「近代日本と流行——社会の近代化に伴う流行の変質について」『デザイン学研究. 特集号』9(4):13-20.
- , 2006, 「都市の消費者となった女性たち——消費社会における女性イメージの検討」『現代風俗学研究』12:28-36.
- , 2008, 「近代日本における消費と男性——ファッション消費をめぐる言説を中心に」『デザイン学研究. 特集号』16(1):8-13.
- 亀井秀雄, 1984, 『身体・この不思議なるものの文学』れんが書房新社.
- 亀井武, 1991, 『日本写真史の落穂拾い』日本写真協会.
- 鹿野政直, 1998, 『婦人・女性・おんな』岩波書店.
- , 2001, 『健康観にみる近代』朝日新聞社(2008, 『鹿野政直思想史論集 第5巻』所収, 岩波書店).
- 神崎宣武, 1993, 『盛り場の民族史』岩波書店.
- 鹿島茂, 1991, 『デパートを発明した夫婦』講談社.
- 柏木博, 1987, 『肖像のなかの権力——近代日本のグラフィズムを読む』平凡社.
- 葛山泰央, 2000, 『友愛の歴史社会学——近代への視角』岩波書店.
- 加藤政洋, 2005, 『花街——異空間の都市史』朝日新聞社.
- 河原和枝, 2005, 『日常からの文化社会学——私らしさの神話』世界思想社.

- 川村邦光, 1990, 『幻視する近代空間——迷信・病氣・座敷牢、あるいは歴史の記憶』青弓社.
- , 1993, 『オトメの祈り——近代女性イメージの誕生』紀伊國屋書店.
- , 1994, 『オトメの身体——女の近代とセクシュアリティ』紀伊國屋書店.
- , 1996, 『セクシュアリティの近代』講談社.
- , 2003, 『オトメの行方——近代女性の表象と闘い』紀伊國屋書店.
- , 2009, 「変態するナオミ——モダンガールの身体とセクシュアリティ」『セクシュアリティの表象と近代 ビジュアル近代シリーズ』臨川書店 49-113.
- 木村絵里子, 2006, 「経験者のライフストーリーからみる美容整形——容姿に関するコンプレックスに焦点を当てて」『現代風俗学研究』第 12 号:46-54.
- , 2013, 「『女学世界』における女性美のディスコース——1901 年～1925 年の広告分析から」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第 19 号:17-35.
- , 2016, 「〈皮膚〉へのまなざし——20 世紀初頭における衛生学と〈女性美〉」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第 22 号:63-77.
- , 2016, 「近代的「恋愛」再考——『女学雑誌』における「肉体」の二重性」川崎賢一・浅野智彦編『〈若者〉の容解』勁草書房:111-145.
- 木村涼子, 2000, 「『主婦アイコン』の誕生——美人画と婦人雑誌」『人間関係論集』17 号:73-99.
- , 2010, 『〈主婦〉の誕生——婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.
- 木下直之, 1996, 『写真画論 岩波 近代日本の美術4』岩波書店.
- 近代女性文化史研究会編, 1985a, 『近代婦人雑誌目次総覧 第6巻』大空社.
- , 1985b, 『近代婦人雑誌目次総覧 第7巻』大空社.
- , 1985c, 『近代婦人雑誌目次総覧 II 期 第9巻』大空社.
- , 1985d, 『近代婦人雑誌目次総覧 II 期 第10巻』大空社.
- 岸井良衛, [1974]2011, 『女藝者の時代』青蛙房.
- 北田暁大, 1998, 「〈私的な公共圏〉をめぐる——1920～30 年代「婦人雑誌」の読書空間」『東京大学社会情報研究所紀要』56:156-181.
- , [2000]2008, 『〈広告〉の誕生——近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店.
- 北原十三男, 1910, 『自ら施し得る美顔法』紫明社.
- 北山晴一, 1991, 『おしゃれの社会史』朝日新聞社.
- , 1999, 『衣服は肉体になにを与えたか——現代モードの社会学』朝日新聞社.
- 北澤一利, 2000, 『健康の日本史』平凡社.
- 小平麻衣子, 2008, 『女が女を演じる——文学・欲望・消費』新曜社.
- 小檜山ルイ, 2010, 「『婦人之友』における洋装化運動とモダンガール」伊藤るり・坂本ひろ子編『モダンガールと植民地近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店:175-202.
- 国立歴史民族博物館編, 2000, 『よそおいの民族誌——化粧・着物・死装束』慶友社.
- 駒尺善美, 1985, 『女を装う』勁草書房.
- 古庄ゆき子, 1987, 『資料 女性史論争』ドメス出版.
- 小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』勁草書房.
- , 1999, 『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房.
- , 2005, 「解題」『女学世界 明治期復刻版』柏書房.
- 監修, 2005, 『女学世界 明治期復刻版』柏書房.

- 監修, 2005, 『女学世界 大正期復刻版』柏書房.
- 小山有子, 2009, 「和服改良論と「女性美」——明治後期の女性の服装とその規範性をめぐって」荻野美穂編『<性>の分割線——近・現代日本のジェンダーと身体』青弓社: 57-93.
- 久下司, 1970, 『化粧』法政大学出版局.
- 邦光史朗・藤井宋哲, 1984, 「岩崎弥太郎 幻の写真コレクション」鈴木健二編『歴史への招待 29』日本放送出版.
- 草柳大蔵・岩崎爾朗編, 1991, 『20 世紀フォトドキュメント 第3巻 生活と風俗』ぎょうせい.
- Lash, S., 1990, *Sociology of Postmodernism*, Routledge. (=田中義久監訳『ポスト・モダニティの社会学 叢書・ユニベルシタス 563』法政大学出版局)
- 前田愛, 1982, 『都市空間のなかの文学』筑摩書房.
- , 1993, 『近代的読者の成立』岩波書店.
- 前島志保, 2012, 「消費、主婦、モガ—近代的消費文化の誕生と「良い消費者／悪い消費者」の境界について」神奈川大学人文学研究所編『〈悪女〉と〈良女〉の身体表象』: 青弓社 116-198.
- マッキー・V, 2010, 「宗主国のまなざし」(菅沼勝彦訳)伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ編, 2010, 『モダンガールと植民地的近代——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店: 91-116.
- 松本健太郎, 2014, 『ロラン・バルトにとって写真とは何か』ナカニシヤ出版.
- 松本徳彦, 1985, 小沢健志他編『日本写真全集 1 写真の幕開け』小学館: 159-162.
- 松村介石, 1893, 『婦人のかみ』警醒社.
- 三橋修, 1999, 『明治のセクシュアリティ——差別の心性史』日本エディタースクール出版部.
- 三鬼浩子, 1989, 「明治婦人雑誌の軌跡」『婦人雑誌の夜明け』大空社.
- , 2002, 「女性雑誌における売薬広告」『メディア史研究』13 号: 110-129.
- 南博・社会心理研究所, 1965, 『大正文化 1905-1927』勁草書房.
- 南博編, 1982, 『日本モダニズムの研究——思想・生活・文化』ブレーン出版.
- 南博ほか編, 1986, 『服飾・美容・儀礼 近代庶民生活誌 第5巻』三一書房.
- , 1995, 『病気・衛生 近代庶民生活誌 第20巻』三一書房.
- 三田村真喜, 1894, 『美人——一名・男女化粧法』美人社.
- 三橋順子, 2008, 『女装と日本人』講談社.
- 三浦豊彦, 1980, 『労働科学叢書 52 労働と健康の歴史 第二巻』労働科学研究所.
- 水尾順一, 1991, 『化粧品のブランド史』中央公論社.
- 桃谷順天館創業百周年記念事業委員会編, 1985, 『桃谷順天館創業百年記念史』桃谷順天館.
- 森種太郎(刈城), 1893, 『衛生美身術(寸珍百種第34編)』博文館.
- , 1916, 『肺病の話』森分院.
- , 1930, 『妊娠の悪阻の原因と其新治療法』森種太郎.
- 村上信彦, 1955→1974a, 『服装の歴史 第1巻 キモノが生まれるまで』理論社.
- , 1955→1974b, 『服装の歴史 第2巻 キモノの時代』理論社.
- , 1956→1974, 『服装の歴史 第3巻 ズボンとスカート』理論社.
- , 1957, 『女の風俗』ダヴィット社.
- , 1969, 『明治女性史 上巻』理論社.
- , 1970a, 『明治女性史 中巻 前篇』理論社.

- , 1970b, 「女性史研究の課題と展望」『思想』549 岩波書店(→古庄編 1984 再録).
- , 1971, 『明治女性史 中巻 後篇』理論社.
- , 1972, 『明治女性史 下巻』理論社.
- , 1982, 『大正女性史 上巻』理論社.
- , 1983, 『大正期の職業婦人』ドメス出版.
- 村上雍子, 1995, 「女性美と時代——『婦人公論』における女性風俗記事」『婦人雑誌にみる大正期——『婦人公論』を中心に』近代女性文化史研究会:66-80.
- 村澤博人, 1987→1992, 『美人進化論—顔の文化誌』東京書籍.
- 牟田和恵, 1996, 『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社.
- 永嶺重敏, 1997, 『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部.
- 中野香織, 2010, 『モードとエロスと資本』集英社.
- 波平恵美子, 1984, 『病氣と治療の文化人類学』海鳴社.
- 難波功士, 1998, 『「打ちてし止まむ」——太平洋戦争と広告技術者たち』講談社.
- 成田龍一, 1990, 「衛生環境の変化のなかの女性と女性観」『日本女性生活史4 近代』東京大学出版会:89-124.
- , 1993, 「衛生意識の定着と『美のくさり』—1920 年代、女性の身体をめぐる一局面」『日本史研究』日本史研究会:64-89.
- , 1995, 「身体と公衆衛生——日本の文明化と国民化」歴史学研究会編『講座世界史4 資本主義は人をどう変えてきたか』東京大学出版会:375-401.
- , 1994, 「性の跳梁——1920 年代のセクシュアリティ」脇田晴子・S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史 上 ——宗教と民族 身体と性愛』東京大学出版会:523-564
- , 1996, 「文明／野蛮／暗黒」吉見俊哉編『都市の空間・都市の身体 21 世紀の都市社会学 第4巻』勁草書房:27-55.
- , 2001, 『歴史学のスタイル——史学史とその周辺』校倉書房.
- , 2003, 『近代都市空間の文化経験』岩波書店.
- , 2006, 『歴史学のポジショナリティ——歴史叙述とその周辺』校倉書房.
- , 2012, 『近代日本史と歴史学』中央公論社.
- , 2014, 「総力戦とジェンダー」大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗編『新 体系日本史9 ジェンダー史』山川出版社:346-398.
- 成井武三郎編, 1890, 『男女必携容儀之栞』備後屋書房.
- 成沢光, 1997, 『現代日本の社会秩序——歴史的起源を求めて』岩波書店.
- 成島柳北=日野龍夫(校注), [1859]1989, 『柳橋新誌(初編)』(復刻版、新日本古典文学大系 100) 岩波書店.
- 成島柳北=日野龍夫(校注), [1871]1989, 『柳橋新誌(二編)』(復刻版、新日本古典文学大系 100) 岩波書店.
- 日本美容理容教育センター, 1970, 『美容現代史』.
- 西川長夫, 1995, 「日本型国民国家の形成——比較史観点から」西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治の国民国家形成と文化変容』新曜社:3-42.
- , 1998, 『国民国家論の射程——あるいは「国民」という怪物について』柏書房.
- 西川長夫・渡辺公三編, 1999, 『世紀転換期と国際秩序と国民文化の形成』柏書房.

- 西川祐子, 2000, 『近代国家と家族モデル』吉川弘文館.
- , 2005, 「近代家族と国家」田中真砂子・白石玲子・三成美保『国民国家と家族・個人 (シリーズ比較家族第Ⅲ期 3)』早稲田大学出版部:3-
- 西倉実季, 2006, 「美容整形を読み解く」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣:166-168.
- 西村清和, 1997, 『写真の物語・写真の哲学』講談社.
- 野家啓一, 1996, 『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』岩波書店.
- 野上元・小林多寿子, 2015, 『歴史と向き合う社会学——資料・表象・経験』ミネルヴァ書房.
- 野崎左文 (憑空逸史評)ほか, 1881, 『東京粹書 初編』粹文社.
- 落合恵美子, 1989, 『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
- 小田垣鉄治郎, 1888, 但海編『内外名医万法秘術 人間生涯之宝』大和屋.
- 小川菊松, 1962, 『日本出版界のあゆみ』誠文堂新光社.
- 荻原乙彦, 1874, 『東京開化繁昌誌 第二卷(卷之下)』万青堂.
- 荻野美穂, 2002, 『ジェンダー化される身体』勁草書房.
- 小倉千加子, 1988, 『セックス神話解体新書——性現象の深層を衝く』学陽書房.
- , 1994, 『女の人生すごろく』筑摩書房.
- , 2003, 『結婚の条件』朝日新聞社.
- 岡部昌幸, 2012, 「『美人写真』の誕生と隆盛——美人画の美意識のうえに発達した写真技術」小沢健志監修『レンズが撮らえた幕末明治の女たち』山川出版社:18-23.
- 岡塚章子, 2001, 「再考 明治期の写真・小川一真への視線」『現代の眼:東京国立近代美術館ニュース』528号:5-7.
- , 2009, 「小川一真撮影『凌雲閣百美人人工着色写真アルバム』についての考察」東京都江戸東京博物館歴史研究室編『東京都江戸東京博物館報告書』15号:95-105.
- , 2012, 「明治期における写真文化の発展に小川一真が果たした役割について」『鹿島美術財団年報』別冊:2012年度版 30号:433-443.
- 奥武則, 1995, 「『国民国家』の中の女性——明治期を中心に」奥田暁子編『女と男の時空——日本女性史再考V 闘ぎ合う女と男——近代』藤原書店:423-450.
- 小野芳郎, 1997, 「〈清潔〉の近代——「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ」講談社.
- 大橋又太郎編, 1897, 『秘術伝法(日用百科全書第24編)』博文館.
- 大島洋編, 1993, 『写真家の誕生と19世紀写真 写真家の時代1』洋泉社.
- , 1994, 『記録される都市と時代 写真家の時代2』洋泉社.
- 大矢全節, 1956, 「皮膚科学史」『日本皮膚科全書 13巻』金原出版.
- 岡満男, 1981, 『婦人雑誌ジャーナリズム——女性解放の歴史とともに』現代ジャーナリズム出版会.
- 長志珠恵, 2014, 「国民化とジェンダー」大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗編『新 体系日本史9 ジェンダー史』山川出版社:301-345.
- 尾崎耕司, 2005, 「近代国家の成立——軍隊・学校・衛生」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座8 近代の成立』東京大学出版会:55-86.
- 小沢健志, 1986, 『日本の写真史——幕末の伝播から明治期まで』ニコールクラブ. (→1997, 『幕末・明治の写真』筑摩書房)
- 小沢健志監修, 2012, 『レンズが撮らえた幕末明治の女たち』山川出版社.

- 小沢清, 1994, 『写真界の先覚 小川一真の生涯』日本図書刊行会.
- ポーラ研究所, 2009, 『幕末明治 美人貼』新人物往来社.
- 歴史学研究会編, 1994, 『国民国家を問う』青木書店.
- 佐伯順子, 1992, 「春信美女の秘密」中村真一郎・小林忠・佐伯順子・林美一編『春信 美人画と艶本』新潮社:75-81.
- , 1993, 「『美人』の時代」芳賀徹編『文明としての徳川日本』:415-441 中央公論社.
- , 1998, 『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店.
- , 2012, 『明治<美人>論——メディアは女性をどう変えたか』NHK 出版.
- 嵯峨景子, 2009, 「『女学世界』における「投書」の研究」『情報学研究: 学環: 東京大学大学院情報学環紀要』77 号:95-110.
- , 2011, 「『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容——大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に」『マス・コミュニケーション研究』78 号:129-147.
- 斎藤美奈子, 2000, 『モダンガール論——女の子には出世の道が二つある』マガジンハウス.
- 坂本佳鶴恵, 2010, 「洋装化と女性雑誌——戦前の関与」『お茶の水女子大学人文科学研究』:123-134).
- , 2014, 「戦前期女性雑誌における口絵写真の分析——『婦人世界』および『主婦之友』から」『お茶の水女子大学人文科学研究』:97-109.
- 佐久間りか, 1995, 「写真と女性——新しい視覚メディアの登場と『見る／見られる』自分の出現」奥田暁子編『女と男の時空——日本女性史再考Ⅴ 闘ぎ合う女と男——近代』藤原書店:187-237.
- 佐藤健二, 1987, 『読書空間の近代』弘文堂.
- , 1994, 『風景の生産・風景の解放』講談社.
- , 2001, 『歴史社会学の作法——戦後社会科学批判 現代社会学選書』岩波書店.
- , 2016, 『浅草公園凌雲閣十二階——失われた<高さ>の歴史社会学』弘文堂.
- 佐藤俊樹, 1998, 「近代を語る視線と文法」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会:65-98.
- , 2006, 「閥のありか——言説分析と「実証性」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から シリーズ 社会学のアクチュアリティ:批判と創造5』:3-25.
- 佐山半七丸=高橋雅夫(校注), [1813]1982, 『都風俗化粧伝』(復刻版、東洋文庫 414) 平凡社.
- 仙波千枝, 2008, 『良妻賢母の世界——近代日本女性史』慶友社.
- Scott, J. W., 1988, *Gender and the Politics of History*, Columbia Univ.Press. (=1992, 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社)
- 柴田一郎, 1908, 『美顔術独習』今古堂.
- 柴田三治郎編, 1891, 『容儀衛生 治病新法』鴻益堂.
- Shilling, C., 1993, *The Body and Social Theory*, Sage.
- 篠田正作, 1894, 『女子修身美談』鐘.
- 新村拓, 2006, 『健康の社会史——養生、衛生から健康増進へ』法政大学出版局.
- 資生堂, 1972, 『資生堂百年史』資生堂.
- 嘯風吟月楼主人, 1891, 『貴女のたから』細謹舎.
- Simmel, G., 1900, Die Frau und die Mode. *Das Magazine. Monatszeitschrift für Literatur, Musik,*

- Kunst und Kultur*, 77. Jg., No.5, 1908. (=1999, 北川東子編訳・鈴木直訳「女性と流行」『ジメル・コレクション』筑摩書房)
- , 1903, “Die Grosstädte und das Geistesleben.” *Jahrbuch der Gehe-stiftung zu Dresden* 9 (in *Brüche und Tür: Essays des Philosophen zur Geschichte, Religion, Kunst und Gesellschaft*, K. F. Koehler). (=2011, 松本康訳「大都市と精神生活」松本康編『近代アーバニズム 都市社会学セレクション 第1巻』日本評論社)
- , 1919, *Philosophische Kultur*. Zweite um einige Zusätze vermehrte Auflage. Alfred Kröner Verlag. (=1976→1994→2004, 円子修平・大久保健治訳『文化の哲学』(ジメル著作集7)白水社)
- 捉風山人, 1889, 『諷誠 妙々奇法』長瀬寛二.
- Stephen, K., 1975, *Anatomy and Destiny: A cultural History of the Human Body*, Bobbs-Merrill. (=1977, 喜多迅鷹・喜多元子訳, 『肉体の文化史——体構造と宿命』法政大学出版)
- 陶智子, 2005, 『江戸美人の化粧術』講談社.
- 鈴木英雄, 2001, 『勸工場の研究』創英社.
- 鈴木貞美, 1992, 『モダン都市の表現——自己・幻想・女性』白地社.
- 鈴木正幸, 2006, 「近代国家への道」宮地正人・佐藤信・五味文彦・高埜利彦編『新体系日本史1 国家史』山川出版社: 427-454.
- , 2006, 「帝国日本の形成・変容・崩壊」宮地正人・佐藤信・五味文彦・高埜利彦編『新体系日本史1 国家史』山川出版社: 455-486.
- 鈴木則子, 2003, 「江戸時代の化粧と美容意識」『女性史学』(13): 1-17
- 編, 2014, 『歴史における周縁と共生——女性・穢れ・衛生』思文閣出版.
- 高橋晴子, 2005, 『近代日本の身装文化——「身体と装い」の文化変容』三元社.
- , 2007, 『年表 近代日本の身装文化』三元社.
- 高橋雅夫, 1982, 「解説」佐山半七丸＝高橋雅夫(校注)[1813]1982『都風俗化粧伝』(復刻版、東洋文庫 414)平凡社.
- , 1985, 「江戸時代の化粧書」西山松之助・古稀記念会編『江戸の芸能と文化』吉川弘文館.
- , 1997, 『化粧ものがたり 赤・白・黒の世界』雄山閣出版.
- 竹内洋, 1995, 「教育社会学における歴史研究——ブームと危うさ」『教育社会学研究』57: 5-22
- 多木浩二, 1982, 『眼の隠喩——視線の現象学』青土社.
- , 1988, 『天皇の肖像』岩波書店.
- , 1993, 「写真家の誕生——発明家から写真家へ」大島洋編『写真家の誕生と 19 世紀写真 写真家の時代1』洋泉社: 5-34.
- , 1994, 『都市の政治学』岩波書店.
- , 2000, 『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波書店.
- , 2007, 『肖像写真——時代のまなざし』岩波書店.
- 滝沢利行, 1993, 『近代日本養生論・衛生論集成 別巻 近代日本健康思想の成立』大空社.
- 高群逸枝, 1966, 『高群逸枝全集 第5巻 女性の歴史 2』理論社.
- 玉木広治編, 1908, 『欧米最新美容法』東京美容院.
- 田中雅夫編, 1986, 『日本写真全集 5 人物と肖像』小学館.

- 田中優子, 2007, 『芸者と遊び——日本的サロン文化の盛衰』学習研究社.
- 谷本奈穂, 2008, 『美容整形と化粧の社会学——プラスチックな身体』新曜社.
- 鳥越文蔵・内山美樹子・渡辺保編, 1997, 『岩波講座 歌舞伎・文楽 (第2巻)』岩波書店.
- 坪谷善四郎編, 1937, 『博文館五十年史』博文館.
- 土屋礼子, 1999a, 「百貨店発行の機関雑誌」『百貨店の文化史——日本の消費革命』世界思想社:223-252.
- , 1999b, 「百貨店発行の逐次刊行物リスト」『百貨店の文化史——日本の消費革命』世界思想社:309-317.
- 津田紀代・村田孝子編, 1986, 『モダン化粧史——装いの80年』ポーラ研究所.
- 塚本はま子, 1900, 『家事教本』金港堂.
- , 1906, 『実践家政学講義』参文舎・積文社.
- 筒井清忠, 1990, 『「近代日本」の歴史社会学』木鐸社.
- , 1999, 『日本の歴史社会学』岩波書店.
- Turner, B. S., 1984, *Body and Society: Explorations in Social Theory*, Basil Blackwell.(=1999, 藤田弘人他訳『身体と文化——身体社会学試論』文化書房博文社)
- 内川芳美編, 1976, 『日本広告発達史(上)』電報通信社.
- 上野千鶴子, 1987→1992, 『〈私〉探しゲーム——欲望私民社会論』筑摩書房.
- , 1991, 「女性史と近代」吉田民人編『社会学の理論でとく 現代のしくみ』新曜社:299-313.
- , 1994, 『近代家族の成立と終焉』岩波書店.
- , 1995, 「歴史学とフェミニズム——女性史を超えて」『岩波講座 日本通史 別巻1』岩波書店:149-184.
- , 1998, 『ナショナリズムとジェンダー』青土社.
- 内田隆三, 1987, 『消費社会と権力』岩波書店.
- , 1993a, 「資本のゲームと社会変容」『ゆらぎのなかの社会科学 岩波講座 社会科学の方法 第I巻』岩波書店:237-265.
- , 1993b, 「ソフトな管理の変容——家庭の生成と臨界点」『システムと生活世界 岩波講座 社会科学の方法 第VIII巻』岩波書店:201-238.
- , 1994, 「資本の言説としての〈肌〉」『現代思想』22(14)青土社:246-256(→1999「言説としての〈肌〉」『生きられる社会』新書館:134-159).
- , 1994, 「資本主義と権力のエピステーメ」『思想』12月号:18-35.
- 若林幹夫, 1996, 「空間・近代・都市——日本における〈近代空間〉の誕生」吉見俊哉編『都市の空間・都市の身体 21世紀の都市社会学 第4巻』勁草書房:1-26.
- , 2000, 『都市の比較社会学 現代社会学選書』岩波書店.
- 若桑みどり, 1995, 『戦争がつくる女性像』筑摩書房.
- , 1997, 『隠された視線 岩波 近代日本の美術2』岩波書店.
- , [2000]2012, 『イメージの歴史』筑摩書房.
- 渡辺秀樹編, 2007, 『東京遊覧——明治・大正・昭和の日本』日本文芸社.
- 渡部周子, 2007, 『〈少女〉像の誕生——近代日本における「少女」規範の形成』新泉社.
- Wolf, N., 1991, *The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women*,

- Milliam Morrow. (=1994 曾田和子訳『美の陰謀』TBSブリタニカ)
- 安村敏信, 2002, 「美人画の変遷」『日本美人画一千年史』人類文化社.
- 山田登世子, 『ファッションの技法』講談社.
- 山之内靖, 1995, 「方法的序論——総力戦とシステム統合」山之内靖、成田龍一、V・コシュマン編『総力戦と現代化』柏書房:9-53.
- , 2015, 伊豫谷登士翁・成田龍一・岩崎稔編『総力戦体制』筑摩書房.
- 柳田國男, 1979, 『明治文化史 第13巻 風俗』原書房.
- 柳洋子, 1997, 『キーワードでみるファッション化社会史』ぎょうせい.
- 米田佐代子, 1972, 『近代日本女性史』(上・下)新日本出版社.
- 米澤泉, 2008, 『コスメの時代——「私遊び」の現代文化論』勁草書房.
- , 2010, 『私に萌える女たち』講談社.
- , 2012, 「卒業のない女子校——ファッション誌における「女子」」「女子」の時代!』青弓社:37-58.
- , 2014, 『「女子」の誕生』勁草書房.
- 吉見俊哉, 1987→2008, 『都市のドラマトゥルギー——東京・盛り場の社会史』河出書房新社.
- , 1992, 『博覧会の政治学』中央公論社.
- , 1994, 『メディア時代の文化社会学』新曜社.
- , 1996, 「近代空間としての百貨店」吉見俊哉編『都市の空間・都市の身体 21世紀の都市社会学 第4巻』勁草書房:137-164.
- , 2002a, 「1930年代論の系譜と地平」吉見俊哉編『1930年代のメディアと身体』青弓社.
- , 2002b, 「[総説]帝都東京とモダニティの文化政治——1920・30年代への視座」小森陽一・酒井直樹・島藺進・千野香織・成田龍一・吉見俊哉編『岩波講座 近代日本の文化史6 拡大するモダニティ』岩波書店:1-61.
- , 2007, 「帝都とモダンガール——両大戦間期における〈近代〉と〈性〉の空間政治」バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生——戦間期日本の文化変容』柏書房:228-250.
- 吉沢智恵子, 1995, 「商業婦人雑誌の質的変遷について——明治後期より大正期へ」近代女性文化史研究会編『婦人雑誌にみる大正期——『婦人公論』を中心に』:1-11.
- 吉澤夏子, 1997, 『女であることの希望——ラディカル・フェミニズムの向こう側』勁草書房.
- , 2012, 『「個人的なもの」と想像力』勁草書房.
- , 2014, 「消費社会とジェンダー」大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗編『新 体系日本史9 ジェンダー史』山川出版社:399-441.
- Young, L., 2007, 「『近代』を売り出す——戦間期の百貨店、消費文化そして新中間層」バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生——戦間期日本の文化変容』柏書房:199-227.
- 湯沢雍彦, 2015, 『明治の結婚明治の離婚——家庭内ジェンダーの視点』角川書店.